26-355イ
1200501241668
26
55

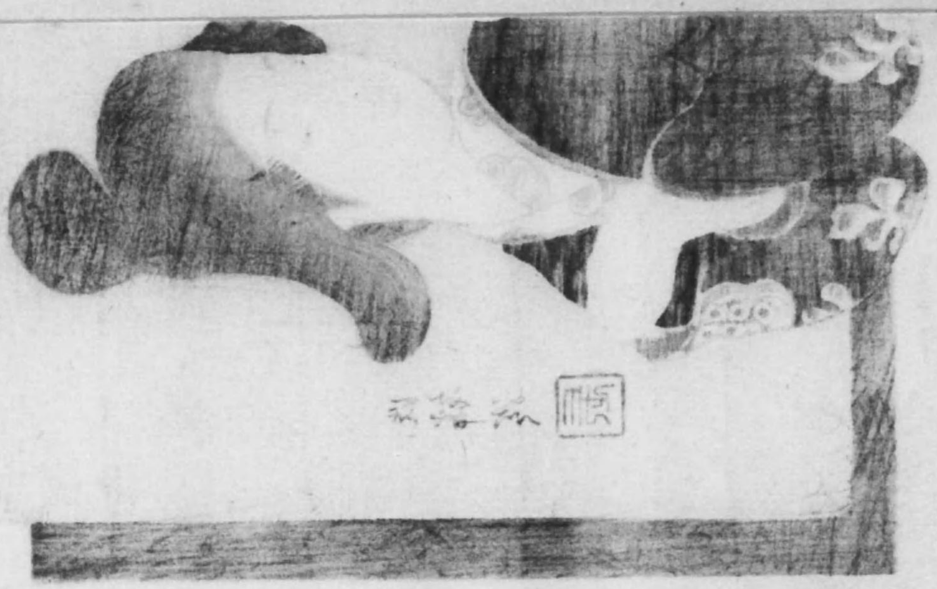
始

26-355イ

大石良雄

後編

塚原澁柿著



大石良雄後篇

塚原澁柿

上

（一）

大石内蔵助は、伊豫の三津が濱で主税に別れて、自個は別仕立の海船に取乘つて、正月廿二日の薄暮に廣島に着て。其夜竊かに藝州家の家老太田七郎右衛門が許を音訪れた。

彼れ七郎右衛門は藝州國詰の上席の家老である。此夜大石との膝を割ての談合の機密と云ふをば、未だ容易く他人をして其の蘊底を叩かしむるを許さぬが。兎に角要領を得たらしい内蔵助は、其の翌日此地を辭して歸路にと上つた。が生憎くや彼の出水に妨遏げられて、途中の滯留九日にして、二月の二日、漸く赤穗に復歸つたのである。

歸宅をしたとて休息の沙汰どころでは無い急ぎの内蔵助。其日直さま登城に及むで、詰所に通つて。「大野は？」と問くと。「九郎衛殿は唯今まで御座りましたが、急に持病の疝癪とかで御退散。」と坊主が云ふ。「金奉行の前原は？」と再た問へば。此は前頃からの熱病で、

未だ出仕も。」と頭を抓く。

「然らば、勘定方の岡島は？」

「八十衛殿は在らしやれます。」

「では、呼べ。」

畏まつて坊主は出て行くと。旋て慌遽しく入つて來たのは其の岡島八十右衛門である。彼は年齢三十五六の身材六尺にも垂き巨漢、腕脛節松の如くとあるが、其の職務は懐中の豆算盤に三厘五厘の出納を吟味する勘定方で、前にも云ふ札座の奉行をも兼て居る。——仁王の飯事、餘りに其れが不似合であると傍邊でも哂笑ふが。當人も同じく、筆把つての御奉公より槍柄握つての勤仕をと望むで歇ぬのを。何事も主君の御爲、貴樣が其の銅鑼聲と皿大眼で彼處に座居らねば御國の帳尻が亂雜になる。勤向を筆取るとのみ思はゞ大きに差違うぞ、繩取つて彼奴等を縛る其の覺悟が肝要ぞ。とは實の兄なる原總右衛門が強ての意見、其の縛るべき「彼奴等」と云ふのは大野父子と彼等が手先に使役はるゝ諸々の小役人輩。然れば彼は、或る意味からは盗兒を取締るとき捕手役で。捕手と盗賊とは其の利害の點に於いて大分違うから、それで岡島と大野等とは日來から犬と猿との交である。

「や、内藏殿、何時御歸着で？」

と八十右衛門は喜ばしさに其の皿大といふ巨眼を細くして、然も鑑聲をば鳴り立てた。

「今程戻つた。——扨て長々の留守中、變る義もござらんか。」

「いや御座ります。途轍も無い義が起りまいてな。貴所御歸着を今かと我等待ちよりました。」

然もこそとの大石は、忙しく其膝を搖り寄せると。別事とも無き其は主税が注進にて知る、殿の御馳走役。其に續いての六千兩——彼の藤兵衛と軍右衛門とが御金警護の一條であつた。

「むう、其義我等も粗承知じやが。然て九郎衛は何う計うた。」

「其の計ひが不審に堪へませぬ。——原來が貴所御留守みりや物頭の衆中もおりやれる事、右へ一應相談あつて、扨て我等勘定方へ其の下調を申し附らるゝが本文じやに。然樣の義とも曾て無し。——藤兵衛が着く。其夜を自宅に留め置いて翌朝軍右が御庫へ參つて、目附へも不沙汰、——引摺り出いたを梱荷にして狐鼠々々と江戸へと參る。——其も其の出立を存知たは主税殿御通知からで、其れが無けらにや我々は月夜に釜じや。地體が盗賊に

等しい所業――。」

「で、其後を甚麼とお爲れた？」

内藏助は其を聞きたい、岡島も亦た話したいので、

「我等翌日、鞫問に出申した。」　と拳を扼る。

「むゝ、鞫問？何じやと言うた？」

「聞かれませい、手紙の見せまする……。」

「誰の書通を？」

「えい、江戸の安井藤井雨所の書面をな。――奉書でおざりまする。――殿様、今度御馳走役仰付させられたるに就ては莫大の御物入り、當表御手許御手薄につき其地御庫金の内六千兩、火急御差立、――此義殿様御指圖として我々共急々御意得るとの趣で……。」

「むう。では其の書面、あの手許にか？」

「えい。で其を炫らかす。――で、我等も何とも早や……。」

「はゝあ、其を證據かな。――可也。もう分解つた。――こりや穩便に爲ッしやるじやぞ。」

眉を顰めた内藏助は、徐に手を掉つた。

「ではお座りませうも其の手續が……。」

「ハレ枝葉な。措きやれ〳〵。――今暫くじや……。」

（二）

驚愕くと迄には無いが、大石は深く考慮へた。「殿が御指圖――火急差立」との證據の書面が彼れ九郎兵衛の手にある以上は、此は迂可とは手を着すべきで無い、と逸る心を抑止めた。即ち、先方にも其れ程の用意があれば、此方にも其に應ずる準備が要る。先んずれば人を制すと云ふなれども、今は早や既に敵に一着を瞰されたのであるから、當方は後先の先をと心懸けて、彼等の破綻を待つ外は無いのである。と彼は疾くも分別を決着たので。

では有るが、其の破綻と云ふは甚だ願はしからぬ次第であつて。彼の六千兩、是れが眞に殿の御用に立つとなれば重疊のである。――とは云ふものゝ此の大枚なる金子。此が疆界の警固とか、新田の開發、鹽濱の取立、其他武備とか、領民の利益とか、總てが着實な用途に費さるゝ資本ともあらば些も愛惜ぬが。不要らん四品の侍從、――其も先例も無きことに注入まれる。獲られた所が甚麼の益、不獲となれば世間の笑柄。憶へば危險い、――其の危險い次第を此程も沁々申し進せたものゝ。あゝ、では依様那の御一途で、其の謀叛

の勝負と云ふに御身を打込まれたと有るのかい！――其にしても金額が餘りに過多いが、蓋是彼等の機巧か喃？

其の機巧か否。全般の模樣は遠からず主稅方より差越すべき書面にて判明うが。――吁、其にしても此の大事の際に、予が下向らで、彼の若輩者を名代にしたのは失措である。――嗟、落度であつた。と內藏は今更ら國元の取締にのみ重きを置て、江戸の始末を二の次にしたる其の脫落を、悔ひたが、悔ひたが、竟に及ばぬ。其は其の以來、彼れ九郎兵衞は、病氣頗ふる重體と云ふので一日も出仕せぬ。二人の家老の其の一人が大病とあるのを見棄ての江戸行は、御法に於ても協らぬ事。況んや主人からの命令と有るでも無し。江戸に當向き急變の見えたでも無し。口實も趣意も無い其れや此れやで、然しもの智慧者も取つ舍つと云ふ中に半月を過して。一方には江戸の便りを、一方には國許の內端から火事を出さぬの、其の用心に氣をのみ配る。

見る空もない庭の梅が香も早いは既う散つて、彼岸櫻も唇を綻いて、菜種の花も畑にちらほら、芳きを逐ふ蝶の翅も、人の袂も稍輕らかと云ふ二月も中の七日となつた。

千種川の堤は蒲公英に菫花、水温む崖下には紫雲英の花盡し。土筆摘みにと少婢交りに今

朝から出て行つた三男の大三郎が慌てた樣に駈戻つて來て、

「御父樣、蜂が！」

と、內藏助が居間の敷居際に突立つた儘、目を睜つた。

「ふう、蜂が何うか爲たか喃。」　と看顧ると。

「……喧嘩しまして。」　と指を指す。

「ふゝ其れは惡い蜂。――誰ぞ整されて？」

と父は又た笑ひと、小兒は眞顏で、

「……整れはしませんの。蜂同志喧嘩しましたの！」　と其のくり〳〵とした目を再も圓睜げる。

何やらむ事有り氣とは思はれるも、其が七才兒の口であるから確とは聽き難ねて、

「ふゝ蜂でも、人でもの、喧嘩しては善う無いのじやぞ。ぢやから其方も温順しう――喃。」

と言ひながら調物に又た掛らうと爲る。

「いや旦那、希有な事でおざります。坊樣の今言はしやれるは蜂合戰で……。」

と、大三郎の背後から首を出すのは、年來此家に召使はれて、正直者の頑固爺と評判を取

つた瀬尾孫左衛門。彼は苦々しい面をして、

「……不思議と云へば不思議で喃う、蜂合戰！――いや城なら落城、大將討死と云ふのでなあ……。」

物忌ひでは無いが言草が太く耳朶に徹へた內藏助。其者が面を急に視た。

「甚麽、落城じや？其の合戰、何處に在る。」

「えい、東御門――中村口で。――いや大層な蜂の死骸で、掃集せたりや箕に四五杯もおざりやせう。――其の合戰の最中はな、又た苛い震動。海嘯か、山鳴か、御門の櫓も震撼ぐ樣でがふざりやしたが、今方終みやした。――其の又た蜂窠の出來場所が又た希有で、番士の衆も不思議々々々と云はしやれます。」

「ふう。何所に？」

「冠木御門の廡下に。――誰が目にも附にやならん場所じやのに。――其が二寸や三寸じや無い、一尺の餘、醬油樽より巨大え程で。――其を今迄見附なんだは餘程變で。昨夜一夜にも出來たかの樣にも衆が云はしやるが……」

「ひう？ハテ喃う。」

（三）

然らぬだに、國許の事、江戸の事、內外の心痛數限りも無き其の最中へ搗加ての此の怪事は、內藏助が耳竅へは自から家國の亡滅を豫告る惡魔の叫號かとも聽えたので。我にも非らず猶其の委細を訊討すと。孫左衛門が物語の要は恁うのである。

此日の朝、彼の中村口なる東門の冠木門外に、甚麽やらむ物の呻唸くが如き音響がした。門番の足輕は奇異んで出て見ると、個は怎麽、其は彼の蜂窠で、其窠の主人とも見る數百の小蜂は一尾の大蜂を取籠めて、咬合ふのである。あれよ！と云ふ隙に、其の大蜂は四面の敵に叢り刺されて地に墜ちた。視れば彼は既う死んで居る。

足輕等は、一方には此窠の何時間にか出來たのを異んで、一方には其の大蜂の死を愍れんで。猶ほ其窠についての處置方をと云ふ、程こそあれ。川向ひに近き愛宕の山、北野中の方よりして、一團の黑塊、其の吼る音海嘯の如きが、此窠を目懸けて飛び來つた。あはと吃驚いて彼等は視ると、其は彼の大蜂の友群である。

看る間に大蜂は、巨煩の彈の物を劈ざく勢もて彼の窠に中つたが、其の碎けて散る數を算ふれば抑も幾千萬か。是れに應じて窠內の小蜂も必死と防禦に力めたのであるが、大小、

衆寡、勢固より懸絶して居る。寄手は四方より押取り圍むで、出るをば整殺し、支へるをば咬殺し、看る〳〵斬獲の功を擅まゝにして、旋て凱歌めく翹音を立てゝ、又た那地へか飛去つたと云ふ、此が其の始終の概略で。

「で衆も申しやすだよ、此の咬合は何事かの凶兆じや無えかッて。――變事ばし無けらにや好がと云ひやして……。」

と、彼は泣ぬばかりの面を爲た。

「其の見物は多かつたかな。」　と其の問ふ聲も滅入つて居る。

「はあ、そう一杯の人。――加里屋からも中村からも……。」

「ふう！出たか？」　と内藏助は煙管を杖に、良多時く沈思へたが、急にはゝゝと哄笑ひ出した、

「は、馬鹿な！」

「何が馬鹿だで？」

此は自個が侮蔑られたかとも、老爺は眼を圓くするのを、此方は見つゝ悠々と其煙を環に吹いて、

「やはり痴呆じや喃。其樣な物を見て兎や角う云ふは。――人間初め生類は皆な鬪爭ふ氣がある。犬の咬合、鷄の蹴合、な。近來江戸では蟋蟀にも藝を仕込んで、蹴合はして觀物とも爲るさうじや。――況て蜂、蟑螂などは虫の中でも猛い者、咬合もするじやらう。――今は春陽の時節での、蜂が蜜を釀るには大事な時機じや。大方蜜の爭ひでもあろ。吉凶の前兆など、然樣な義が……。」

と、再たはゝゝと哂笑ふ。

「いや、でも喃、一尾二尾は然もおざらうけんど、那樣に多勢集り合うて、全然合戰じや。虫蟻でもな。」

「其の合戰も亦た奇異しうは無い。螢合戰は毎年宇治にある。――蛙合戰も又た折々所々で聞く。其等も皆なお主が樣に國家の凶事として人は騷ぐかな。――殊に其の螢合戰など、好い觀物じやとて女子共まで辨當酒枝で出懸くるは。――何が前表？遊山の具じやは。」

「は、成る程。」　と、道理は然もだが、未だ實際が腑に落ちぬと云ふ臉で老爺はねると。主人は良眞顏、

「他家とも違うて、此方の家來など。然樣の義を濫りに申すな。――言ふては成らんぞ。」

「はい。」　とばかりで、一時口をば噤むだが、

「だが、旦那、那の豆腐井戸たりや、何うおざりやす？」　と睨むが體で云ふ。

「豆腐井戸とは？」

「あの上假屋の豆腐井戸！名高けえ物だ。――彼井に豆腐が浮きやした。」

「ほう、又た怪談かの。」　と淋しく笑つて内藏助は庭の方に眼を轟したが、煙管は緊しく其膝に突立てられた。

「知らしやれぬか喃？」

「否や。」　と首を掉る。

「はてあの怪談。そりや眞實に可怖ねえ、悚氣も出やすが。――聞かしやらんなら話しやせう。」

と爺は此方へ躙り寄つた。

（四）

躙り寄つた孫左衞門は、氣味惡る氣な聲を潜めて彼の豆腐井戸の來歴から語り初めた。

「其の井戸はのう、上假屋の西方の靈處の町家の裏手におざりやす。大井戸の――古井戸

でな。

で、其れを豆腐井戸と云ひやすのは、今から恰ど六十年程前、御先々代様（内匠頭長直）が笠間から此の赤穂に御入部の其の時じや。其の上假屋に一軒の豆腐屋がおざりやしたが、こりや土地に久しい家柄で、何でも三木の別所殿の落胤だとか云ひやすだ。で帶刀も爲たと云ひやすけ。先づ鄕士だね。

處うが、御入部の其年――の正保の元年かな？秋頃から御城の繩張が初まつて、先づあの三の丸の御普請に掛らしやれる。と、恰と其の豆腐屋の地屋敷が戌亥の隅の御堀に當る。で此の地所を立てとの事なんだ。――所が其の豆腐屋め剛情吐いて。御領主様でも此の土地にや新參だ、俺家の方が餘ッ程古い。新參が古參に地立吃はすちふ法があるものか。殊に淺野と云や太閤が家來の筋で、其の太閤は俺家の先祖の讐敵だ、讐敵の家來に俺が地屋敷明渡いたと云つては先祖の位牌に濟ねへとか言張つて、否だ揑ねますだ。

さあ御普請に差し支へる。掛りの衆も終局にや手甲搦て、此段な殿様へ言ひ上げた。

すると殿様御腹立で。讐敵の家來と予を云ふなりや其の豆腐屋め謀叛人。入部の最初に其様な奴棄て置いては以後政道の妨害だ。強て云ふなりや踏縛ッて、一家殘らず磔にかけろ

と怎う言はしやれた。

で、當時の役人衆も、奴等縛ッて領界からでもうッ放せば好えことに。餘り剛情ぶッたので其の憎惡からでもありやしたらう。到頭捕縛へて、中村川(千種川)の河原でね、一家殘らず磔刑に掛けたとね。

其時だ！其の女房がね。俺達夫婦こそ心有る者だ、爲方も無えが、未だ心も無え三才や五才の兒女まで磔刑にして突殺すとは何事だ。——領主の無慈悲——役人の無慈悲——人に怨恨の有るもンか無えもンか、其の無慈悲——覺えて居ろッてね、唇咬んで、たら〳〵と頤から胸へ血を流いて、睨めた時にや、檢使の役人も眼の瞑つて、鎗突の非人も腰さ抜いたと云ひやすよ！

其から女房はげら〳〵と笑つて。此の領主は三代と持せねえ。領主の家の滅びる時にや俺が使用たあの井戸に豆腐を浮かせる。屹と浮かせる。見ろ！見ろ！と叫て七鎗目に息が斷たと云ひやすがね。——其れから那の河原に、毎晩泣聲がする。——時に寄ると、其の磔柱を背負た亡姿が現はれる。——蕭々雨の晩などにや屹と出ると云ひやすでね、誰云ふとなく彼の川を啼川、啼川と云ひやすだ……。」

啼川の名は内藏助も聞知てゐる。

「ふむ。で啼川かな。——然し狐川とも云ふじやのう。はゝ大抵は狐が狸……。」

「そりや狐川じやから野狐も棲やせうが、——其の井戸にじやで——其の豆腐が、浮きやした！」

と、老爺は今更ら、其物が目にでも見えるかの樣に躬を震はした。

「ほう。其れは何時の事？」

「はあ、今日の五日程前。——誰が惡戯か……。」

「惡戯よ！惡戯じや！井戸に豆腐が——はゝ痴呆た事。——然て、其の豆腐を引揚げたか？」

「いや揚げも。——揚た段ぞは！其の裏家の者が早朝水汲に來て見やすと、白い物が井中にある。打魂消て人を呼ぶ。多勢寄つて爪や抓ぞで掬ひ揚げて見た所が、其りや正眞の豆腐じやッとて！」

「其物を如何した？」

「棄てまいたと……。」

「あ、可惜い事。」

「誰が其樣な豆腐、喰ひますかな。――幽靈じや！」　と老爺は彌其眼を晃らした。什麼したものか其後は內藏助は無言。老爺は猶二語三語言ひ試みたが、取合つて與れぬので、彼は悄然茶の間の方に行て了つた。

（五）

邪正一如、迷悟不二の圓頓の妙理を極めた聖者でも無い、固是れ界內の見思の惑に流轉する大俗凡夫の大石內藏助、妄想煩惱血の皮に包んだ人間中の同じ人間の一頭であるから、可厭な物を見れば厭な氣になる、可怖しい話を聞けば同一く怖畏しい心も起る。今や彼の其の最も畏懼る、處は那の惡魔の叫號。有繋に蜂合戰でも、豆腐井戸の豆腐でも、啼川の啾聲でも、幽靈でも無いが、唯一つ其胸を太く擊れたのは民心の動搖で。其の動搖を來させた叫號の出處は那邊に在るか――抑も何處に胚胎れたのかと云ふに、痛く畏怖れた。怪諺にも曰ふ、禍は下からと云ふが、實に其の下民からが可怖いので。卽ち彼の蜂合戰も豆腐井戸も、此が一人一家の事とあらば、我は其怪きをも怪しと爲ずして、驀然一笑に附して已むのであるが。生憎くや其れが當城の東門で。其の井戸が嘘にも領主に祟ると云ふ

其の井戸である。其等が怪事とあれば、我れ一個其の怪きを怪しと爲ざるに止まらで、衆人をして其怪異を異怪と爲ざる如くに計らはでは協はぬと云ふのである。然も無からん歟、此が爲に彼の民心は擾立て、融通は塞がる、商賣は止まる。耕作にも手が着かずして、製鹽の額も減ずると云ふ、――卽ち禍亂の基、一國亡滅の端と爲る。今の我身に恐るべきのは、其の亡靈の啼聲よりも、領民貧窮の歎聲で、衆蜂が合戰より、一揆が席旗の騷動である。

と、此が內藏助の當面つての苦心。其には先づ其の禍根と云ふ、蜂窠に、豆腐井戸の處分、兼ては幽靈得脫の佛事といふが其れを未然に鎭撫るの策と。此で翌日彼の蜂窠を取卸させて、內藏助自身其場に出張して檢分に及むだが。甚麼さま大きい。大いが彼の醬油樽說などは餘程の誇張で、一升樽大といふのが先づは適當。然も其は蜜蜂の窠。――原來春暖の時節、蜜蜂の冬季より出でゝ百花の蜜を集釀る頃に當りては、一二日にして能く巨大の窠を營み成すとは、本草其他唐山の書にも見えてある。況んや彼の山蜂が其の窠を襲ふて釀せる蜜を掠奪んとて鬪う等は、飛驒信濃などの山中にては往々有ること。是れ將た奇異しと爲るにも足らず。と彼の說明は此時不意くも群集の中なる山方の者に證せられ

て、

「何が俺はア、怪談聞いて故ざ〳〵見物に來やしただが、今御家老樣の仰せる通り、から詰んねえ。此樣ねえ土蜂の窠、俺等方にやア疊の二疊敷、三疊敷のも幾許もある。黃蜂奴え來て、蜜奪るとて喧嘩はだくは平常の事だ。あにはア詰んねえ。御城下の衆は無學だア。」

蜂窠騷動も、此に漸やく衆人が安心を買ひ得て、城下の噂聲も帥ん息むころ。又もや豆腐井戸の豆腐の本體も現はれた。其は吉田忠左衞門預りの弓組の足輕、寺坂吉右衞門弟の定右衞門で。彼は三の丸の長屋に住むが、彼の日の早朝、汁の實の料にとて上假屋の豆腐屋に豆腐買にと行きたる歸路、此の井戸にて面洗はんとて立ち寄れるに、風と過ちて其の豆腐を井中へ落したり。引揚ぐるも無益と存じ其儘打棄てゝ歸れるが、近來にいたりて何彼との取沙汰、右は全く我等が不調法、深く恐入りたる段を申して、當人は差控え罷り在ると、其頭の忠左衞門より家老中へ進達した。

甚麼の詰らぬ、冷豆腐の冷りとさせたる化物の正體、這樣物かや。あはゝと笑つて打棄てた者もあつたが。又た中には、山中に棲むべき蜜蜂が人出入りの多い城門に巢ふと云ふが

既に是れ怪事。況てや定右衞門の落せしと云ふ、其の落せし豆腐が何等かの前兆、物の怪異といふは此等の事ぞ。と內々にて呟く火手が又たむら〳〵と彼方此方に燃立ちて、下火と見えた城下の動搖も誰が煩るか、此の飛火の爲に內藏助が消防の水の手もあはや其の水泡と爲り掛けた。

此も全く其の根源は彼の豆腐井戸の怨念談からである。然らば彌其の亡靈得脫の法會をと云ふので。內藏助は淺野家代々の菩提所なる上假屋の華岳寺に自身出向いた。

其日は三月の十五日。誰か知るべき匠內殿が切腹の其の翌日とは！

（六）

赤穗の華岳寺は、山を臺雲山と云ひ、開山を和岸和尙と云ふ。上假屋の西町にありて、先代采女正殿より淺野家代々の菩提寺と定めらる（采女正法號を華岳院と云ふ、寺號は蓋し之に據るか）。和岸の嗣燈、卽ち現今の慧海和尙は、當代內匠殿の室淺野氏が從兄に當る。嘗て京師の某山に首座を領じて、其の活機に富める辣手腕は頗ぶる佛を殺し祖を呵するの伎倆ありとて、一時海首座の名を納群に謳はれたが。後當地に招かれて城主の香華を預かると云ふことに爲られてから、內藏助とは方外の知己。葷酒は山門に入るを許さぬが、

槃の醸醸味は別傳の繩牀下に蓄えられて、酩酊の後には大石も一撥の棒を時に吃はせられる事もある。なれども俗縁は恁樣なり、道德は高し、城下の男女は皆な「御首座さま、〳〵」とて渴仰すれば、内藏助も「和尙どの、〳〵」とて政事其他の相談相手に爲る際も有る。此日も同じく彼が念珠の手を藉りて、其の城下に燃廣がらんとする騷動の飛火を揉み消さうとの大石が目算。其の手段の談も追々と進んで、

「什麼でざらうなあ、其の怨靈退治の一策は？」

と彼は打出すと。和尙は、

「あゞはゝゝゝ、其も好からうよ。此の醉倒的坊主が經で得脫する幽靈も有るならば。」

と、茶碗をぐびり。茶かと思ふと、其は冷酒である。

「ぢやが喃う、内藏。御身は諸事に如在が無くて、好う行屆いて、——かと思ふと中々決斷た事も行る。慈悲、柔和に。空慧。——先づ成佛も出來る質じやが、可惜い事には一つの瑕疵は信力と謂ふが不足んで喃う。」

と、餘程喫つてござる口吻から徐々例の棒が出かゝる。然し其棒は、中々に條理の徹つた、擊たれると心病の急所に利く棒だから、日炙の意で内藏助も忍耐へて聽く。

「信力が不足んと喃う、功一簣を厭くものに爲る。肝腎の地で挫折がする。折角の行事も無益ずと爲る。——然う思はんか喃？」

「如何にも其れは。」と傾聽した首を此時に正して、「近來の行事に、御目餘りの義もざるかな？」

「ござるかな處の段かい。全般其れじやよ。——什麼も方便にのみ走つて眞實が乏い。細工に過ぎて精神が入らぬ。——此程も見えられる度、言はう〳〵と思ふたが。——今日は些と俺にも思ふ仔細があるで言ひますが喃。貴方も從前の勤め方。家老上席の城代とも云はるゝ身には不都合じや。——いかに其の以來殿と馬が合はぬといふて、萬事を棄てゝ、あの安井藤井大野でときに國元から江戸、諸事萬端の仕置を一任せて空吹く風は些と失體じやな。

其の失體の根本から、此程も道後の歸路、書面一封子息に托けて殿へ進じさせ、御自分は徒爾此の赤穗に戻られた。其れが俺に言はすると其の信念が薄いに爲る。——何故御自分、江戸へ行れぬ？——そりや國元も大切じやらう、が當面いての大事は江戸じや。殿が無益の御馳走役擔がれる、其れを苦諫て止さするのも貴方で。——又た念貧擔ぎやられてから

も、其れを首尾好く仕課さするが御分の役、――然うで有ろ。――其を那の犬か豚かの安井や藤井に委任せて置いて、萬一、仕損じが――殿の大事と有る樣な件……。」

「や、甚麽とで？」

と内藏助は瞳を凝えた。

「いや、有りは爲まいが、有つたりや貴方が落度じやぞ。衣服の中に縫ひ包むである無價の寶珠を、知らぬ和郎も虚呆じやが、又た縫ひ包むだを知せずに置く朋友も不親切かな、――手滯りかな。――究竟は眞實の念の薄いと爲るじやがな！

其れからが、御歸りやッての後の處置。是れも不同意じや。何故九郎衛を糺問されぬ？――いや先方に言拔の書面が有つても、其を重役中にも相談はんで、九郎衛一存で大金を江戸へ送つたと云ふ其廉を、那の八十右衛門言ふ通りに何故糺問されぬ？――尋訊てゞ彼奴面會んと云ふは爲方も無いが、子息が書通を待てからとは迂濶に過ぐる。――其の書通が尙時來るか？――況て書面が來たところで六日の菖蒲――！爲りはすまいが喃……。」

怪しや和尙は、甚麽考へてか、氣に懸る事の、厭氣な事の有る限りを言ひ立ては冷酒を喫みく、其歎息を嘘くのである。

（七）

内藏助は心もいとゞ心ならぬ。此の和上、何事を何處で聞込むだのか、甚麽の通知を得たのか知らぬ、然るにても其の嗟歎の仔細は？と重ねて問ふたが、和尙は其をば打消して猶其の叱言を連續けてゐる。大石も此には楯突くべき樣も無き尊者の異見、我が聞きたい事、言ひたい事、辯じたい事をも一時嚥下むで、稍伏目に聽く中にも、殿の御身上、昨日まで の御役と云ふのか首尾好く濟むだが、否かといふが胸に痞えて、幾んと其耳も空のである。

と、和尙は猝に座下の鐵如意を一つ揮つて、

「貴公は反間を放つたな！」

一喝を喫つた内藏助は錯愕いた、

「甚麽とで俺？」

「俺が經で幽靈得脫は尙だ恕せるが、山方の民を使用つて蜂窠の證人にする。忠左衛門と刎れ合うて定右衛門に訴人をさする。看え透いた細工ぉ爲つたな！」

此に至つて内藏助も、愛時苦笑の頭を抓くばかり。

「いや、一言もで。天眼通！――透視ましたか喃。」

「天眼も無いもんじや。誰が凡眼でも卽ぐ判かる。判露るから騒動が鎭靜らぬ。貴公が心痛は自業自得じや。」　と如意は益勢を增す。

「ちやが拙者はな、一時應急の手段でな。」

「其れが不可んじや。極不好い！」

和尙の圓顱は連りに掉られて、其の口沫は霧かと飛ぶ、

「いろは譬喩の臭い物に蓋！——貴公は自家一人だけ智慧者じやと思うて居るから全體が齟齬う。——貴公が眼は幾許有る、兩隻じやろ。手は幾個ある、二本じやろ。——其の兩隻の眼で幾千人の肚裏を推測つて、其の二本の手で幾萬人が眼を塞がうとは、所謂る蚊虻が山——協らぬ穿鑿じや。——こりや、赤穗領狹しと雖ども、怜悧者は貴所のみじやござらんぞ。盲目千人眼明一人と云ふも眼の見える奴は傍邊にも居る。——貴公は幼少から山鹿が弟子で、彼の謀計とか、機變とかで世を濟さうと爲る。大間違ひじや。貴公が樣なは飯汁を無能の爲として、藥湯で人間の軀體を維持せうと爲る大馬鹿者！——人參附子で三食が了るか、機智謀略で國や天下が治平るか。——什麽じや、內藏。」

其位ねな事は此方でも先刻承知である。殊に彼策たるや、其手段の巧拙は姑く措くとして、

飢の方に太甚しき時は飯よりも先づ酒を吃む、寒の特に激甚き際は火よりも且づ湯を浴る。後には或は饑を倍さう、軀の溫氣を奪るゝか知らぬが、右にも左にも急に應ずる其れが臨機の活手段、彼等が壁面の工夫といふにも常に賛揚する處であるものを、餘りと云へば沒分曉過ぎる。但し、此も亦た此の和尙が得意の甚麽等かの作略かな、と內藏助は注意たので、故らに沈着めて、

「はゝ、然し右は又た我等宗旨の所謂る方便で……。」

「不可ん〳〵！方便は信念が有つてから。百折不撓、勇猛精進の信力を心に具して、——其れからじや。——誰も好く云ふ正直捨方便、全くじや。——正直に勇猛の念さへあれば蜂合戰、化物豆腐、幽靈の祟禍、什麽があらうぞ。所謂る妖は德に勝たず、縱し其妖を妖とするも貴公が踏張つて、國の政事を善う整理へて、衆飲に苦しむ下民を援けて、金銀のみ目掛くる惡役人を放逐けて、我慢に募る殿を諫めて、上下の取締を確乎と着くれば、蜂が唸ろが幽靈が啾うが豆腐が浮まうが、反間も入らぬ、法會も要らぬ、機變も謀計も方便も小細工も甚麽要うかい。妖も孽も失くなつて其れこそ當家は萬々歲じや。——が喃う、內藏……。」

と和尚は急に四邊を顧回つて、聲を低めた。其の爲體は甚だ容易で無い。

「……祝ひは千年。其樣な事は有るまいとは萬々思ふが喃。——殊に寄ると貴公が其腹を、ぐッと締て貰はにや協らぬ或る場合が昨今に來るか——知れぬぞよ。妖を妖と爲で了むと云ふのは、家國の治まつた時の事。現下の赤穗は然樣は行かぬ。那等の妖が縱しや無うても家國の亂るゝ端が俺が眼にさへ中々見ゆる。況て此の大事な役義。——實は俺は昨夜、些と、某る方から陰報を受けた。——今は言へぬが、四五日過ぐれば緊乎に知るゝ。法事も施餓鬼も姑づ其上じやな。

で貴公にも、言ひとゝむ無い今の叱言も實言うたのじや。惡う聞かれな、萬一の時には、貴公の信念と勇氣と云ふが唯だ賴憑じやで。機智や作略の小刀細工は既や駄目じやぞよ。現下から善う腹を決めて喃。膽を練つて喃。——好いかな、內藏！」

眞面の院主は、此時は早や酒氣も失くて、如意さへ蕭然と傍邊の牀に遺棄られて居た。暮れ近い空は掻き曇つて、薄寒い春雨が霏々。前面を見ると床間に、「新歸元」と今認した計りの位牌が一個、香の煙も嫋々と立ち昇る。

內藏助の面は眞蒼に、眼も稍晃つて來た。

（八）

「早打々々！」との人聲は遽に聞えて、動搖き亘つた赤穗の城內。廣間番の若侍と茶坊主とは慌たゞしく家老の詰所に駈て來て其處に突這つた。

聽耳を聳立て居た大石內藏助、

「江戸からか?!」

「はッ、江戸表より早水藤左衛門萱野三平、兩人參着にござります。」

「あ、然樣かの。——兩人には詰合醫師に熟と手當を申し附て。——然して、忠左衛門、久大夫を此座へと申せ。」

故らに言緩かに命つけた後、內藏助は膝元の烟管を手に取上げて、心徐かに三服を喫して、旋て再び目を瞑ぢた。

其態度に於ては波たざること古井の如き彼、其胸裏に於ても汪洋たること長閑き海原の如き的ありしや、怎麼。

今其實を以て說く。彼は彼の日、那の老和尚が奇異して訓誡を傾けたる後、心に慚愧る處もあり、又た了悟る所もあつて、蕭寂たる深冬の空の、一旦春陽の天に遷りて、百花の蕾

を破るが如く、蟄蟲の戸を啓くが如く、廓然として其膽を大いにし、猛然として其の満往の氣を奮ひ起して、既く其の決定の膽と云ふのを固めたのである。

其の固定た膽といふには二條があつた。一つは、殿の御役義首尾好く相勤められてからの藩政の改革。今一つは、其ぞ大事の萬一の變有つたる際の身の覺悟。——恁く二樣に其の行事は剖れて居るも、其身を賭けての難局に當ると謂ふ觀念は一條である。孰れにしても此の一命は既に亡きもの、我が大石の家も此時に滅却、とは胸の結束を定めたのであるが。此の分別の兩樣、何方かに岐るべきのは江戸より來る早打の遲速。——卽ち五日が中とあれば、必然凶事！其後とあれば先づは無異？あゝ無れかし、此昨今の中。と祈るに甲斐なや今日は三月十八日、豫て聞えた公儀御返答の其の十四、十五日からは五日目である。扨てそ！と彼は今更ら犇と膽尖に徹へたので、差當つての始末と云ふを其の動悸とした胸に考慮へる。覺悟の肚も狂瀾怒濤の洶湧るとある其の最中。

「內藏殿、早打が！——御聞とでざるかな？」

と耳元で云ふのは彼の足輕頭兼郡代町奉行の吉田忠左衞門と、大目附の間瀨久太夫。

「ふゝ兩所か。——如何にも早打が。——今手當中と申すので拙者未だ其の仔細は承はらんがな。次第に依ては些ばかり用意と云ふも要り申さうか。——で、御自分等を招いたのは……。」

「ナニ用意が？」　と兩人は驚いて目を凝えた。

「いや、何ともじやが、唯だ昨今の模樣、用心が專とも有る樣での。——依て忠左は御預りの足輕共に二の丸三の丸、門々の警固を申し付け。又た城下より村方までの取締方にも入念せられて喃。——又た久大御自分は、配下の目附に城下の旅人、別しては城內出入の諸商人、雜人輩まで好う注意して、豫て下渡した鑑札を吟味する樣、嚴重にな。——委細は又た奧野小山進藤とも、物頭中とも評定の上御沙汰を申そ。何分にも唯今は喃う、下々の立ち騷がぬ樣、其れと無く用心の堅固と申す。其の手心でな……。」

兩人は彌吃驚いた。手心は如何にも爲樣が、地體が城門の警固であるの、出入の檢査の、全然籠城の支度である。何さま我々も蜂合戰に豆腐井戸の怪異、穩かならぬ世間の情勢とは思はぬでも無いが。然し其れも一時の事で、殿樣御役義首尾好く相濟されの、恐悅の御祝儀とも有つたらば其の動搖も早晩鎭靜まる。——今の早打は右相濟みの目出度い報知かとも急いで來て見れば。用意の、手配のと、緣喜とも無い！——何さま然う云へば此

の内藏殿、二三日變狀だ。――種々屈托の其の心痛から些と發狂れたのかな。扨て困つた事と。吉田は間瀨と苦笑の面を見合せて、且つ内藏助へも眼を配つた。

其處へ忽地現はれたのが進藤源四郎小山源左衛門河村傳兵衛、續いて物頭の伊藤外村玉虫以下。奥野將監は當番の醫師三人に早打の使者早水萱野の兩人を扶け引せて、自身も傍から其の手を持つて、

「内藏殿、急使兩人は唯今一休息致させたが殊の外取急いでも見えまする。先づ一應、其の仔細をな……。」

と、傍邊に座を占むる。

早水萱野の兩人はと見ると、江戸よりは百五十五里、四日半に其を打つたる疲勞の痕は面上に歷々と、血迸つた眼中から内藏助を見ると潸然と落涙した。

（九）

聽き居る人々は、唯だ驚愕き、唯だ慌遽て、聲を呑み、息を嚥み、肉を硬くして、早水萱野が、「……右の大變承はると即刻、大下馬の御供先より急ぎ馳せ參じてございます。」と言る了るまで、一語をだに發す者すら幾んど絶無！

良有つて其眼を屹と内藏助に向けたのは奥野であつた、

「内藏殿、此は甚麽とござらう？」

内藏助は頤を襟に、猶ほ其腕を組んだ儘、

「殘念ながら御家――滅亡！――あゝ殘念じや!!」

「滅亡?!――然て御身の覺悟は？」

彼を當の敵かの如くに奥野は睨詰めたが、彼の應答は竟に得なむだ。猶其の返答が待詫てゐた人々の眼も、同じく其口の啓かれぬのを見て、失望の極、一時其座は鎭靜り返つた。

怎る處へ慌忙てゝ出て來たのが大野九郎兵衛。彼は面色も蒼褪めて、身も震る〳〵、足も跟ろ〳〵、漸くに其處に座つて、

「ヤレさて聞きましたが大變じや。九郎兵衛もう氣も動顛いたしてあゝもう何が何やらじや。――あゝ其に附ても喃う、殿と云ふ御人は喃う……。」　と彼はおろ〳〵泣く。

泣く？現下は其樣場合であるか。平生は兎も角も彼も家老の一人とあるのに、とぐゝと急腹の癇に障つた進藤源四郎、

「愚痴お言やれな。此際貴公等大將に爲られいでは下々が甚麽と致さう。先づ急使兩人か

ら仔細でも聽れて、理に當る御指圖も承はらう。」　と、ッと居寄ると。

「いやも、澤山々々。結句殿が殿中で高家の吉良と喧嘩なされて彼奴に疵の負はされたと言うので有ろ。――甚麽たる御短氣か！其で御家が滅亡るればこりや御自分御一人じや無い、御家來、殘らず、――差向き我等六百石の身代も棒に掉る。明日から編笠の浪人となる其の歎き爲にやならんと御氣が附かれんか！あ、何と致さう。我等もう此の老る年じやに、今からの浪人！責て悴でも在て呉るればじやが。――いやこれ藤左、三平殿か。悴の軍右は什麽爲ました喃？」

「ふゝ其の軍右か？」　と兩人は破れよとの大聲！

「御一同！今承はる殿を惡ざまに批判の召さる結構な御家老の子息の軍右はな、當地より差立て參つた三千兩の御金を獲つて、安井彦右衞門藤井又左衞門灰方藤兵衞の三人と去る十一日の暮程、何方へか逐電しまいたぞ。委細は原堀部の兩所からも進達おざらうが、先づ此義だけ申し進せます！」

愈出でゝ愈驚ろく！進藤小山奥野に吉田、間瀬の老人は更にである。常は然ばかりの氣慨も無き河村外村玉蟲の面々さへも。江戸家老兩人が案外の始末。今の言を眞實とすれば愈

も堀部に原、其餘用人給人目附等の役々共は什麽して在たものぞ。恁る醜態にて殿をも莫の難義の淵に追陷めて御餘義なき刄傷とも有らせたものか。仔細は未知ぬが、江戸屋敷の當時の亂脈、聞くだに淺猿しき其の不取締の爲體は目に睹る樣である。吁其の最中に此の御役義。其れで此の大變！時運か、天命か、一業所感の因果とも謂ふのであるか。と今更ら蜂合戰の前兆も、豆腐井戸の怪異も憶ひ合されて、歎息を漏すも、齒を切るも、腕を扼るも人樣々、心々といふ中にも内藏助は唯だ黙然と、案ずが如く、瞑るが如く、座禪の牀にも在るやうで居る。

小山源左衞門は内藏助が叔父である。身分は用役だが、堪へぬ老人、

「内藏、什麽爲れた。先刻の將監が問條、今の藤左等が言分、九郎衞殿には氣毒じやが其金に就ての軍右が穿議、父子とあれば通れぬじや。其れ是れの捌きは御事ならねば今出來ぬに甚麽たる爲體じや。晝寢かッ！」　と疊を叩かれて、目を徐に看開いて、

「ほう。甚麽捌きませう。――將監が問の覺悟と云ふは、此は自分等銘々の心に平日より有るべきもの。軍右が穿議は明日にも用役の書面到達して、其れからじや。又た城の内外の用意は、過刻忠左、久太の兩人に申し附け置いたる通り。其餘は殿が御安否と、其向の

沙汰を得てからで遅うお座らぬ。――箇様な時は狼狽るとな。――御身も書寝を爲るまいが、熟と前後の勘辨なされて。――追つけに再度の注進も參らうで……。」

此の沈着加減には其の緊張めた腰も折れて、一同は三たび呆れさせられた。

果せる哉二時の後、再度の急使は來たのである、其は原總右衛門に大石主税。齎らしたる報知と云ふは、無惨、内匠殿が生害の模樣！城中の騒動は、哀れ言語の形容する所を知らぬ。

（十）

原惣右衛門元辰、今年は五十四才の宿老、用役に足輕頭を兼ねて、文武に附ては一藩の人々にも其重きを置かるゝ人物である。爾く名譽の人物ではあるが、此度の義に就きては頗ぶる以て手淳の容で、自身も熟く其をば知る。知るから一時は主の御跡を黄泉の御供に、と短刀の柄に手を掛けても見たが、――いや待て暫し、死は一つである。今死ぬ亡屍を寧ろ赤穗の城門に曝さむには。と其夜直さず主税と與に江戸を立つたが、其の途中でも、

「……日ならず討手が彼の城に向はう。我等も御事も其際じやぞ。父とも固より其所存であらうが天下を引受けての天晴な討死、不足は無い。見事に好うお爲れ！」

彼は眞實此の覺悟であるから赤穗に着くが否な、初發に籠城をと取り急いだ。此に荷擔の人々には、奥野將監、小山源左衛門、進藤源四郎、河村傳兵衛、間瀬父子、間兄弟、岡島、早水、萱野、貝賀を初として惣じては五百三十餘人。大廣間の座敷より縁、縁より庭前と居並むで、血眼に涙を流して、其涙を血に染て、染た血を又た神文に注いで。討手來らば唯だ此城を枕にして、意地の切死！此の髮首を數代御扶持の御恩に換て、と泣き且つ勇む。健氣さも健氣であるが、愍然さも實に愍然で、然も其の敖然たる意氣、やはか鬼神として面を向くべき――其勢に恐怖を爲したのか、大石は例の默然。床柱に凭れて、彼の座禪として。折節目を啓いては一座の動搖きを唯だ見るばかり。味に云へば枯木冷灰、平たく云へば死だのか活たのか。半句の是非すら、一切無言！

案外とも意外とも！此の狀態に今更ら興を醒したのは特別け原である。――彼は豫ては想念てゐた。我より先に早水萱野も既に其の注進に赴いて居る。城に到着らは大石決めて那の策略で、家中を集めて、士氣を鼓舞して、兵粮の用意、箭彈の取調、城下の農商が人質をも取り固めて、門々の人數割から狹間配も出來て居らう。這邊が彼の山鹿流の得意の處。什麼目覺しき觀物で有らうかと。――其れが來て見れば豈圖らむやで、城内にも城外にも

騒動てそ有るが、警固も支度も一向見えぬ。――其れは成る程、北の町口門から、東門の中村口、本丸の追手には吉田が組下の足輕も居る。なれども其は僅少の人數で。其外には目附の下役が五六人。此等も唯だ出入の鑑札を檢むる、――紛れ者の入ると云ふのを制するに止まる丈けで。籠城？幾んど氣も無いのである。

其れ既に十分彼が小癪に觸つて堪られぬのに、今又た他の必死の紛擾を、夏の薄暮の軒先に立つ蚊柱の、揉つ揉れつ狂ふのを見るかの如き爲體でゐる。猶ほ彼は其を嘲笑ふのか、蓑の面へ水といふ平然たる白い眼で睜り〳〵と眺視て居る。甚麽と云ふ憎惡であるか！と慾ね其を我が輙憑にした其の反動の百倍增に憤志た惣右衞門は、今は耐らずつか〳〵と來た。

「内藏殿、所望じや。此狀――判形を！」

連判の狀は取上げたが、「ほゝう」と云ふ例の調子で、

「此狀へ判形？――什麽するのじや喃？」

「内藏、毫惚まい！籠城じや!!」

と原は怒鳴つた。其に續いて小山進藤、奥野も河村も右より左りと叢々と押取り圍むで。

昨日此座で得損ねた其が返答、卽ち彼が覺悟の臍を目下と云ふ目下、强談でも聽取うと、逼詰めた！

彼の蓑の内藏助は、のそりとした眼をきよろりと爲て、

「籠城かな？――誰を敵手に？」

原は急き立つた、

「誰で無い！天下を敵手――！」

「はゝあ、天下？――公儀にか喃？」

「言んでも無い。殿御戀憤！それ晴す爲の籠城じや！」

「はあ。――殿は、公儀に謀叛？――思し召立でも有つたか喃？」

原は彌吼るが如くに、

「黙り召され！内藏助殿。御謀叛など誰が言うたか！――御身は其始末を見ぬ。其場の始末を見ぬに依て然樣な不當な義ふ言やるじや。餘人とも無い主税、彼者に聽け！息子に聽れ!!」

「いや愚息までも無い、御身からも好う聽て居る。ちやがの惣右。條理違ひの利道は齊基

でも疝氣と云ひますぞ。――御分疝氣で、其眼が眩みは爲されぬかい。」

其の澄した面色は、佞か姦か、將た腰抜か。いづれ平日の大石では無いと一同は視た。

（十一）

在るにも在られぬは主税である。彼は「父上。」と駈け寄て其袖に縋つたなり、「何、と何卒御本心に！」と云つた後は身を抛出して、伏沈びだ。其からは唯だ歔欷げての泣聲のみで、肉を顫はすのか肩頭から背には浪うつ樣である。

其れを見ると惣右衛門も、猛るべき勇氣も失せた。父は可憎いが子は氣毒な。此上の口論にも募つたならば、彼は恐らく、忠孝の二途に迷つた無慘の切腹をも遂るであらう。其では折角此處まで伴つた――あゝ可惜ら壯者を、と無念ながらも差控へると。遽然に居丈高と爲つた内藏助は急雨の迸しるが如き大喝で、

「本心じや？――こりや悖、予の本心を疑ふ其方共が料見の所在こそ予には飜つて不審じやぞ。――籠城と云ふは謀叛。謀叛と云へば字の如く時の天下へ敵對うじや。――其方等は甚麼の公儀へ御不足が有る？あの御最期が御不捌かッ!!」

睨み着けた怒眼の電光と、其聲の霹靂とも鳴り亘つたので、一同は度膽を抜れて、有繋は

彼れ城代家老の其權威に壓れて惜伏した。其中から唯だ兩個、奮然として躍り出たのが彼の早水藤左衛門と萱野三平、

「内藏殿、憚りながら御口が過ぎまする。言うにも及ばん君辱めらるれば臣死すと云ふ況て御切腹！其の御沙汰は公儀思し召より出たと御座れば、殿樣御譬たるものは卽ち公儀。其の譬たる公儀に對つて我々共が弓を引きます、甚麼の御不審か?!」

睨み返して、否とも云はゞの見脈を見すると。内藏助は又た其眼を莞爾微笑に變へて、

「はゝ貴所等は喃う。盲目の垣打といふ諺がござるが、御存知かの？――盲者が墻に行き當る。自己が行當つたの不調法をば其方退にして、墻が有つたが惡いとて其を打ちます。な。先刻も云ふ疝氣筋じや喃。――殿の御不幸はこゝ、中す迄も無い生涯の寃恨。ぢやが其も時運でござるでの。諦念むる者は諦念むる。然も無い者は殉死も遁世も、腹を切るも頭を剃るも、其ぢや勝手じやが。籠城とは甚麼事じや。――公儀御怨みとは何たる沙汰じや？――殿中で劔戟を揮へば。狂氣で流罪。宿意は切腹。兩樣ともに其家斷絶とは寛永の御式に歷然と有る。卽ち墻垣じや。其墻垣に觸れて迄もの殿が鬱憤こそ我等恐察にも餘りは有るが。其の御最期まで殿は甚麼の公儀へ御怨恨を有れたか。――甚麼にも無い！其

の無い證據は田村屋敷へ御出の路次。又た御出なされてからの御容體。御最期までの御模樣を承はるにも何一つ御不足がましい義もましまさぬ。——てりや其理由じや。初發からの御覺悟通りと有つたで御座るもの。——其を知いで各位が恁樣に騒ぐ。下世話の親の心子不知で、殿が御靈の其を聞れたなりや甚麽程の御驚き——御勘氣とも御座らうか喃！

但し、御家は既や滅却じや。當城も家中もござらねば、家老も用人も各位方も無い。拙者は浪人の大石内藏助。各位は各位の早水氏と三平殿。——然れば所存は勝手。我等義は我等義で先づ身の始末を致す。然らば御免を蒙むるで。——主税、さ、參れ。」

と泣き入る息子の手を拉て、大石は其座をすたゝ。

跡に殘された一同は呆氣に取られて。獨り腕を組み　首を低れて、其狀宛然石像の如くとある惣右衛門が全身へ、滿らぬ瞳子を聚注めたのである。

（十二）

今までおどろくと響いた播磨灘の波濤の遠音も何時しか靜つて、明日は雨にか、濕潤を含むだ行燈の火影、蓋覆の紙にぶちくと當たる微蟲の翅音も極めて幽邃のが、其れを注視めた大石の眼、口も凄い程に緊結れて、拳は確く膝上に握られて、隙漏る風に鬢髮のさ

はくと戰くのが今や敵にも遇んずる勇士の形相。決して晝間の城内での内藏助では無いが。然りとて容易く心中の秘を曝露してと云ふ輕忽者流でも無い。結句は慘憺たる經營誰に對つてか語らむ、這裏の消息天公知る！——否な恐らくは天公にも此の秘密の消息のみは、漏らさぬ覺悟であるらしい。

其の面前に未だ泣伏して居るのは主税。彼は漸くに顔をば擡けたが、言むとする聲音も頓へて、前後に語る言辭も哀れ涙に亂次である。

「委、委細は唯今申上げました通りにござります。殿樣御最期の御無念は、唯だ吉良殿の御上。——然し其も最初は中々の御重傷、御存命も六時が間と聞えましたで。殿樣にも其を待せられましての御生害と。種々御要求もござりましたが。竟にか其が虚言。御存命確乎と知れまして、唯——唯——もう御是非もなく。御催促の御使者で御無念の御切腹！！——今、今、申上げました通りに御座ります。

それで、其際下されましたが、今上げました短刀と。御遺言！——父上へ然樣申せ、上野は尚だ存命じやッ！！と、——其、其の御遺言と、御短刀とでござります！」

其の泣聲を震はしたのが、一度に非ず、二度に非ず、彼は宵から此で都合三度まで試みた

ので。――即ち殿が其の滿腔の熱血を注がれて、千古、萬古、綿々として盡く可らざる其の御怨恨の遺言の、然も「内藏へ！」と特別ての名まで指されて、幾んど「倆頼む!!」と手を下させての御倆囑。其を現在の遺恨の血を染られた其の短刀に添てまで、彼は實に三度を言つた！其の三度まで反復たのであるが、可恨しき其父は、單に言葉に其耳を假さぬには止まらで、彼の殿の鮮血を汚された「看よ！」との紀念の其短刀にまで眼も與れられぬ。現に其刀は床間の隅！嗚呼、其隅に放下されて在る。甚麽たる無情さ!! 實に言語道斷と言ふにも斷えたる。幾と狂氣かとも疑はれる。

「父上、萬望でございます。其の御短刀だけは喃、熟と御覽を下されて！」

「覽て、什麽する喃？」

と、此語が其人の初度の口切。四回目といふ今に至りて辛々に得た、懷かしき父が應答である。

「私、私の申しますること。貴父には御分解も御座りませんか!!」

忍耐へ難た涙の聲音で、可傷しくも彼は竟に訊ねた。訊ねると、父の語は又た意外である。

「好う分解つて居る。」

「御分解とござりまするなら今の殿樣御遺言、――什麽御聽になりました？」

「別とも聞んの。只だ吉良上野は存命じやと……。」

「其の存命が。殿樣御身には。何、何程の御口惜さ？」

「そりや些は御無念じやらう喃。看込むだ山が外れたじやから……。」

「何故？」　と主税は坐直つて、

「……其の御無念、晴しやれませぬ？」

と膝頭を突附けると。「甚麽、晴せ？」と不興の眼は忽地睜張れて、

「愚かを云ふな。殿は殿、俺は俺。――曩に堪忍の異見を書て其方が手して進らせたに、――其をも反古にして飽まで我慢に募られた殿。――其の我慢で御死にやれた人の又た無念を繼いで、異見した俺が其の二の舞かを再た演にや無らぬとは。馬鹿！何處まで痴呆！――其方が申すを理と爲れば、醫師が病者に養生を說く。其の說く養生を無い者にした病者が死ぬれば、醫師は其の不養生の又た眞似をして是非果ねば爲らぬとなる。はゝはゝ、箸にも掛らぬ世間の痴愚！」

「では到底も、御供は喃!!」

「誰が爲るかッ！――予は今云ふ予じや。――が、其方は、然し然樣ばかりも云へぬぞよ。昨夜城内で惣右に聽けば、殿が切腹も一つは其方が身上からじやと喃？、――すれば其方は何さま御供――其の死にやッた病人の病痾の根、酒とか色とかで。――こりや申し譯の切腹が値はある。――で、然程御供と死にたがらば勝手に死ねー遠慮無く死ね！――但し籠城はならぬ。――自滅じやぞ。――腹切るなり、身を投るなり、首縊るなり、そりや勝手に爲い。所詮は單だ一個で死ね！」

（十三）

什麼なこと、主税は恁有る無慈悲の自殺の宣告を此父から受けうとは。實に今が今迄も想ひも懸けなむだ。

眞個に、從來の父上であれば、其兒子の難義とあるをば庇護ふて下さる程の御慈悲は有つた。但し我には其樣臭怯しい料見は無い。寧ろ進むで君父の難には我から赴くと云ふ覺悟であるから、今仰られた冥途の御供！欣喜むで居る。――況んや其は難義どころか、名譽であるから進むで屠る。「究竟江戸で切り掛けた腹を赤穗で果す。猶ほ其當時の決心も今日の覺悟も毫末も變らぬ同一大石主税であるから、死出の山路を御跡から駈け附て御馬の先

を爲る。寧ろ嬉しい本望ではあるが。唯だ情け無いのは父上の目下の御心――怪異しい、臭怯の、平常とは變つた、言ふにも言はれぬ其の御本心と謂ふのが實に可慨しい。

最期だと云つても我々は武士。決して女々しい御涙など見たうは無いが、然ばとて餘りと云へば其の御待遇が薄いに過ぎる。我子に腹切れと仰せらるゝのか。極惡の罪人に死刑の申し渡を爲されたのか。罪人でも死罪となれば奉行も一掬の涙は與れる。此は現在御自身の惣領！孝行とは稱れまいもの、不孝と云ふをも格別身に覺えては爲ぬ御自分の兒！其兒に腹切すと云ふのに、作法も、禮義も！「獨自で死ね――籠城は協ら ぬ――腹切るが否なら、身を投るとも、首縊るとも！」と。あゝ甚麽たる御口狀!!涙どころか、人間の情は其でも有て居られるのか！

「私も、武、武士でござります。首も縊らねば身も投げませず、大石の家名に玷[illegible]樣切腹だけは爲て果てまする。就ましては――介錯を喃……。」

其をも沒義道に、

「協らん！予は否じや！」

「でも萬望、此義のみはで御座ります。責て最後を父樣の御手で……。」

と拜むばかりなのを、父は猶ほ嘲むが樣に、

「介錯が無けらにや腹屠れんなりや、廢止と爲い。――夜脫も宜からうず。はゝ然すれば一命も有る……。」

「え？私に夜脫を爲い?!」

「爲いとは云はんが、爲るも宜からう。俚諺の命が物種じや。――主も無い城への籠城、其りや極愚ぬ頂邊じやが。又た譽人も無い內證の切腹――擧しい的とも無い喃？父は看脫す。折柄闇夜じや。月の出ぬ以前裏門から行け。路費は此處に有る。」

豫て其の用意も爲たのか、父は懷中から搜ぐり出す小判の一包。ずいゝと置くのを、主稅は暫たが、最う甚麼とも言はず面を掩うて泣入ること良多時。

此が今武士を廢めたる大石が我兒に對する愛情だ。卽ち我兒を犬にして、裏門の狗竇から脫さうと爲るのである。

と看る時、奮然として雪做す肌膚を寬げたは主稅。卽さま拔放す短刀晃乎と、其の左手の脇腹へと云ふ其が拳頭を、內藏助は煙管をもて丁！

急所に耐へずばらりと落すを、父は徐かに視て、

「何故、切腹する？」

痛いよりも口惜いので主稅は泣聲、

「私は畜生では御座りませぬ!!」

「小間尺れた事申すなよ。一命が無いぞ。」

「ナニ一命など！」

「痴呆奴が。其短刀より此金持て！」

捻込んとする金包を、穢はしと云ふ樣に主稅は奪取て叩き附る。包は斷截れて金は。ばッと散る！其の花吹雪を搔分けて彼は再び短刀を把んとするを、鐵如意めく大石が延煙管は早くも飛んで澁矢と擊てば、短刀は再も其主の手を離れて、遙に散失た。

「馬鹿！――然樣に死たいかッ！」

主稅は最う牙を切つて、燃る面に血迸る怒眼を瞋らした。其拳は戰々と顫へて居る。

「ふむ。然迄に死たいか？困つた奴のう。――然し、其の死たい念は、何時まで持つ？」

「……」

「…何時まで持續く？――や、これ返辭を爲い！」

「一、一生涯、持續きます!!」　と壓さるゝ積水の堤防を決する勢で言出した。

「むゝ、――然らば、――神文せい。――前文は要らぬ。唯だ父が指圖に隨つて、如何ならむ艱難にも堪ると云ふ、其趣意で、神文爲い。」

（十四）

幾許、甚麼を物有り氣に云はれたとても目下の此父が看透いた心底である。今更ら夢の樣な神文沙汰、益も無やとは思ひは爲たものゝ有繋に父親の命、澁々ながら言はるゝ儘の趣意を認めて、勸請を申すも張合の無き梵天帝釋四大天王、別しては日本大小の神祇の下に自己が名判と無名指の血を注いで。いざとて主税は差出すと。

「むゝ、善矣。――然らば改めて其方に申すが喃、其方と予とは、恩は父子。但し義に於ては、或る事件を生涯俱に爲さうと云ふ既や一味同盟の仲間じやぞ。――其れ已に一味と云へば、其處には今の、義と云ひ、信と云ひ、約と云ひ、罰と云ふ退引ならぬ者が生成て來る。――ふ事倘し其の信義に差違はゞ、父子の恩とて、其約を責め、其罰を下して、刀刃とも有らねば協らぬ境遇とも相成るぞ。それ、好いか喃?!」

仔細は知ぬが、其の面色から其の口氣、遽に從前の人非人てふ其父ともあらぬ氣色も見え

たので、主税は思はず容を改めて、

「はい！」

「寄れ。――近う寄れ。――此より予が意裏を語らう。――ちやが是れは秘中の秘で、他人は愚か、母兄弟にも氣觸をも感知せては成らぬじやぞ。――好い喃？これ！」

と、内藏助が、面色は嚴格に、座容は端正く、沈重なる其聲を鋭くして、

「承はれ。――復讐じや！」

「えッ?!」　と主税は餘りに其の思ひ懸けざるに驚愕て、猶其耳が疑はれるのに、

「誰、誰を讐討とござります？」　と慌遽て訊問た。

「誰が有るか。――讐敵は一個じや！」

「え、では吉良殿を？」　と彼は覺えず顫々と爲た。

「勿論の事。――殿が其「存命」と仰られたは其義では無いか。彼の討損じた白髮首――其を予が斬て、御位牌へとある其義を「内藏へ」と仰られたじやは！卽ち、復讐は某への君命――又た一同への御遺言じやぞ！分解たか！」

什麼に物を慌忙ればとて、炳たる日月を齟齬けたるが如き御遺言。其を我が血迷うた眼か

ら視僻めて、狼狽えた耳に聽僻めて、殿の御無念を晴すは單個の籠城！あの御切腹は公儀の御不僉議、其の御不僉義の公儀へ弓を引く――最期の一箭を進らするのが現今の我々が臣たるの道。と思へば〳〵頑愚の一關に好くも然樣思ひ込むだもの、吁嗟。

「殿樣、心得違へを致しました。――私、全く存じ違へを！」　と主税は遽に慴伏して泣く。內藏助も眼を屢瞬いて、

「いや、過失と存ずれば然のみの御叱責もあるまいか。――右にて予が心底も解せたであらう……。」

「父上には別して申し上げ樣も御座りませぬ。――唯だ思召を疑ひまして……。」

「悴の其方にも腰拔と見ゆる迄と無うては、如何な〳〵じや。――父は此上にも猶痴呆じやぞ。――は、腰拔じやぞ。」

と凄く笑つた父が眼と、此時風と目を見合した主税は、

「ちやが……。」　と漸く涙を拂つて、思ひ難た首を稍傾けて、

「……復讐と申せば、何れも敵の虚を擊ちまする。虚を擊ちまするには彼に油斷を爲するが詮。卽ち其有を秘して此に其無を見すとは御座りませうが。然ればとて何時迄も其體では、

外に味方も出來ませぬ。父子兩人。――餘りに無勢と御座りませぬか。彼が屋敷の樣、私も熟う存じては居りまするが……。」

「如何にも善い注意。然れどもな、其の思ひいる矢は唯一箭で、唯一心じやな。――一心さへ固ければ多勢は要らぬ。予と其方とで澤山じや。――見い、曾我兄弟。――吉良殿いかに富貴と雖も一萬石にも不足ぬ高家じや。當時の祐經を十にして其一つにも及ぶまい。然すれば用心も知れたる者で、父子二人で十分じや。で、予は痴呆。――其公も其間は甚麼にでも爲れ。」

大膽不敵！眼中既に彼れ無しと云ふ其の信念の固さには、彼の吉良殿が皺首も最う此方の手に轉つて居る樣な心地も爲れて、此で何かの邪魔さへ無くば其の本望も早や二月が中！と幾んど踊躍らぬ迄なる主税が歡喜の耳元へ。

「えへん！」

其聲は此の兩戸の外！

（十五）

秘密は漏れた。何者で有るかは知らぬが、確に今の大事の耳話を我は竊聞されたのである。

有馨の内藏助も阿呀との目を瞠張る。主税は其の指揮を待たず、掃の短鎗を押取つて、其雨戸をがらりと啓けた。

居待の月は今か昇つて、廊廡の影は薄墨ながら物の色彩を見するのであるが、――瞬驚いた。曲者は兩個。逃げもやらず突立て居る。

「やッ汝等は！」

閃らく刄尖を一人は遮つて、

「待た！靜に。惣右衛門じゃ。」

「忠左衛門、悄と御意得に參つた。主税殿御案内……。」

家内よりも射す行燈の光りに透視せば、名告るに差違はず、其は原と吉田とである。思ひも寄らぬ二人侍！彼等は冠りし覆面布を取つて。恁る際にも禮義亂さぬ色代して、縁へと上がる。

呆れたのは主税。故らに沈着を見せてゐる大石も油斷せぬ眼を配つて左右を屹と、

「ほう、兩所かな。異な御尋問じゃ。」

「如何にも。」　と惣右衛門はのッしと座に就くと。忠左衛門も後に續いて、

「主税殿、戸締を……。」

三人は此に相對した。主税は侍座する。なれと暫時は互に無言。睨み合の姿といふ其機を一轉したのは内藏助、

「はゝ惣右殿。渡せられたは又先刻の詰將棊の殘りかな。我等は早や雪隱詰じやで裾の寧つて逃げまする。」

呵々と笑ふ面をば、原は恨し氣に、又た睨むが樣に、

「御恨みじやよ貴所は喃う。――箇程の御心底あるならば何故悄とも申して御呉りやれぬ。實は喃う危險い事で。」

眉を顰せながら吉田を顧回ると。忠左衛門は物をば言はず、

「内藏殿、此れじや。――誤り入りました。」

双刀を脱て出すのである。奇怪！奇怪！其の奇怪の有樣を内藏助は又た「ほゝう」と微笑つて、

「あゝ此物は被下物かな。――辱けないが先刻も云ふ通りで喃、我等は町人と決めました此の結構な御刀も那の猫に小判じやで、御芳志ながら返上申す。」

と取附も無い。其でも何か寄邊の岸でも有りはせぬかと兩人は面見合したが、甚麽も無いので、

「實は喃う、貴所。我等は……。」　と今は强談の力盡くでも、其船を目的の港に漕着では措ぬ勢で忠左衛門は、

「……何を隱さう御自分が首を所望に參つた。――彌其の籠城を御拒否るなりや若者共への見懲めに其分にな措ぬ覺悟で、惣右と兩人な、參つて見ましたが承はつて驚き入りました。――も、甚麽も申さぬ。唯偏に隨身。――何卒其の主税殿後へ兩人が名を。――神以つて……。」

聞も了らず「はア？」と呆れた面をした内藏助は、

「首？。や、御無用々々々。」　と慌忙しく手を掉りながら頭を叩いて、

「此でも喃、昨日迄は城代家老の采配首じや。其節ならば粗末ながら三寶にも載りました物、何かの御用に立ちましたか不知ぬがの、今は新米商人の大石屋内藏兵衛が此の頭顱、は丶蕃茄の末實じや。持參れてからが可取替の飴屋に雁首程の通用も爲ませぬ物、ちやがの、此でも我等にや無いと苛う不自由を爲まするわ。で先づ當分は御免。――又た神文と

やら誓詞とやら。女郎の起請と商人の誓文は當座の出放題、お武家樣には早や御笑柄にも爲らぬで喃う、總て措かしやれ。――や主税、此樣な可怖いお客樣には御長居は此方が迷惑じやで。お穿物揃へて御送り申せ。――は丶、明日又た御座れ。」

と、餘りの白齒暮さ加減が如何にも面憎て、寧そ最初の存念通りにと思つて見たもの丶、其も何とやら、

「なりや最う忠左、賴憑ぬでも好え。――我々は今方も我々と思ふてじや、御主父子が敵討――天晴な義じや。なれと敵の上野も兎角は大身、曾我兄弟の事も今か言やつたが、又た返討も往々有る例じや。本意達せん日にやこりや御自分共ばかりが恥辱か、一つは嚴樣の御外聞。其も足輕や仲間連か、苟にも城代の内藏殿じや。見い大石があの醜態はよ。志は健氣いなれとも同志の一人も語ひ得で、僅かの父子で此の死恥曝らす。笑止の事よ。然ればこそ彼家も那の通りの滅却じや。赤穗五萬石、今まで何用に費はれたのか。と言はる丶も惜し、旁々でと思ふたが。――然程の疑惑なりや勝手に召され。――忠左去のう。我々は又た我々同志で其の一味の與う。ハレ厄代な！」

と勃氣な惣右衛門は起うと爲た。

（十六）

物有りて一打擊了ると燦と火の激る焰硝の如き頭腦の原惣右衛門、驟く迄も内藏助に翻哢されて彼の勃氣に起上るのを、あゝやと云ふ忠左衛門は袖を控へた。其をも振切つて彼は出やうと爲る。

此時迄が固唾を嚥むで控へて居た主税は、

「惣右殿、何卒今暫し……。」　と慌てゝ起て一方の袖を又た扯留めて。

主税は實に惣右衛門の心底を熟知にゐる。江戸を發つ時の舉動、道中にての物語、眞に是れ一點の批難すべき無き忠誠の士で、先刻父に、味方の人數不足を告げた、其時に。然らば誰を？と問はれたならば第一に推薦すべきは此人と、心大いに待構へる程にして居たのである。其人が測らずも來た。然も同盟の神文をと云ふ。花待つ宵に月を得て、雪降る庵に獸炭の惠を受けた其にも倍したる欣喜で、一も二も無き一味の方人と――看ると　豈料らむやで終局には此の始末。況て原が言ふ處を聞けば、一々道理の條理が有る。其を愚にする父の措置を彼は泣たい程に悲くて、

「父上、御遠慮もでござりまするが、其も御人に因りまする。惣右殿如きは此方からとも

是非申したい御仁。――何卒御本心明かされまして熟と御談合、――憚りながら其も殿樣御爲に御座ります。」

「主税、申されたよ。喃う内藏殿、御脫落も有るまいなれども所謂る多勢に無勢じやで、萬一の失敗等有つたとしてはこゝりや恢復が協らぬで喃。――猶我等愚存の申さば、初發にすはゝと事の決行ば本望は案の内じやも、二度三度と故障るれば其りや難かしい。地體此方は陰の仕事。先方は公儀御手も借る、自分手で警護も成る、屋敷の檢束も嚴重に爲る。吉良殿こそ其の萬石にも不足ぬ小身じやが、傍邊には十五萬石と云ふ大けな仕出し方が屬て居る。ぢやで、御身が仕損ずる、我等が行く。我等が遣り損なら。又た三番手がと云ふ樣ではこゝりや不可んがな。盜兒の間有れども守人の無暇しとは云ふものゝ、垣牢ければ盜入らずとも云ひますわ。況て五指の交るく弾かんよりは一拳に若ずの今の場合じや。で人數が要る。然し人數も一味の連判百人が有らば卽ぐ侵襲けて卽ぐ本意も成らうと思ふに。貴所が又た采配なりや總て仕損ねもあるまいで。――喃、扨て從前の意趣を殘さず、我黨が進退指揮て下されぬかい。」

忠左衛門が入り替つて言を盡した。常は無口の老人が這樣なとは、と怪訝な顏で聽いてゐ

た大石は、旋て、

「百人も有らばと云はるゝが。――其人數は喃？」

と眞劍らしい口は啓けた。忠左衛門は有理と點頭いて、

「今日の神文な五百三十餘。其の五人に一人を拔ても鐵石の壯士と云ふを百人は、得られうか喃。」

「其の壯士が果いて鐵石か喃――石も鐵も雨に曝され風に吹かるゝと案外に脆弱いもの。三年が間、飢寒に怖れず、妻子眷族が悲歎に屈撓ず、一心唯だ殿が御無念を、といふ其の信力が有らうか喃？」

「三年?!」　と忠左衛門も喫驚けば、惣石衛門も憫れた眼を爲た。主税も不審と、其驚を寄するのである。

「は、、三年が長いかな。――曾我殿原は十八年。桃栗でも三年じや……。」

と内藏助は冷しく笑ふ。其惡謔に堪ぬ惣石衛門は、半分は意地の躍起として、

「待う！待う！三年は末也。我等は五年が七年でも……。」

「いや、御身等は待れうが、――我等が言うのは其の御身等ぢや無い。――御身等が手に

驅集めらるゝ、其の壯士なのじや。」

「壯士とて同じ御家來。――無念は一つ。傳へ承はる越王が會稽の恥も三年が困苦の上……。」

と忠左衛門は喙を容れると。

「は、、、、御分は不通な。越王が困苦には目的が有る。――卽ち彼の唐にも有る義士還家錦衣じや、な。其の富貴の目的が有るから義士ならでも亦た難義にも堪へまじや。――處が此方なは、其の目的を果いた處が、贏け得るものは彼人の白髮首。で銘々は如何じや？切腹か、縛り首。――錦衣の代に經帷子。――詰らぬ喃！其の詰らぬを耐へて、三年が間、內外種々の難義に屈せで、本望！と云ふ信念が其等壯士に有りますか如何じやか喃。――其も唯だ倦て脫盟た。――其丈けなりや可え。――倘か萬一心得違うて世間に觸れたりや――千丈の堤も蟻の一穴！瓦落々々じや。な、可怖い事！」

「何故に又た然ら長い月日と申される？仔細は喃う。」

（十七）

今內藏助が云ふ「曾我殿原の十八年」は姑く指くも、何さま彼れ父子の微力をもて此の大事

を謀るとならば、其の三年、五年、或は猶ほ其多年も要るであらう。然れと我々のは百人で有る。卽ち其の大勢を忍び〳〵に海陸より江戸に下だして、此が總大將は內藏助我々も其の頭人の一人として、雨の夜、風の朝、夜擊にも朝蒐にも爲ば、彼れ吉良殿が頸に故殿が御遺恨の刃を擬てむこと何の物かは！恁て後一同、其の御位牌所たる泉岳寺に引取りて、の切腹、一死を善道に守りて息む。豈潔よからずや。と云ふが原吉田等の企望で。其には甚麼の三箇年か。約は其れが十分の一なる物の半年とも經ざる中に、經營の功は天晴れ成るものと信じたのである。

「何で其樣な長い月日が要り申す歟。」と彼等は聲を揃へると。

思ひきや、應答は無くて、內藏助は泫然たる涙を拭つた。

「御身等は、御家を什麼爲さる……。」

什麼爲るとは抑も什麼と云ふのであらう？什麼爲やうにも目下御家は潰れて居る。潰れたからこそ一同も恁う騷動ぐのので。安泰の御家とあらば誰が血眼に！と兩個は怪異むだ。

「氣附しやれぬか、大學殿が……。」

如何にも其は、御弟での大學殿は御座なされる。然も目下は彼の變事から、本所の下屋敷

に閉門の身で在られるので。

「本所樣が、御宥免かな？」

「いや、御宥免も勿論歎願うが。其よりも彼方樣を御跡嗣……。」

「何樣！」と彼等も了悟たのである。彼の本所樣と稱ふ大學殿は、餐に三千石の分知を受けて新規に寄合に召出された。其が再興と云ふ名義の下に、滅却た本家へ乘込まれる。卽ち細微々々でも御家の跡目を斷絕さぬと云ふ、其の被立置の奔走を內藏は爲樣といふ精神のと見た。

實に是れも國老たる大石が身分としては、其に肝煎るのも當然の事。でな有るが、不叶ぬとは斷言されぬも、其等を安閑として眺望て居るのは、雲井の餘所に飛ぶ雁を見て、悲買ひに行く樣なものでは有るまい歟。其實望が果して協うて、其肉が鍋中に煮れば妙だが、是れ今日に於ける顏ぶる疑問。可惜ら空腹を拐らして待つよりも、拙劣にもせよ、我は我が有合の香物にて其腹を脹らすのが優しのである。と、

「叶り申さうか喃？」

「さあ、叶る不叶ぬは我等分別にも及ばぬが、不叶ぬと謂つて我から棄て置くべき今日で

無い。殊に御家は代々御忠勤。別しては大坂冬夏兩御陣には、御高に合して首數の功。又た御本家藝州家へは、御兩方迄も丞儀姫君御輿入の御緣邊。其等の理由でな、歎願度々に及ぶだなりや滅家再興の枯木に花の待たれぬ運命も來るかと思ふで喃。我等が意見は總て が其事。――籠城の異存も其事。今の三年と云ふたも其事。時節を待つも、温順しう退身するも、喰逸らぬ用心に町人に爲らうと云ふのも其事。――凡そ世中の失敗は、看居の着かぬ仕事と云ふを怒じ手を出いて爲るのに有る。――其の手本はあゝ那の庭瀬じやが、憶へば喃廿餘年前、我等彼の城受取に參つたが。其が又た現下の我身かい！各位もの う那の尼殿や兩家老の二の舞を爲れぬやうに喃……。」

と、此語のみに眞實を披瀝たらしくて、內藏助も沁々言つた。

「では、貴所は先づ御家再興――本所樣御出世を待たるゝと喃！――あゝ其も好うゐ座ろ。――忠左、退去らう。內藏殿心底然樣有るとなりや此上の議論も可惜ら口じや。即ち、同道じからざれば相爲に謀らすじや。――我等は我等での！」

と不興に重ぬるに鬱憤を以てした惣右衛門は、最う起身の刀を杖である。

「ぢやが喃、惣右。」　と險しく喚掛けた大石は極めた眞面で、

「頭梁强くて家を倒す、――お主が我意で立つべき御家を潰すなよ。」

「えい好うござる。不要ぬ所の世話！御身は其の食損せぬ樣、百年も御家の立つをゐ待れさ。」

原は吉田を引拉てゝ戸外へ出たが、其處で忌々し氣に唾吐く聲が二回出まで爲た。

（十八）

何彼と云ふて故障を入れて此方籠城の妨害を爲る內藏助。其の御家再興といふも命惜さの假名で、三年の五年のと出來ぬ相談の仇討話を持ち掛るも、人の噂も七十五日の立消を目的とする臭怯の魂膽とは看透いた。凡そ那時の御切腹の樣、催促の御使まで立てられた御情け無さをもて察するにも、彼の御慶事に不祥の血を塗らした上樣の御不興、如何計りかと云ふも知られて有るに。其の御腹立の最中へ家名再興の歎願？放蕩た門へ金借に行く如きものとあるのは如何な盲目にも推測れる。素奴抑も其れ程の眼の亡い男か？でも有るまいに！――えゝい措け！賴まれぬ者は不賴ぬにして。命惜む奴は惜むにして。扨て此方が鬱憤は甚麼して晴さう歟？！と原惣右衛門、此夜は眠ずに一夜熟考へた。

熟考へたが、熟考へたが、什麼しても籠城の討死より他に術は無い！〻肚裏を決着た。就

ては其の決着た肚裏を、夜明けなば登城に及むで、昨日連判の一同へも通じて更に彼等が胸をも決定さする、其れ最も緊要である。噫誰か父母莫からむ、又誰か妻子莫からむ、其の父母は我を産み、妻子は亦た我之を養育ふ、皆是れ君の御恩と有るものを、此期に及むで命を惜む、内藏助如き者のみとも有るまじとの彼は決心で、憤涙を揮つて夜の白むを待て城内へ出た。

城中には有繋に昨日より詰切の壯士といふのも四五十人は在る。彼等は彼が出頭の姿を待ち迎へて、

「惣右殿、昨夜は首尾は？」

「いや別義も御座らんで、右は追附け各位にも御意得る事と爲る。先づ其よりも今日諸向の惣登城。各位手分して家老物頭衆中より諸士以上、志有る向は隱居部屋住次三男まで未半刻を遲れざる樣大書院へ寄合と觸れ召され。さゝ急がれて……。」

日は快晴と迄には無きも、雨にもならで、出歩くには好き花曇の暖からず又た寒からずで有る。一重は散れるも愛宕山の八重櫻と中村川の紫雲英、野中坂越の菜種の花は今が眞盛り。蝶の翅風も峰の囀鳴も、辨當の重箱も秘藏の瓢箪も、漬立の酢、煮染の鍋、天地萬物

皆是の遊の一字の爲め忙殺しかるべき此の彌生の中旬を、無慘やな今日は城内必死といふなる合戰の評定。其の時刻と云ふ未の歩みも待ち難ねて、馬の足掻に馳せ着る三の丸の場末住居に。我も後れじと二の丸の近間の向は早や鎧櫓を擔ぎ出す大逸りの騷動。混多を返す犇聲に膽を潰して、狼狽て、我も同じく周章て出て來たのは彼の二家老の大野九郎兵衛、

「此は如何じや。此、此騷動は?!」

玄關を上るなり喚き散らして、彼の大書院の床前に中腰に座を構へたが、

「内藏殿は？」

睨め廻すのを引取たは惣右衛門、

「今日は出席ござらぬ。――座に見えまするは其れ以外の面々計り。」　と會釋を爲る。

其にも碌々目を與れで、

「以外とは甚麼の趣意じやな。――地體此の會合は誰人の發起じや喃？」

と彼は彌睨め廻す。勿論此の老夫、敵手の手にも足らぬ奴では有るものゝ、猶ほ芋でも頭と名の附く二家老である。其葉の頭掉を此場で掉らせるのも妙ならずと、原は鎭着て、

「發起は拙者。――本來ならば貴所へも御内議申すべき理由とは有るじやがな、火急の義。殊には籠城。殿樣御爲に御異議も無い事と推量申して指附に御出座を乞ひましたるじや。不屆の段は幾重にも、喃。――扨て御家老も御見えとあれば、此より我等、改めての演述……。」

と正座り掛けると。彼の中腰を突如居丈高にした九郎兵衛爺、眼を睜爲として、

「あゝや、ゝ無用！悉皆無用！――一體が出過た！――御分は何者じや。足輕頭じや。――足輕頭の職分たりや其の預りの足輕組を好う取締つて、重役中の指圖の聞いて、其指圖通りに勤めらるゝ、ソレ足輕頭の役前じや。――然るに、甚麼じや、籠城の僉議？大遲れた！其も歷々の衆中の内沙汰でも受けて爲る事か、此座なる物頭、伊藤玉虫外村を初として用役給人奉行共へも甚麼の無沙汰に、自己が面目の出來し立に箇條な所爲さしやる！――原來が此の大書院な、貴樣等が自儘の用事に使ふ場所で無い。殿が御座らば殿。御座らねば家老たる我々が承はつて、城代の名義で面々へ公の義を申し達する其の場所じや。――何と心得で箇樣な義を?!」

世界の熊膽を一人で嘗めた、苦いも〳〵、傍の看る目も嘔吐を爲つべき其面で、彼は一座

殘らずを睨め頁した。

（十九）

大野九郎兵衛が苦澁い口にも一理屈はある。其の小理屈を小楯に取て、何國の浦でも金持と高持と疝氣持は戰爭が嫌ひといふ其の物頭の連中共が、稍臆病風を吹せ初めたのを看て、素破大事と席を進めたのが籠城主張の一人たる奥野將監。彼は用役である。今九郎兵衛が

「用役共にも沙汰無し」と云ふ其辭尻を卽ぐ捉ふる氣で、

「九郎衛殿、此の寄合の發起には用役たる拙者も加はり居る。先づ此段を御屆け申す。」

九郎兵衛はぢろ、ゝと視た、

「屆と云ふは事後で致さるゝものじやか喃？」

「いや其義は、齟齬で……。」

「齟齬が言譯に爲りますか喃？」

將監も礒地と憤恚た、

「枝葉な義を！物の齟齬を嚴格しう云はるゝ杯は平日の事。此の大變の急場。屆の前後が何程の義で。――本來は御身樣方が此の寄合の發起とも有るべきじやのを、唯譽込んで、

逃支度ばかりお爲れる。其で我々が……。」

「これ〳〵〳〵將監、貴樣何時其樣な口唇く役には昇進召された喃。――第一急場とは甚麼じや――逃支度とは何を指いてじや。――やッこれ將監。公儀目附方、本所御屋敷の御分家樣（大學）、又た御親類御惣代の采女正樣（戸田家）等三方より、昨夜夜更けて到達の刻限附早飛脚の御達、又た被下の御狀の表に據ると爲れば喃、當地總家中又者末々に至る迄、屹度相慎み、穩便を專一、物騒しき義一切相成らず。自然心得違の者有之節は、本所樣御初め、御本家、御親類總中樣にも特殊なる御迷惑とも有るべき義とこれ有るぞ。且つは本月中、城御受取の役人衆、並に城番の大名方の到着までに銘々家財取片附け、其節にいたり周章の儀とも無之樣にと御添書にも吳々とこれ有るわ。此れに依て今朝内藏殿とも談合して、近日中より御城附の金銀等、日割を以て總家中下々迄へも分配の事。又た追々は手廻し次第、在々所々へも退散の義。取計はうとも存じ居る唯今じやに。其れを何か、討手でも來る急場かの、逃支度のと、何を以て然は申される。――や、將監、惣右衛門。其餘馬鹿騒動を致す者共。――殿樣御家は扨て是非ないも、殘せられての御分家の本所樣、幷に御本家、御親類御惣中樣へも此上の御迷惑、相掛くる覺悟のか。さ、如何じや

喃」

痩肱を斜に、仲張り放題に仲張り出した大野九郎兵衛。猶念の爲にと云ふのか、追風に帆の鼻嵐を一層强く吹かせる意か、勝つに誇つた母衣武者の幌大に膨ませた其懷中から恭しく彼の到着の三通と云ふのを執り出して、眼鏡ものして、座中を睨め〳〵、高かに讀むのである。

呆れたのか、恐入つたのか、一座は實に人無きかと迄に森然として、時々唯だ固唾を嚥む音のみが歇歇でも爲る歟の樣にも耳に響く。其他に聞えるのは、物悲し氣に搔鳴してゐる帶曲輪の松風の琴音、自己も忌はし氣に呱々と啼く天守櫓の鴉の聲。其れを仰いで歎ずる如くに遙かの下座の一人が呻き出すと、之に應じて何處からとも無く潤々と響たのが、突如堤防の崩壞るゝ勢で囂々と犇き亘つた。此を看ると大野が目授で四五人ほと突立ち上つた、其眞先に出たのが物頭の玉虫と外村で、

「一人も起つ事相成らん！起ては不可ん！唯今御家老衆から申渡されが有る。別して我等が組下の士は一人も退座は成らん！」

物頭と云へば侍大將、其大將の配下に屬くのは諸士で。此席の諸士以上とある皆其人の

だから、甚麼かは知らず其頭の制止の儘に彼等は鎭靜つた。九郎兵衛が得意は頓に揚々たる的である。

「さ、面々。流石に右の御達なり、被下の御剪紙なりに違背の輩も有るまいが。有らば御家の仇、公儀御法を背く者じやで。彼の配分金下渡さゞるのみならず、拙者共指圖で一々卽時に召捕へる。――承はれば昨日とか、或る一二の輩の心得違で穩かならぬ神文とか血判とかを致された衆もこれ有るげな。――尤も右は一時の事。其を破却とある以上は咎めも致さぬが、然無からん輩に於ては右の嚴重の處置致す。――扨て今日の此の寄合は根本からが右錯誤て居る。仍て唯今退散さする。一同孰も引取りやれい。」

言棄て再た睨め廻したなり、彼は會釋も爲ず其座を去つた。

（十二）

惣右衛門を初端として、奥野進藤小山河村吉田の面々、所謂る籠城方なる壯士頭の人々は、城を出るなり卽ゞ其歩で、殿の御菩提所なる上假屋の彼の華嶽寺へ聚合つた。が、其の人類は唯だ十四五人。なれと其は右にも云ふ大將分で、士卒たる向は此後から廿人乃至三十人、追蒐け引蒐け團隊を作して、結句昨日の神文の五百三十有餘人。假に其を內端に積算

るも、三百餘り、四百近くは來る者として。彼等は大野等が不忠を怒り、無情を憤り、聽病を嗤ひ、腰拔を嘲つて。盤根錯節に遇ずんば利器を見ず。金鐵の心膓は其の砥礪に會ふ毎に益其の堅實を顯はすもので、天晴れ此より來るべき勇士猛卒、其等を提げてこそ赤穗武士が最期の華やかなる一戰も成るのである。あゝ疾く來よかし、あら遲や。と暑歩を仰いで、薄暮の近づくに氣を揉むで、且つ勇み、且つ焦刺り、或る者は本堂に、或る者は玄關に、或る者は門外にまで出張て、其の着到の帳を手にして待つたが、

成る程、來は來たのである。併ながら其の來方が、大甚だ心許ないちらりほらりで有つた。恁ういふ理由では無いので有るが、什麼爲たのであらう。想ふに先刻の那の御書への遠慮で、晝間は出られぬ、因で夜陰のか。如何にも解せた。然らば先づ篝の用意。門へは高張。肝腎の勇士を飢しては成らぬから粥の支度。酒も少々。――と惣右衛門に將監、源四郎に傳兵衛。馴れぬ手業に薪から蠟燭、飯米から酒味噌等の手當まで爲て、待たが〳〵。日は暮れて、初夜過ぐるまで、其の景色の寥々たる的は特り雨催ひの今宵の空なる星影のみでは無い。此の寺內に於けるも猶然矣で、彼の大將分の原、奥野等を一所にして、來集る者、無情や五十三人！怡彼の連判の十分が一の弱である。

吁、五十三人！此の僅々たる少人數で甚麼事と謂ふが出來やうぞ！假令其れが金鐵百錬の士とあるにも爲よで、戰爭は一つは嵩物であるから、彼の百には到底我が一つ敵せぬのである。——勿論、其れは四方の討手を引受けて、勝利を獲やうの、始終の運を開かうのと、其樣機心の有るのでは無い。唯だ一死以て君家に殉ずる家來としての意地。所謂る最期の思ひ出なるもので、手快く云へば往懸の駄賃である。——では有るが、其れも之では下世話の「口汚し」と云ふのに止つて。其の思ひ出の腹一杯の動作も什麼で有らうかで。明智の天下を三日と云ふなら、或は此を赤穗の半日籠城と——嗤笑を世間に遺すには過ぎまい歟の憂懼も有る。

「如何召さる惣右、此の慘狀では……？」

八方から責問られるので、惣右衛門も取つ舍つである。

「兎角は拙者、城内へ參つて見屆けませう。箇樣な理由では御座らんので……。」

原は一人、忍出立で寺中を出掛けたが、良小一時の後に還つて來た。問はずして知る百事の去るを。彼の面色は幾んど土色のである。

「不可ん！殘らず變心じゃ!!」

昨日の逮判者の十が九までの變心とは、追々馳せ着くる這般なる一味の注進にもおろ〳〵は聞えたものゝ、豈夫に然迄はと思惟つたのが大的違ひ。實際大野等の手の廻り方の素快いのと、一同の安心の決着さ加減の悠長なのには、惣右衛門も實以て喫驚入いた。彼等は、彼の九郎兵衛が讀上げた書附の爲に幾分の鋭氣を殺がれたには相違も有るまいも、猶彼等は或る者の說として恁う云ふ事を言つて居る。曰く、今に御家は半知で立つ。——然すれば我々も從前の取前の半分で召抱に爲る。——其を今騷げば元も利も失する。是は迂可とは？思案どころ！——と其の多數は門戸を鎖して、家内共々謹慎して居る。猶其他にも、華嶽寺へ屯集ると割賦金の分配を除かれる。加之ならで、捕手が向つて土足の繩に掛けられるとの風評抔が、血判の血に後脚で砂を蹴掛けた甚麼やらに似たお詩聚の、心暗に恐怖を爲して音も立てずに居る由緣である。

「不可ん。駝目！で我等は、既や追腹と決着申した!!」

と、原惣右衛門、此時初めて、潸然と憤涙を流した。

（二十一）

吁嗟、追腹か！

既に是れ籠城も克らず、又た物の意地として汚目々々と彼の大野等が臀後に匍匐ふも協はぬ彼等は、憐れ、憫れ、其の立場として殉死と謂ふなる一事より他は現下無いのである。其で惣右衛門も涙を揮つて其の失望の呻唸を意恨の口から發言した。

勿論、此には異議もあつた。目下徒死ぬのは什麼しても無念である、然る程ならば此の人數で城に取り蒐て、九郎兵衛初め不忠の輩を血祭にして其後に潔よく！と逸る者も有つたが。其では彌世間の笑柄、結句は故殿の御恥を露はすに當る。此は嬰くまで彼の死を善道に守りて、責ては赤穂にも士らしき士、僅少ながらも此れ丈は居た、豈夫に飯食うて糞放るが外、恥辱も義理も知らぬ者のみでは無つたとの人の嘲口を塞ぐのが本意。兄弟墻に鬩げども本文に證はぬば成らぬ處。と頭分が妥當しい意見ので、

「是れは惣右お言やる通りに追腹か喃。――但し其も多勢は詮無い義じや。我々共で十人！壯手の衆は又た甚麼ぞの後日に喃う。」

と本堂の柱に凭て沈着めて云ふのは奥野將監。「勿論！」と此言に同意したのは原を初め、進藤小山吉田河村の人々で。其の退散を壯者に命じたが、彼等は彼等で「然らば可然く」とは言はなむだ。其爭ひや君子なる如何な如何なの混多返して。我死む。彼屠むの庇護合

から口論と爲り、其終局は既や面倒！と双肌さへも押し寛げる。

其を仲裁たのが進藤源四郎。然程の義ならば誰彼とは云ふまい、所詮は我々一業の所感、一列に揃つて切腹。と云ふのに一同も始めて色を和して、其處で本堂から書院に順序を亂さず、兩列に座並むだ五十三人。鳴を鎮めて、固唾を呑むで、頭分たる老輩の指揮と云ふのを待つので有つた。

固より覺悟である。此場に臨むで女々しい執着の絮言など、其は無いが。然ばとて、年長なるは妻も有れば子女も有る。年弱なるは父母に兄弟姉妹、懷しい其等を看棄て今我に逝くのである。其を念ふと秋霜烈日の凜乎たるものも幾分か暈つて、蕭條たる夜雨の暗黑きに迷ふが如き胸裏、是非なき袂は露けさのみ增ると云ふ座敷の爲體。

多時は誰彼も無言であつた。鼻拭む音のみ生憎に響いて聞える其の破障子をがらりと啓させて、鉢卷したる納所坊主に掛聲勇ましく擔ぎ込せたのを何かと見ると。彼の嚢の酒樽二本。先に立つたは例の和尚の海首座で、

「いや各位。書間からの御寄合じやが、拙僧生憎く持病の癪氣でな、御見舞も得爲なむだじや。夜寒でござる、一種調せさせたるで先刻御調への酒を今持參させました。下世

話に申す寺から里へ。——然し拙僧も相伴しますぞ。あはゝゝゝ。」

何時もの元氣で「それ〳〵」と指圖をすると。大皿へ紫の山とこゝと盛つたは蛸肴。銘々の前へいざとて勸めて。早や盃と茶碗を取交せに雛僧は冷酒を注で廻るので。

憫れて物も言ひ難ねたるは一同である。苦り切て其盃さへ手に執り上ずに居ると。和尙は莞爾と、

「如何じやな御銘々、御酒吃らんかな。貧寺の馳走は恁麼物じやが。御口に合んか喃……。」

彼は無遠慮に、自個は飲み且つ喫ふのである。

豫ては此の和尙、道德の聞え高きは原奥野等も知てゐる。別しては故殿奥方の族兄。況んや香華院の住職として、當座の善智識とも見るべきので有るから、いでと云ふ時は當來の導師。最期の一偈をも授からうと思つて居た處。其れが此の醜態で、人前も憚からぬ蛸の友喰。言語道斷！呆れ果てたる慳さ坊主の頭苦入道と、惣右衛門は前なる皿を扇ではたと押排つて、目に廉立て、

「拙者共、精進じやッ！」

「は、あ在家にも似合はぬ御心掛け。——什麼お爲れたのか喃？」

僧さも憎しと猶苦々しく、

「我等主人はな、此程切腹して果て申された。其で一同、精進いたす！」

「ほゝう其で精進かい？では殿が蛸に爲られたとも、冥途から便宜でさ有つたか喃？」

あッはゝ、と云ふ傍若無人！

（二十二）

呆れる、憫れる！殿が蛸に爲られたか拵、苟にも和尙と云ふ者の口からして言れた義理か。況て御菩提寺。況て御俗緣！可憎い惡坊主!!と惣右衛門は起身上つた。

「和尙！貴樣、其でも僧人か?!」

罵れても和尙は平氣で、

「何者と見えるか喃？——頭を圓めて、寺に棲居て、佛に作る工夫を爲て居る。——猶且僧伽か喃。」

「坊主も——糞！糞坊主!!」

「糞でも坊主じや。今に佛に作る。」

「不淨を吃う腥さ坊主が佛に作れるかい！」

「肉も喫ひ得ぬ侍と云ふが武士に爲れるか喃？」

彌呆れた惣右衛門を初め五十餘人は、此の一撥に遇うて目を視合せた。

「蛸は喫はれる物。家來は主に使はれる者。武士は義の爲に一命を惜まぬ者じゃ。」

あはゝゝゝゝと未だ嘲笑て居る。此を聽いた吉田忠左衛門は何と思つたか座から進み出た。

「和尙。折角の教化も凡夫の我等には熟う會得ぬで、今些し淵底までを盡されたい。——蛸肴の吃はるゝ者とは承知した。家來が主の先途に立つも、此も聊か心得はある。武士は義の爲に果るといふ、其を故ら諷刺られたかの樣にも聞ゆるが。——我等一同、——唯だ今日の立場、故殿が御跡を慕うての殉死は義理の一分を盡した物とも自身は存ずるが。——未熟かな？」

流石此人とて義理を分別ての神妙に問訊すると、和尙は猶嚮の嚮然を續けて、

「御自讃じやの。はゝゝゝ。蛸は被食る者と知つたりや、其の被食る樣にして死ぬが蛸の本意じやろ。武士も義の爲に果ると知られたりや、其の忠義の極意を盡して身を棄るが

其道の本望じやろ。——殉死と云ふのは、蛸ならば我穴で空しく死むで、皿にも盛れず、人にも食れず、海底の塵芥、藻屑と一つに徒爾の贅物に腐敗つて了ふ。——御身等がのは、先づ其類か喃？」

「贅物とは？」　と原は哮つた。

「此の蛸肴を進せても、食れねば贅物じや。折角の武士を立られても、無益に死ねば贅物じや。」

「ぢや、復讐と御言やる歟！」　と吉田は膝を進めたのである。

「誰が、はゝはゝ、然樣の事を申さうかい。拙僧は方外の人、浮世の事とては一切不知ぬ。ぢやが喃、唐の何たら云ふ王樣じや、多分の金銀で堂塔を建立れたが我が慢心と百姓の心に協はぬとて、俺が師匠の達磨殿はの、無功德！と叱斥れた。折角の一命を棄ても其の無功德に爲つては駝目じや。善う脚下になる。——秘事は睫毛じやで。——いや此は痛い——あ痛々々。又た疝癪じや。是れで御免。やれ御寛りと……。」

言たなり和尙は會釋して引込むと。跡は呆氣閑！

さあ方角に迷つたのである。什麼爲た物だらう。殉死が蛸肴の無功德と爲れば、殘る思案

は復讐であるが、其の至難の最大一義たる仇家の首を取ると云ふのが抑も我々に出來る仕事か。是れが當面ての大疑問。先づ此の決着が肝要である。

決着と云つても別とは無い、此程大石に沁々も言れた彼の「三年」の二字。此の長き日月の間、這の多數の人間の、志を變せず、困苦に挫げず、協らぬ辛抱の爲切れるや否やの問題、唯だ其れ而已の事、けれども其の其事が難いので彼とも手を斷た。——殉死の意趣も一つは其處に在る。

勿論此方がいざと云ふ日には、彼れ内藏助が如き悠長の手段は取らぬ。隨つて其の三年の五年のと云ふ時日は費らぬ。結句此座なる五十餘人の人數を纏めて、明日にも江戸下向。然して時機を計つて彼が屋敷か出行先かを襲擊うと爲る。其には物の半年とも要るまいが、窮困るのは唯其時迄の金銀。——今一つは關所の切手の其れで有る。

恁う考慮へたは有繋に老練の吉田と原で、壯者の向には中々其れ處の遠慮は無い。那の坊主、寺中の迷惑に爲るを難れて體好く追拂ひの策を講るのである。復讐の甚麼のと其樣迂遠い事。只だ思ひ立つたる初一念通り御位牌の前にて切腹！然樣決着た——と逸るのを、まあ〳〵待た。和尚の言にも一理は有る。切腹だけなら何時でも成る。爲た後での後悔も

有てはじやから姑づ此は我等兩人に其の屠るべき腹、預けられて。と惣右衛門に忠左衛門其に同意の頭分四五人は、頭腦を碎り胸臆を叩いて、漸くに考案へ出したのが、彼の大坂に居る用達町人の天野屋利兵衛。

「然樣じや、彼者に用金の調達。其から廻船。——依賴むと致さう。」

（二十三）

天野屋利兵衛を依賴むとの思附は至極妙である。幸ひ彼は一昨日頃城下に見えた。大坂まででも無し、加里屋上假屋坂越の三ケ所を尋ねなば。と一個が云ふと又一個が。いや博勞町の井筒屋か確か定宿じや、多分は其處に……。然らば惣右殿、忠左殿、御大儀ながら。と此で兩人は多勢の惣代として、取り敢ず華嶽寺を出る。其頃は早や夜も明放れて、今朝は快晴の上天氣。

如何にも彼の用達の天利は一昨日赤穗に來た。彼が俠氣は恁る際にも彌顯著れて、其身は町人の討つ組づの合戰こそ成るまじけれ、兵糧箭種彈藥等の買入とあらば如何程々承はらむ、又た其以前に足弱の衆を遠國他國へ落さるゝとならば、用意の廻船も三艘あり、何方なりとも御指圖の港へ。と大石が方へ内々申し出たのであるが。彼の籠城は沙汰止。其方

には何れ甚麽かの談合をも賴む心底、暫く城下に逗留して居よと言はれる。猶其れには其れの種々の密議も有たので、彼は手船を坂越に繫けて、自身は城下の博勞町の定宿に遊むで居る。

「もう寺から使が來さうなものじや喃……。」

使僧は來ずに、見えたのは吉田と原である。

「やあ御兩所か。」　と、船乘の早起とて、六時前から衾を疊むで、起て見ても所在が無いのに。其に些しは小焦刺の氣味もある。一銚子燗けさせたのを呷り〳〵と喫て居た、其酒調度を遽に片附けさして、

「さゝ先づ此方へ。見苦しうはこはりまするが。」

急に手を叩いて茶を出させる、菓子を出させる。此の時代には饗應の一つに衾つて居る烟草盆から、酒の支度も言附る體。

「構はしやるなよ、我等其處ところの猶豫は無い。——時に利兵衛。」　と總右衛門は小膝を丁と、

「……貴所、依賴が有る！」

「は、御依賴？大抵は心得ました。——あの御籠城でな？いや御勇ましい。然樣無うては濟しやれぬ義で。如何に公儀の御法じやとても御三代からの御城を徒だ渡される、其樣な事が爲りませうかや。町人でもじや。況て皆樣方。——潔よく籠城なされて華々しく御切腹。——あゝ武士の鑑！——右に就ての金子其餘の御用とあらば天利身代を拂ひましても！はゝ、熟と承はりませう。」

と大請込に請込むで呉れるのが餘り有難た過ぎるので、原も言ひ難ねた。

「いや其義もじやが。——些と內々に喃。——他聞は有るまいか。」

「勿論でざらぬ。此家中に泊客は私限りで。——又實の申さば其の御遠慮にも及ばぬ義で。赤穗の籠城。大坂邊でも誰一人申さぬ者とてではりませぬ。御秘包も無益。此際には御手一杯にな……。」

「いや。」と悄化て原は吉田を見た。折柄射し込む朝日の影の目眩いのと、忠左衛門は此の困却を一所にして、

「實は喃う、其の籠城の談合もあつたじやが、異論も有る、人數も揃はぬで、其よりもと昨夕御菩提寺の華嶽寺へ引取つた……。」

「はゝ、如何にも那處にて御寄合？――右は什麽御決着……？」

「其の決着が喃、最初を申すと、追腹じや、――今もお言やる、思ふ儘の籠城して潔よく切腹をと存じたのが、其れが協らぬで、寧そは殉死と――一同も決心を喃……。」

と言罷て忠左衛門も頭を搔く。思へば餘りに言効の無い慚愧さで、鬼蔵が倦たから目隱蔵に爲る、目隱蔵も厭に爲つたから隱蔵に爲る。兒童の遊戯とて眞逆に其れ程には變換も爲まいを。鬚喰反らした、白髪の生た老人手合が十人も集つて、壯者輩が一命を翫弄物の幼蔵を爲る。信義を守るが武士と云ふのに其でも士人か、と此の使奴に詬れたならば其ッ限り、返答も成り難ねる次第と云ふので彼は其の疚しさに堪ずして言濁むと。利兵衛は怪訝な顏、

「へゝえ？其れから？」

恁ては果てじと原は皮切を炙く思で、

「其も又た些と仔細があつて、今回はの、復讐と決め申したじや！」

彼は聞くなり、滿面の苦笑の中から、對手の意志を解うと爲たのか、凝と其面を視たのである。

（二十四）

惣右衛門は苦笑を爲る、忠左衛門は面を背ける。利兵衛は其眉を大に皺めて。

「ま、度苛い事、思立たしやれました喃。――シテ御人數は？」

「五十三人。――我等とも……。」　と惣右衛門は又た其面を視る。

「で、其の御頭は？」　と額を突出すと。

「無い。」　と頭を掉る。

「御頭が無くて、誰が采幣を執らしやれます？」　と推問すのを。

「銘々采幣。――五十三人寄合うて評定いたす。」　と惣右衛門の語氣は頗る粗い。

「御銘々の采幣も好でざりませうが。――で、私への御用は喃？」

「別義でも無いが。」　と忠左衛門は入換つて、

「其が爲め江戸表へ那の人數を送るじやな。固より是れ微行の道中、陸路を參らば新井箱根の關所も有る。又た路銀と申しても大分の事。縱や其の路銀だけは銘々調達を致すと爲てからが、彼地に着後、其の時節の來る迄は物の三月と半年は經たうかい。其間の取續きが喃う羞恥しながら我等趣向に及ばぬで。先づ其の金子の才覺と喃。――又た江戸下向も

貴所が手船を借受けてなあ、品川沖なり、乃至浦賀なり館山なりへ……。」　と、彼は又
七窃に其が氣色を覗つて、
「……御身がの難義も察しよるがな、我等がのも其の詰つた意地。我が口からは些と申し
難いが此も忠義の端塊で、又七御身も御扶持の御恩を果さるゝと云ふものじや。――但し
迷惑は一切懸けぬ。如何な義が御座らうとも喃、御身が名前を出す等の事は兩人、双刀に
掛て致さぬで、何うか此の依頼――領承けては下されぬか喃。」
忠左衛門は其の穏當な調子で、依頼むと云ふよりは寧ろ口説いた。幾んど眼に涙を泛ぶる
迄にして。手を拜さぬ計りにして。
「あ、宜しうございます。殿様御無念の懸つた首、取らうと爲される、天晴の御心懸。利
兵衛萬端……。」　と彼は感激の涙さへ啜つて、
「……確に御擔當。――も、御案じ成されますな――ぢやが、何故又た其中の御一人を大
將に爲されませぬ？」
「さァ其義じや。」　と惣右衛門も頭を抓いて、
「奥野、進藤、小山、河村。此の四人が先づ其仁じやが。――扨て其中の一人をと云ふて

は喃……。」
聞も了らず利兵衛は否々と頭掉を掉つた、
「不可ぬ〳〵！無躾ながら其りや不可ませぬ。奥野進藤御兩所には、御勇氣と御智慧はあ
る、仁愛が無い。河村小山の御兩人は、御愛憐はあるが智慧と勇氣が乏い。で、御器量が
何れも小さい。器量の小さい大將は埒明ませぬでな。そりや私が手船の船頭でも知れます
る。僅か五人か八人の船子を使役うですら、氣前と、決斷と、人情の有る船頭で無けねば
船が動かぬ。況て此りや戰鬪。一命を賭の合戰の大將に智仁勇の三德が缺て居つては如何
なじや。事は成就まへぬ。こりや御思案じやな。」
「然し、我等は忠義じやよ」。　と惣右衛門は再た苦笑。
「其の忠義もじや。憚りながら五十何人、一個型鎧で固めた樣な御人のみとは、私、信用
られぬ。現在が籠城から追腹、其の追腹が又た仇討じや。同じ忠義と云ひながらもぐらぐ
ら變換る。其處へ肝腎の大將が無い。有ても未熟と申したりや……。」
「やァ利兵衛！其で御身、否じや云ふのか?!」
倘やと原は勃氣。

「いや。はゝはゝ。御爲を存せねば恁樣な無禮、言ひませぬ。存ずればこそ恁う申すのじや。——何故御身樣方は那樣な好い大將有るに御目が附かれぬ。——あの大石殿！」

彼は從前の謙遜なる態度を全然と棄てゝ、胡座こそ搔かぬが寢伸上り氣味の、左方の肩頭を大丹前ぐるみぐいと突出して、右手に握つた交張の大煙管で獅噛火鉢をぐわんと一擊。

「なあ原樣。——俺は那方より外、此の大將の無いじやと思ひます。」

（二十五）

話分兩頭で、其後の大石が模樣を說く。

彼は彼の夜中、原吉田の兩人に不意の庭口からの訪問を受けて、議論の末が惣右衛門の不興を買つて、出て行かれた後、稍小一時は兀座沈黙、大聖の定に入りたる如く、傍邊に我子の在るかをも忘却て、瞑目し、閉息し、飽く迄も思慮を煉る——と云ふよりも考案の底に沈むだと謂ふ體であつたが。旋てに主税に密意を授けて、窃に裏門から出して遣たので。

——其時は早や曉七時。

此の主税と出違へに來たのが、彼の江戸表からの飛脚であつた。——宛名は自分と同役の大野九郎兵衛。爰で家來の孫左衛門を馳せて九郎兵衛を喚びに遣る。彼は來る。開封の上、

兩人の談合數刻に及むで、九郎兵衛は歸ると。又た引違へに主税に伴れられて來た僧俗の兩個。其の兩個とは別人ならぬ華嶽寺の海和尙と、昨日當所へ駐着けた天野屋利兵衛。これに主税をも加へた父子と主客の四つ鐵輪で、眞の密談の膝突合せた。其れが果ると恰ど朝飯の時刻。和尙も利兵衛も膳を了つて卒忽々々に去つた。

其後の內藏助は再た居間に籠つて、以前の如くの黙座。折節に手に取り上て、拔放して遺恨の眼に瞬もせず凝視るのは、故殿が無念の血を染られた其の九寸五分！

彼は或る向の人にこそ其の平氣を假粧つて、彼の九郎兵衛や物頭と同樣、無意味なる平和を唱へて、籠城を非難して、自個は此からの樂隱居、家財悉皆を主税に讓與して、歌枕見ながらの廻國順禮、老僕一人に兩掛一荷。殿が御菩提の爲に西國の三十三所と、いゝ口續けの念佛三昧に浮世の風を隣家のものに爲て居るのではあるが、心は虎と見て射る矢の唯一筋、父子二人の念力で徹すものか、徹せぬものかと涙を嚙む。其の胸先に當面いて懸念に堪ぬのは原に吉田等、彼の連判の一群の壯士が身上である。

彼が、多きを辭して寡きを取うと爲るのは、全く我が本心の衆に知らする。隨つて漏泄の虞がある。との心掛り唯一つので。若し夫れ衆心一に歸して、堅きこゝ磐石の如く、密な

ること煉鐵の如しと有らば、何ぞ其の衆多を懼れむ、多々益辨ずで。其の五百三十人を、千人にも二千人にも爲たいのである。唯其れが彼の衆多を貪ると、可惜砂金に泥砂が交雜る。但し此が淘汰は今日明日に有るべき城内の大寄合。其席で剛愎忠否の選別は大概は成る。先づ其れ迄は。と、彼は其の心底を空知らぬ馬の耳の念佛に匿して。九郎兵衛をば好い程に遇つて。華嶽寺と天野屋には其の思立の幾分を明して。彼の壯士等が擧動の一々を注意させ。其の臨機の策をも諜合せたが。此の計畫は果して中るか、但しは什麼有るか!!

「南無や八幡。彼等が義心を鐵石と有らしめ給へ！故殿の尊靈猶ほ此土に在まさば、我等が身上を守らせ給へ!!」

彼の九寸五分を睨み詰めては其の鮮々しき血に憤涙を濺ぐのは、其が最期の御無念もであるが、一つは此の本望の成就べき樣を其の冥の訶護に乞ふのであつた。

「父上、寄合は果てまして一同は華嶽寺へ引取りました。」

「然樣か。むゝ、此からじや。其方猶ほ寺へ忍むで集まる人數の模樣を見い。——勇むか。黙くか。其の勇怯の人の姓名をも篇に認めて……。」

主税は意得て再た出て行つたが、其の夜半の頃、茫々焉として的處なき雲を攫むが氣色で、首さへも憮然と戻つたのである。

「父樣、人數は十分が一。果然て追腹で、——皆泣きました。」

「泣いたか！」　と父が眼は晃曜いた。

「滂泣まいて、いざと云ふ際、首座樣が出られて、復讐との義を言はしやれて……。」

「む。言うて與られたか？！では思ふた壺じやッたな。」

和尙が那の口で那の如くに說いたら、實に有理とて、大抵は然樣とも決着らう。否既に最う幾んと決着たのであるが、扨て其の決着た後を什麼爲るか。那の例の焦噪で明日にもと云ふ。其處へ彼の利兵衛が出掛けて、諸事は我等へと恁う擔任る。然すれば其の下向の時機、討入の都合萬端、此方内々で指揮をして脱落無きやう本意を遂げさする。其れは恐らく案の内だが、其の利兵衛が好時機へ出て呉れたか知らん。

「主税、大義でも今一度利兵衛が樣子を喃う。」

「いや御父樣、那の衆は今腹切る時、泣きました。」　と不承知な顏。

「其れを聞くでは無い、其方は唯だ利兵衛が樣子を見て參れ。——殊には、戰場でも、切

腹でも、涙泣で爲た覺悟で無うては眞實の覺悟で無い。――心得て居れ。」

（二十六）

名聞でも無く、利養でも無く、今日の彼れ大石が意衷と云ふは、唯だ我主たる内匠殿の最期の御無念と云ふのが晴れば足る。然も其の晴し人は、自たると他たると、身分の高下、年齢の老幼、昵近外様、其樣な事には頓着は無い。即ち自身内藏助でも、原吉田奥野等でも、乃至平日は獅子心中の蟲として禁元の虱程に爪彈きする大野九郎兵衛父子ですらが、差支は無いのである。一日でも淺野家の飯を食つて、其御恩の下に身を置いた赤穗浪人と云ふのであれば、其で好い！と、此が彼の打割つた心底。嫉妬を離れ、偏執を脱れ、妄想を去つた大悟の臍と云ふのであるが。情けなや人間の一肚皮裏と、母親の巾着の底には什麼な秘密が包藏されて居るかと猜疑るゝが世間の習例。其の習例の窩底に現下陷て居るのが原惣右衛門で。彼は利兵衛の「大將は大石殿！」と突出した肩頭を見るなり氣色を變へた。

「甚麼を云ふ。那の腰拔を！」

「えゝ？腰拔と？」

出端を彈かれて喫驚いた利兵衛の鼻頭を、原は浸々と視て居たが、

「お主。同腹な？」

乘！掛られて又た魂消た。成る程今云つた「大將」は固より自分の「然樣有りたい」所好を發露したに止まるが。又一方には其人の指揮を受ぬとも言れぬので、利兵衛は言ひ澁る。

「や、同腹じや！お主、内藏助と腹を合して、彼奴を我黨の大將にして、讐討を引延さして、御家の再興た後又た家老に爲る。其際に、原吉田輩、唯だ一分の存意に逸つて御不爲の義ども致さうと計畫まいたを我等手段を以て取支へて――等、宜らう樣の義を言はうと爲る、汝、其手先に廻つたじやな。然も無くて那の大腰拔の蹈侫利口を大將じや抔！――狗が增しじやわ！」　と睨まへ着る。

「もし、好加減にじや。手先とは何たる言？俺は御身樣方御爲好え樣にと思うて言ひました。――又た御身樣甚麼と云はしやれても此の大將には彼方樣に限る。と俺は思ひます！」

此方も中〳〵負て居ぬのを、其を又た、

「甚麼が好え？何處が限る？」　と彼方は猶ほ捻返す。

「好えから好じや。何處が限ると云はるれば其の限るちふ處をも、俺言うて進せやう。」

彼は煙管を屹と執る。

窮困たのは忠左衛門。まア〳〵と利兵衛を抑留ると、惣右衛門は又た息張り出して、

「ふゝ言うて見い！　彼の大腰拔！　大臆病の、狼奴！狗にも劣る奴!!」

「いやこりや貴公……。」　と吉田は又もや原を調和める。彼は抑も、依賴に來たのか、喧嘩に來たのか、仲裁に來たのか分判ぬで狼狽して居ると、

次間で瓦落利！「わッ」と叫ぶ聲。此は其處に來た少婢が跳への銚子盃を慌てゝ落して、猶遽えて人を喚ぶので、

「早や來て呉れさしやれよう！御若衆様腹切るだよう！」

「御若衆とは？」　と利兵衛も周章て出て見ると、個は什麼、其は主税である。彼は今恁うよと云ふのを彼の婢女に見附られて、取繋られて、持餘して居る、其處なのだ。

「何、何う爲されて若旦那？」

と利兵衛は突然に其刀を執り上げる。吉田も原も此の騒動に各其處へ、

「主税。こりや何う御爲れたじや。」

何う爲たでも無い、彼は彼の華嶽寺を訊ねても利兵衛が不在ので、其脚で卽ぐ這麼へと來

た。來て座敷へ入らうと爲ると、彼等が今の爭論で。其の爭論の根源はと云へば豈圖らむや我父である。――父の身上とて尋常の批判であらば又た聽耳を奔らしも叶らうが、此は什麼か。大腰拔の、大臆病の、狼奴の、狗にも劣る！と。如何な如來の忍辱とて此の惡口を聞棄にはで、躍り込むで、名乘り懸て、一太刀！と云ふのであるが。口惜しや其の敵手と云ふは、父が後來の片腕とも賴まるべき原惣右衛門。我が私の怨恨には擊つべからず。擊じと爲れと又た此の怨恨は、子として此儘に黙過すべからず。擊れぬ、黙過されぬ！是に於てか其の意恨の血を我が熱腸より屠り出す、切羽詰つた人知れぬ苦痛の切無き切腹！

「ちやから各位、抑留られいで喃う。」　と、他聽を憚かる上から此の意味の十分が一も。

其の頭尾のみ主税は語つて、更に滂泣出した。

（二十七）

忠左衛門は艱くして主税が短刀の手を抑止める。利兵衛は其邊に徘徊はる此家の少婢等を逐拂ふ。なれとも主税は尙だ血眼の、短刀の柄をば弛めで、片手には其肌を寛ろげ掛て、泣ながら傍邊を回顧つて、

「ちやから喃う我等の意趣立てゝ、切腹を見遁いて下され喃う。」

其眼中には素破との勢を見せて居るのを、熟々と視た惣右衛門は組み掛けた腕を稍解いて、

「待て、主税。――御身が心底は江戸以來我等も存知。――利發な、正直な、末頼母しいと存ずるものゝ。其の御身が彼の親父を然程に言ふは。――果然、内藏どの、――其の本心が有るのか喃！」

「見えませぬか？」　と主税は疾視だ。

「ナニ見えぬ？――甚麽が見よぞい。――地體がなあ、見ゆるも見えぬも那體ぢや。先夜も彼れ程に我等心底打披けて物申したが、蛙の面――ふゝともじや。彼れが見えぬとは甚麽を見るか喃？――飜つて看透たは、口實の讐討と、臆病の魂膽じや。」

此の惡口を傍で聽かされる利兵衛が耳は最う蠢々して、在るにも堪られぬ。言ひたい、言ひたい！彼の大石殿が肚底の一分でも可いから打破つて這奴に聽せたい。然したら此の吻に惡持つ勘左衛門で無い、烏侍の惣右衛門も、成る程と恐入つて、眞實歸服して、彼の御人の羽翼とも爲らう。とは思ふも其が猶且我等下郎の下司智慧かな。豫々言はれた如法の大事の壁に耳、口と云ふもの袖口にさへ意を注けよとある、此處の事かな。と堪へては見たものゝ、什麽も氣に關る。へし殺いてと我慢して見ても、癪の蟲めが勃起々々頭を擡

上げる。儘よ！些少の、ちよゝ、ちよゝ、端緒だけと、

「御見樣こそ蛙の面、俺等が見ると無面目じやな。はゝ見えさツしやらぬ？御智慧の眼は皆目じやな。」

はゝゝと冷笑て、彼奴等什麽するかと彼は見て居ると。や、怒つたの怒らぬのと、看る看る烈火、

「やッ智慧の眼じやッ?!」

惣右衛門が面は袞立の蟹！利兵衛は小氣味好く、

「昨夜の坊樣が蛸肴の法談のう、御見樣等は什麽聽かしやれた。」

「ナニ蛸じや?!」　と兩人は目と目を看合せた。其眼も蛸である。

「如何な坊主ぢやで那の樣な得手勝手が唔へますか。況て御菩提寺の御住持じや。彼言が眞實なりや發狂じやが……。」

什麽　發狂。既に這處に在る此の兩個すら、一時は彼僧を正氣で沒いと見た。

「はゝ、釣れて居やしやるじやが喃、御銘々は。――あの蛸に……。」

「呀？」　と兩人は覺えず乘出した。

「利兵衛、什麽して?!」　と膝立直す。

「何してじややら俺知りませぬが、本心で無い事爲ればそゝや狂言じやろ。狂言の演て見せられて甘々と其術に乘るは、こりや智慧の眼の有る衆の被爲る事かい喃。はゝ脚下に氣の着けなはれ。」

吃驚いた兩人は再た面を視た。

「忠左。こりや此儘には濟されんぞよ！」

「如何にも。」　と吉田も同意の爲體。

「察するに那の蛇か蠎か、こりや蜒蜿的の又た細工と見たぞ。――やヤ利共衛、汝其仔細言ふまいか！」

と、惣右衛門は三回血相變へた。

「俺に聞くより御自身が好え。不知ん云ふたりや利兵衛は不知ん！」

「やア汝、武士に！」　と言つたが、

「えゝい枝葉な！――忠左、好かな、内藏助へ……。」

惣右衛門は突と起つて忠左衛門へ目を授した儘、物をも言はで戸外へ駈け出した。

（二十八）

城内の大石が私宅の玄關口がら、案内の猶豫も無しにつかくと駈け上つたる原惣右衛門は、

「内藏殿、宿にか！」　と嚔きざま、突如に奥の間へと踏込むで、

「内藏！　内藏!!」

魂消たのは家來の孫左衛門。抑も何奴か、這處の屋敷で己が旦那を内藏、内藏と呼棄とは、と先づ憤然として、御釋迦の手といふ一名がたくり丸の名刀の鯉口切て、飄乎と出掛る出會頭に出撞したのが、

「やアこりや惣右衛門樣？」

「出せ主人を！主人を出せ！内藏助をッ!!」

事有りけりと見て彼は匆速に、

「いや主人義は……。」

「隱すな。在る。在ると見て來た。出せ、出せ、内藏助！」

疊み掛られては下郎の悲さで、

「……居、居りまする。居りますが御用の筋は……。」

「筋は此じやわ！」

鐵拳は早くも飛で、彼の老藥舗に撲當つた。抑も此の鐵拳ちふは、由來久しく惣右衛門が手中に唸つてゐた的で。即ち、遠くは彼の江戸引拂ひ、近くは昨日の城内の大寄合から、華嶽寺の一埒、今朝の口論。第一に、書院を惜げなく逐拂つた大野九郎兵衛が素藥舗をと心掛けたが、無念や其の機會を不得仕舞。次に違盟の腰拔輩をと目懸けたが、是れは餘りに對手が多過ぎるので本意を達せず。其跡は彼の蛸入の海和尚であるが、此も喙尖で言ひ呟められて、煙に捲れた中に影を失した。其次こそは遁し難なき彼の天野屋が腦袋である、なれとも是れも、全體の妖魅の巨魁といふ内藏助なる者の正體が判明て見れば、恁る末派に干係らうも無益じやと、更に堪へた其の澁汁を浴びたるが此の孫左衛門。飛んだ茶釜に凹窪を附けられて、彼はぐわんとの聲さへも立てずに逃込むだ。

「これは惣右殿。如何召された喃。」

莞爾笏ひで一間から入り代つて出て來たのは例の内藏助。

「おゝ内藏、居召されて。惣右衛門一大事の義が有て御意得に來た！」

「ほう、何事じやな。大事とは？——故殿、蛸にでも爲らしやれたか喃。」

言うまい、内藏！好くも我等が諸事の行事の邪魔ぉ爲れた喃！」

と彼は詰寄る。眼は吊上つて居る、聲は顫へる、肉も戰慄いて居る。單一呼吸に腰の大刀も其鞘中から躍り出でむと、今唸聲を立てても在るやうである。

「邪魔かな？猶且邪魔と見え申すか喃。ヤレ扨て、此方は喃う、御身等が受くる故殿からの御叱責を、内々は救護うて進せたとも思うて居たものを……。」

と、緣端近く煙草盆を引寄せて、庭に飛交ふ蝶を見ながら彼の悠々と、高々と環を嘘くのである。

恁う迄に沈着了はれては有繋無下にも手を下し難ねる。毒氣を拔れて稍手持不沙汰となつた容の惣右衛門は、徒だ疾視めて居る。

「あ、昨日の事じやッた。」と大石は誰に語ると云ふでも無く、「あの蝶がのう、那花の小陰に來て羽を憩めたな。蝶本人はの、いかう安氣な好い場所じやと思うて居た氣じやが、豈料らんや其の片脇には蜘蛛めが何時か來て、と狙うて居る。捕らするも悠然じやと其蝶を逐うて遣つたりや、蝶め、午睡の邪魔すると獨呟いて居た。——親の心子不知とか喃う。

痴呆た蝶の！やはり芋蟲じやの。」　と駒下駄をぱたり。

「内藏！又た忠義立の壁訴訟は措け。蛸と云ふから憂えな有らう。何故に殉死の障碍召された。――那の入道まで語らうて！」

「其れが癪かの。遠慮は無い喃。然程死たくばお死にやるさ。此方强て止めは申さぬ。」

愛想氣も無く突刎られて、惣右衛門は又た甚麽やら我と我が立場に迷惑て來た。

（二十九）

腹も切れ、喉も突け、遠慮に及ばぬ、勝手次第。と突放されては原惣右衛門、些しく肚裏の目算が外れて。扨て自個は、何爲に遽てゝ此家へ來たものか、甚麽を捉へて此の口强馬を捻伏せる意であつたかが心許なくて、脚下も自然と異しく逡巡いで來た。

抑も此家へ飛込む際の彼が料見と謂ば、昨日以來の主人内藏助が姦謀の底を剝つて〳〵引剝つて、其の澄した彼が目も鼻も散々に叩き潰して、狼狽て逃げに懸る其の頸首を引捉へて捻附けて。さア如何ぢや、恐れ入つたか？恐入りました。一言の申し譯も有るまいが喃！ござりませぬ。無くば腹を切れ！二股武士の看牌、不忠不義の見懲めに！と思ふが儘に詰責むで。其から詔狀の擧句が、利兵衛に海和尙、内藏助と並べて、耳鼻でも削取つて、

追手の門から阿房拂！恁うにも爲て腹愈をと思つたものを。先方から蛸の、入道の、腹切るのを止て遣たの、然程死にたくば勝手に爲いのと。然う先を制して出られては此方鞠問の語が無くなる。無念だが、言へば益痴呆に爲れる。

利兵衛奴に「讐討の大將」と言はさせたな？と鞠した處で。其は彼めが意から出たので有らう、此方氣にも存せぬ事、と空嘯るれば其ッ限り。然らば何故蛸入めに殉死の邪魔を入れさせたか？其は我等が各位の追腹を無益の義と存じたから。其を强てと申さるゝなら押てとは抑止ぬ、右の腹切も喉突も御勝手次第と冷笑はるれば、先づ談判も終局。蒐る瀬とても追ふ端緒も無い。究竟は此方が血迷うた武士に有るまじき狼狽者の笑柄に墮されて、石川五右衛門は盜坊でござる、被奪る奴は寇坊でござるの下世話を事實にする。――此は近ごろ逸つたか喃？。

焰硝のぱゝッと火の點く頭腦から一時に逆上て、眞一文字に泥田に馬を騎り入れたものゝ、進退些しく窮まつて見ると固より思慮ある惣右衛門。此は一先づ出直しの事と敏くも氣が着いた。殊には喧嘩も刃傷も原來が機會物、半白の頭顱に湯氣が冷めて、胸毛の邊に手を中る樣に爲つては、今更ら甚麽とも馬鹿々々しくて、眞面目に取り懸れたものでも無いか

ら、

「むゝ内藏殿。聞がせ申した。又た後刻！」

後目に睨むで歸らうと爲る。

「ふゝ御歸りやるかい。饗應も無かつた。――ちやが風情じやで、一服せう。御待れさ。」

と内藏助は起上がる。敵に言を懸けられては此際逃げられた理のもので無い剛情の原、

「風情とあるなりや賜はらう。」

「敵の家でも口をば濡いて歸るものじやと喃。はゝ、まあ緩りと召され。御分も最う世に用の無い軀じや。」

「如何にも！」　と未だ角張て居る。

旋て打伴れて小書院へ入ると、其處は茶掛つた六疊で、突上窓の下の簀子が水屋に爲つて、芝風呂の竈の淨阿彌釜から可愛らしいリゝリーンといふ松虫の音だけは立てゝ居る。内藏助固より茶人では無い、寧ろ無茶人の方であるから、自我一流の諸事略式で、旅簞笥から粗末な茶器を其處へ排べて、兀座融然、手前に掛る。

其れでも茶は茶。彼の釜の沸音から、幽しい香の句を芽と聞くと、南風ならざるも亦た人

の慍を解くに足るので、今まで血眼の惣右衛門が額の青筋も大きに鎭靜つて、逆上も頗ぶる下つて、容體太だ温和となる。

看ると、床には白桃の花。此の白桃の花といふのが、梅ほどの雅は無いが、又た櫻ほどの俗でも無くて、何處にか鄙びだ、天眞爛漫の、衒らぬ風情の如何にも可愛ゆい趣味がある。

彼は覺えず微笑をもて之れを迎へた。

「あゝ好い形狀じや。」

其の正面には「殺人刀、活人劍。」是れは一休の一行物で、如何にも見事な出來。其の下方には、と猶ほ目を遣ると。其は白木の小四方の上に、無紋の白羽二重の袋に納めた短刀樣の物！

「はてな？」　と惣右衛門は瞳を凝らした。

主人はと見ると、此は今湯通しを濟して、徐かに茶筌を調べて居る。

（三十）

白桃の花に、殺人刀活人劍。下方なる小四方には白羽二重の袋に納めた短刀樣の物！甚麽やらむ取合せの意味有り氣であるに惣右衛門は不審の眉を顰せたので、

「内藏殿、那物は何品？」

内藏助は何とも應へず、無念無想で彼の茶筌を調べて居る。

「見せて御呉りやれい。」

起ち掛ける氣勢に調子を外されたか、大石は風と回顧つて、

「何事じやな、惣右」

「いや那の小四方の品、見せて下され。」

「否、彼品は。」　と面を皺めた。

「何品御ざる？」

「御所望なりや覽せも進せうが。其れは此茶で御口の垢を嗽がれてからの事。」　と又も

や徐に手前に取り掛る。

さあ解明ぬが、何品で有らう？口の垢を淨めてと云ふからには孰れ寶物、或は故殿の短刀かとも思ふが、其にしては此の大腰拔の内藏助が恁う太切に、恁う飾立てゝ置く現由も無し。扨て何品だらう。と惣右衛門は茶の手前より只管其物に氣を奪れて、凝視てゐる。

其中に彼は不圖恁う念ひ浮めたので。――若し夫れ此刀が短刀と決らば、這麽不義の奴輩

が家に安置まゐらするは第一が御品の汚濁、故殿尊靈も然こそは御無念に思すであらう。

否應言はさず此は分捕つて華嶽寺への御供。一同にも熟と拜禮を爲せたる後に、殉死であらば此の御品の前、卽ち君前にて追腹を爲る心地。復讐ならば又た此刀を守護して、大將にして寃家の首を此刀にて砍る。むゝ然樣？如何にも其れ、其事である！と氣の速き彼は又もや、冷えた頭腦に湯氣を沸して、痿した拳頭を握り掛ると。

「はゝ出來た。不束ながら先づ一服。」

と、主人の腰拔奴は茶碗を其れに、菓子は蒸羊羹を半掉ほど。

其樣な菓子には目も與れぬ惣右衛門は茶碗を取るなり一息にかぶりと喫むで、

「口は嗽げた。彼の御品、一見所望！」

「ほう？」　と呆れて其の爲體を眺めて居た樣な内藏助「然らば。」と起て、彼の小四方ぐるみ面前に直すを、

待兼ねた此方は把る手も遲やと、紐くるくゝと引解いて、看ると、其刀である。果然故殿内匠殿が彼の際の九寸五分！はゝと覺えず押戴いたが今更の遺恨！其の遺恨は餘とも無い、最期の鮮血を歷々と刃に遺存されて、田村が邸なる其の當時の御無念の形相を目に睹

る樣な!!

彼はわッと號哭して、彼の短刀を額に中てた儘、身を戰慄して前後不覺！

「ふう？御分は御泣きやるか。——甚麽で泣く？」

「何、な何でも好い。——內藏助、此刀、所、所望じや！」

「協んなあ。——折角の所望とお言やるも、此刀のみは……。」

「ぢや有らうけど、御身が所には用無い品じや。代料欲くば何程でもじやで。是非！」

と未だ手は顫へて居る。

「と云ふ御身が、其人ならばじやて。」

と內藏助は冷しく笑つた。

「其人で無うても構はん。唯だ我等所望じやから……。」

「所望でも此御品は所持主に因る。」

「貴公が、なりや其の所持主かい？」

と彼は猝に目に廉立てゝ、

「貴樣は町人——商人と先度も言ふた。商人が此品所持て甚麽に爲る？」

「然云ふ御分が、又た此刀所持て何う召される喃？」

「何うにでも好い。武士の腹が素町人如きに會得らうかい！汝錢與れたりや其で賣れ！」

と早や喧嘩腰なる其面を熟々と視た內藏助は、又た沁々との歎息で、

「惣右。熟う氣の落着けて呉れ。——眞實其の御品、欲くばお與せう。——ぢやが、實に、欲いとならば、此方讓らるゝ樣にして讓らしてはお呉れぬか。——御分も既や六十、何時迄も其の壯氣で協るか。緊と其の分別の底を括うて、右ならば右、左なりや左、一方に根城を決定て拠て其の合戰の旗色を立つる。——其からならば此の御品も讓らうが、其れ無うては又た何事が出來うぞ。——見い、昨日からの狼狽方！籠城と云ふ、然樣かと思へば又た殉死、殉死の肌も寬げぬ間に又た風が變つて、仇討とな？其の仇討も奏て固めた評議で無うてか天野屋輩が合力を藉る。其れすらも亦た我意に募つて口論な！口論の終局は大抵其の合力も能るまいで、沙汰止の、今回は何事をか爲れるか喃？——え？惣右。」

（三十一）

剛情の角も我慢の牙も道理の前には立つ機が無いので、惣右衛門が喧嘩腰も敢なや中途に挫折れて、手に持つた九寸五分を又た元の鞘へ、我にもあらず墨々と肩頭からの太息のみ

を吐くのである。

内藏助が膝は益々進むで、

「や、惣右。此から什麼お爲る？」

彼は無言で、伏目なる額上からは浸々との膏油汗。其の胸裏では返答をと懊悶する。

「又た殉死か喃？」

「むゝ。」

「仇討か喃？」

「むゝ！」

塞ぐのを面白半分、戲謔うかの如くに見えた彼の語調は又た急に沈むで、以前にも倍した

る太と嚴格に、

「殉死も可え、仇討も惡いとは言はぬが、可惜い事には御身等がのは右に云ふ、唯だ血氣

じや喃。早く言はゞ血迷うた胸の狂ひで、今一段云はゞ浮氣同士の騷擾じや。——浮氣の

騷擾！こりや事柄こそ違へ彼の愚夫愚婦が痴情に逼つて溝瀆に縊るゝ者と同一いで、折角

の心入もの、一つ差違うと狼狽者との世間の物笑に爲りますじや。——可惜ら事！——否

や御身等が爲のみの可惜ら事で爲い、故殿が御外聞、淺野家の御面皮、或は不義不忠に陷

ていうも知れぬ。——例はゞ兒女がじや、藥劑と思うて毒藥を病む親に勸むる。其志は孝

にもおざれ、其事の成績からは親殺しの罪人じやで。孝子は醫を知らざる可らず、忠臣も

亦た忠義の的を看違へぬ樣に爲にやならぬ。な。一つ的矢を射るにさへ、好う心を落着け

て進退せねば、思ふ矢壺は獲られぬじや。況て是れは死生の大事、非常の變！一發して過

錯たば二の矢は繼がれぬを、其を濫りに逸つて、籠城の、連判の、殉死の、復讐のと騷擾

きやる……。」

こゝに到つて內藏助の膝頭は愈逼つて、其聲音は愈低つて、胸閣を破つて出るかと見

る呼吸は他の肺腑を排して句又句と、宛も捻入る樣である。

「……特に、其の復讐など云ふ事が、稠人廣座の、其の寄合など謂ふ席で、多勢の面前で

觸れ散かいて協るものか。小鳥一羽を狙擊うにさへ息を凝いて、歩を竊むで、射も擊ちも

お爲るで無い歟。——況てあの寃家！物賣でも爲るやうに其の大聲立てゝ！其麼たる所作

？——御身一人が討ち損ぬれば御身一人の落度で無うて右の淺野家總體の落度。別しては

自餘の或る覺悟を爲た者などは其の爲にいかう、難義して、弛べた用意も引締らるれば今云

ふ再回の、二の矢も繼がれぬと御知りやれぬかい！原惣右とも有る武士が餘りなる粗忽！其樣なる不心得の人に、抑も此の内藏が大切の御脇指、渡された義理とおざるかい!!」

彼は此時、言ふ聲さへをも漫ろ曇らして、思ひ迫つた無念の涙をはら〳〵と、突掛ける膝上の拳に濺ぐのであつた。

其の涙雫を眼も放さず看戍つて居た惣右衛門も、自個もほろ〳〵との落涙で、眞實詐僞り有るまじき肚底から、

「あゝ！惣右衛門、惡かッた！」

「眞實惡いと了悟られて、此からは身を厭ひ、恥を裏み、垢を舐り、膿を啜つて、名聞を棄て、短慮を愼み、一心故殿の其の御無念を！と心懸らるゝ證據が立たば、所望の此の御品。快よく進上せうが。如何じやな料見は？」

猶ほゝ、しい口に、疊の表と九寸五分とを看較べて居た彼は、腕を解いて、

「如何にも！」　と首頷いた。

「貴所も原氏じや。流石に双刀の手前もあらう。又た心底も右じやから、内藏、改めて進じ申すが。吳々も今の異見を喃。」

「ちやが、貴公のは？」

惣右衛門は今の曩から、大腰拔の、大腦病の、武士の風上にも置けぬと豫ては罵つた大侍の大石にも、又た一種の測度るべからざる氣骨も有り、精魂も有ることを發見し得た。恁くては無下に此の御品といふ彼が大事の守護本尊を分捕るもと、

「……故殿は、此刀を貴公へと被仰れたが？」

「遠慮に及ばぬ、我等が所持の御遺品は別に有る。」

「や、別に？」

「ふゝ、御見やれ。此處にじやよ！」

莞爾と笑つた内藏助は襟押し寛げ、肌を見すを。甚麽爲るかと見れば。卽て其の胸骨の上を磐乎と拍つた。

「や、内藏助、御心底承はッて。」「一同感じ入りまいた。」と潜めきながら入り來る者。—

—其れは吉田に奥野、河村、小山に進藤。天野屋も其後に跟いて、殿は子息の主税であつた。

（三十二）

奥野河村は手を疊に衝く。吉田と進藤は面目もなき頭を抓く。かゝる時はに叔父の役目と小山源左衛門は先づ口を啓いて、

「内藏助、扨て謝罪り入つた。實を申せばのう我等一同……。」と其手を採むで、「貴所をば芥か木埃の樣に申しをッたも然らばと云へば、又其の突留めた料見とては誰も持たぬじや。今惣右を叱責られた、血迷ひの穿議、騒擾の沙汰と言はれるも念へば一々思ひ當る。如何にも此の連判、逸まつたか喃。」

今更ら後悔の眉根を顰せて、彼は懐中から彼の神文の狀を擄ぐり出して、

「内藏殿や、で此の始末じやの。何爲たりや可えか。貴所に委任すが喃。」

叔父が浮氣の尻拭ひを甥が所へ持て來る、餘程世間とは異つてゐる、と大石も好笑しかつたが、此の場合微笑だも見せる時節で無い。彼は其の苦澁つた眼で右を一通り看亘した後、稍多時くは小首を傾けて、

「我等とて如何爲申さう。時れは矢張り御前樣方の御手で喃う……。」

「いや其義がじやで……。」　と奥野は術無げなる額上に手を中てた、

「恥を言はねば理がでおざるが、實、唯だ、最初は人數をのみと、其れで玉石混淆じや。

昨夜に至つて稍其の淘汰が出來て、御覽の通り殘つたが五十三人。先づ十分が一。然るに又た其れがじやで……。」　と交れよがしに河村を顧ると、傳兵衛も歎息をつくく、

「面目も無いが又た其の人數がのう、此の夜明から三人五人と落ちまする。汝れやれとは存じても抑止もならず。で唯今寺を引拂うて惣右忠左とも談合を爲うと參る途中で、忠左と利兵衛、御子息にも出會して其で推參と申すでござるが喃。貴所が過刻の御教訓承はると、や、も唯だ天眼通じや。實以て我等は盲目。あゝ此體で籠城など申さで宜つた。倘し然もでざらば半日との防禦も協らいで我等は縛り首！右に申された殿樣の御外聞、淺野家の恥辱、世間の物笑と今も御次で申したが……。」

と、聞けば聞く程、内藏助も唯呆れたのである。如何に世は末世に及ぶと雖も其れでは日月も全然闇黒！固より闇黒と爲つた此の御家の騒動の中にも、確に一道の光明と云ふのは此の神文の連中にありと看認たものを。噫乎其れでは。と、

「むう！」　とばかりに手を拱く。進藤は其傍から、

「其れで今叔父での申さるゝ此狀が始末じや。或る衆は此の血判の破つて返さうと云ふ。又た一方には暫時此儘で、猶其の成行を見てと云ふ。論議が兩途、一同も決着の腹の迷う

て居まするが。唯だ幸ひなは貴所。殿様御遺品を其の胸骨に刻んでござると云ふ決心の貴所。從前の惣右輩が粗忽、狼藉、不屈の段な幾重にも我等より御謝び申すが。如何でござらう以後我黨の大將に御爲り下されて、此の御脇指の鮮血を雪める、其は申す迄も無い。當面いたる處此の人數の纒め方をな。卽ち神文の始末をな。——と申さば又た一心じや。多勢は要らぬ。自分一個。と言はるゝかは存ぜぬけど、其れは我々が素志で無い。冀くは一心同體、同じ御家の御扶持受けたる或る意趣の者は、同じ刃の下に死ぬ。然有りたいでな、其れで御分を大將にと是非賴む。異議なく領承けて、胸襟の打披けてお呉りやれたい。」

辯者の進藤源四郎、此時は一心一向、爰處ぞと說き立てゝ、

「惣右、改めて過刻からの狼藉、無禮、要るまじき御品の御無心など。大將に謝び申されい。」

聞くに喫驚く惣右衞門は、彌我も偏志も折れて、

「內藏殿、謝罪つた。」

「惣右も忘狀じや。內藏、此上はのう方々の依囑を許容られて。」　と叔父の小山も語を

添へる。

「內藏殿、什麼じやな？言ふ迄も無い殿様御爲なで！」　と進藤、河村、吉田も共に泣くばかりの顏。

「先づ御待ちやれい。內藏助、緊と思案いたして……。」

座を正し、息を欲めて、瞑目、沈思。彼は此座を禪定の牀に爲た。——恁る心配のありとも知らぬ、傍に娛しゝリゝーンの音を立てゝ居るのは、彼の霰の釜。

（三十三）

大石の恁う考慮たは、敢て此座に在る人々の心事如何を疑うでも無い。又た固より此の泣く計りと云ふ人の困阨を窮追して、其の苦惱を見て娛むでも無い。況んや惣右衞門が亂暴に對する而當、散々に謝罪せて置いて然らばと云ふ勿體振る、執拗るの、意地惡のと云ふ、其樣な怪痴な料見は微塵毛頭無いのである。

唯だ喫驚いたは、國家士を養ふ百年にして、此の大變に臨むで節に死すると云ふ者の幾んと絕無ので、其れが一つと。今一つは、我が大事を擧むとするに、其の後繼の目的が無い。此の二箇條で。此が喫驚くと云ふよりは慨歎はしい、寧ろ失望落膽の極と謂ふべきで！

解剖て云へば、我が復讐を我れ一個と決めたは、是れは自己が一分の覺悟であつて。固より其事の必成を期すると云ふ萬全の策とはあらぬ。唯だ我は恁くして我が臣たるの道を盡して已矣といふに止まる迄の事。其れは內藏助として巨煩と鳥銃との効力の差を知らぬ程の痴呆では無い。五指の交る〳〵彈かんよりは一拳に若かず位ゐは千も承知である。殊には盡して已矣！其の徒爾盡して已矣よりは、我が懷ふ本意を遂げて。我が目指した其或る首を亡君の墓前に手向けて。扨て腹を屠るなり、刑に就くなり。是れは初より其の冀望ふ處であるが。唯だ其の手段と云ふが彼の違判の人々とに差違ふ。差違ふからして其の黨侶には入らぬが。其の人々として忠は同一じ忠、義士として批難の點なき純然たる義士であるから。其れで寺の和尙を語つても、用達の利兵衛に吩附けて迄も、何卒して彼等にも本意を遂げさせたい。無益な今の死を廢めさせたいと。大野九郎兵衛も道具に使つた、蛸者も鉢に盛らせた、家來の撲られたにも胸を摩つて、座敷の飾附も精々した。自身で茶も點てた、花も挿けた。其實命よりも大切な物として居る主君が遺物の短刀までも、所望とあれば讓らうと爲た。

其れも甚麼である？復讐の義士を一人も多勢して、我討るれば彼、彼爲損となば某。甲より乙、乙よりして丙、丙からして丁戊己庚辛。二番手も三番手も、四の見も五の見も、入換り立換り、生變り死變りして所謂る七生までも附狙つたならば、上野を討たねば左兵衛、左兵衛を討たねば其子、其孫、彼の九世の讐を酬ふると云ふ迄にせば何時かは彼の短刀の御無念の鮮血も雪げう、否な、恁しても是非に其を淨めねば措かぬと云ふが彼の決心。卽ち陰に陽に彼等を救護うたも結句我が同志の爲に盡したので有る。其の熱するが如き復讐の精神からのである。

然るに其が什麼であらう、全然鴨の嘴。畫に描いた餅。書入にして居た借金の、節季間際に謝絕を吃つた程にも的が外れた。彼の失望、落膽、自分一個の豫ての覺悟が、事實に於ける自分一個と全然爲つて、夢の樣な冀望は影の如くに消失て了つた。

是れは彼の默考寢時を移した所以であつて、實際、目今は如何したら可いで有らうかが其の疑問。日來は智慮に聊か誇つた胸の囊も幾んで萎縮びて、彼は正直に云ふと、迷つたのである。

「で、各位が御見積りやる必死の士は、此中に何人ゐざるか唷う？」

今はなか〳〵見るも忌はしき神文ではあるが、猶ほ枕頭に殘る藥紙、死だ兒の年齡を算へ

る氣色で内藏助は訊ねると。

「然れば。先づ其の半額でもござらうかの。」　とふ、ろ〳〵に答へる河村の面と云つたら無い。

「半額？」　と彼は額を皺せて、「然て其の落ちた人々も、狐鼠々々とか。又は公然惡口でも爲て去んだか喃？」

「其れは種樣。我等が組み甲斐の無いと云ふたも、又た内々でも……。」

「ふう。兎角は手段じやな。」　と大石は空を仰いだ。

「其の手段がござらぬで喃う。」　と一同は口を揃へると。

「ま、可いは。委細は明日の事。此の連判は拙者暫らく預り申す。今日は無愛想じやが先づ此れで——。いや利兵衛、其方は次室に。——主税、それ、御送り申せ……。」

（三十四）

内藏助は其日の夕方、利兵衛一人を召伴れて大野九郎兵衛が家へ出向いた。

來て見ると、屋敷はどたばた、盆と正月とが一所に來て、火事と地震に一度に見舞れたかの爲體。荷物は括られる、雜具は縛られる、繩よ蔦よと犇めく男女が騷ぎ立てる脚下から、

渦を卷て舞て出る塵埃の中に主人の九郎兵衛は火事裝束して、那れよ是れよと指圖をする、

「ソレ其方の棚荷は好えかな。手近の物と手遠の物とは別々に詰るじやぞ。——ア、それ其樣な手暴な事して！中の瀬戸物が溜らぬわ。此からは茶碗一個も身の膏油じや。——濡物じやらう其方のは？——コレ繩を然う粗末にすな、小判の鈌片じやは、蔦半枚も……。」

「ほゝう九郎右殿、大分の御手廻しじやな。」　と内藏助は風に煽られて頭へ舞ひ掛る芥塵を避け〳〵、感心さうに眺めて居るのを。不圖振顧つた彼。眼鏡越の苦笑ひで、

「いや内藏殿か。此れ體じや。悴は在らず、家内は多勢。日來は大飯のみ吃うて居るもいざ鎌倉と爲るとから、厄代じや。それで老人自身の采幣。察してお呉りやれさ。」　と早や愚痴で、「おう利兵衛、貴公は黒人。些と指圖を輔む。」

「ま、其等は此者に御委せが好い。手船も來て居るで。」

「三艘ほど港口に繫けて置きやすする。憚りながら此方樣御荷物位ねは半日の間で。手子共に仰せ付られませい、其方が損じも無うてな。」　と輕く會釋して利兵衛は受込む。

「や然樣かい。其ならばやれ〳〵安堵。——運賃もじやろのう、格別に廉價いて……？」

「其邊は、はゝ。」　と笑つて、「從來の御恩報しに……。」

「ぢや無賃のかい。や其れは〳〵。あ、見上げたもの。これ内藏殿や、世が世ならばのう殿へ吹擧で士分にも取り立てうもの。あゝ辱けない。」　と遽に其邊をきよろ〳〵と、汗を拭き〳〵、

「取り散しては居るが茶なと進せう。利兵衛、恁うおざれ。――あ、誰か、一寸と其の座敷をの……。」

婢子共に命つけて小座敷を掃かせる。彼等は箒で掃くのであるが、主人のは其れが槌のである。

「先づ〳〵。」　と九郎兵衛は先へ入つて、「扨て内藏殿、御用かな？」

大石が此家へ來たのは彼の庫金の分配である。其の分配と云ふに就ては彼の苦心の在る所で有るが、其は且づ此に用無き事として。彼の意は士分足輕、身分の高下と、祿の多少に據らずして、平等に、一列に、其を分配樣と云ふのが趣意。其の理由としては、高祿の士は、自然ら從前の貯蓄もあれば、財産も有る。憫れむべき彼の薄給の者は、平日より其の取前にて足らず、或は内職し、中には借財もして其日の口を渇々に餬すと云ふ。恁れば今日俸祿に離れんか、明日よりは即ぐ飢渇に迫る。是れ太だ不憫の事で、次第に依ては當家

後來の外聞にも關はる理のもの。仍て責ては平等に。と事ふのであるが。此は九郎兵衛大不服で、「高割」といふのを彼は主張した。其の理屈も種々あるが、究竟は彼は六百石の……大石の千五百石を初筆とすれば其の第二の席を占むる者。此を其の高割と爲れば寡なからぬ金銀を得らるゝのであるが、頭割の平等と爲れては胸の算用が瓦落利と差違ふ。不服とは其故。理屈とは其の表皮を假粧うた手前勝手の駈引である。

「如何も困却るな。肝腎の御分と然う意見が合んでは。」　と内藏助は思ひに餘した額を押へると。猛然たる九郎兵衛が眼は親の敵でも睨るかの樣に彼の眼鏡から光を放つて、

「でも無理のみ御言やるからじや。物の積算にも爲て御見やれさ、此の配分金が我等六百石の身代金じや。殿の不憂は今更ら云ふも詮ぶざらぬがの。其の不憂な殿の家來の先途をのみ氣支うて無益な御家の外聞など、こりや下世話の入佛事、馬鹿な穿議じや。御自分に爲てからが其の身代の額を減らして、此後の世過を何う召さる。我等がのは我等が勝手ばかりじや無うて御自分等が御爲も一つは有る。――御子息方の前途を些少は考案へて御覽じろ。」

「御談判の中ではでざりまするが。」　と見難ねた利兵衛は恐る〳〵に、「御道理樣におざり

まするが、然樣物事は現金にも、喃。」

「やあ黙れ〳〵！貴樣が何を知る。其方は彼方で荷物の手傳でも爲ろ！」　と劍もほろゝ！

（三十五）

九郎兵衛が急に不愛想になつたのは、此の分配金の額からで。卽ち其額たるや、中々船賃や手傳賃ぐらゐの値では無いから、其れで今迄奔走して居た利兵衛にも劍鑿を吃はせた理由。利兵衛は利兵衛で、如何に人間と云ふものが利慾といふ血の塊で出來て居る物に爲てからが、仁義の皮を被つた以上は然樣現金に爲て呉れなくても宜ささうな物。況て不喰と高楊枝の荷にも廉恥を表德とする御侍。町人の我々ですらが此の家中の難義を氣の毒に思ふからして、手船手水夫で引拂の荷物の世話もと故々出掛けて來た程の事。然樣先方が我慾に出れば。此方もと例の俠氣の勃々として、

「無躾ながら薄情でではすなあ。然う貴下が薄情だと俺だても其氣に爲りまさあ。御荷物の積込などは御免を蒙むると致しやせう。」

九郎兵衛は目に廉立てた、

「何が薄情と申すのだ。」

「薄情でさ。他は如何でも御自分さへ好ければと被仰るのは不人情でさ、我人に辛ければ人又た我に辛しと云ふから、俺も外樣の御用は勤めても此方樣だけは御謝絶を申しやせう。」　と彼の勃氣に云ふ。

「不領解ぬ奴じやな。高割と申すが何故然う惡い。高割が惡いなりや原來の祿に高下の有るからして惡い理由。內藏殿の千五百石、此方の六百石、又た末々の徒士足輕の、五石三石、七兩五兩の金給に至るまで其の差別のあるは、皆是れ其の先祖以來の勤勞と、當人の材能と、身分格式家柄等の甲乙に據るからじや。御家繁昌の日が然樣であるなりや、又た家中離散の今日も其の甲乙の格式を追うが至當で、御庫金の分配に高割と申すが、こりや何國の誰――假令釋迦孔子に問せても道理と有る筋じや。其方共に爲てからが店には番頭も有ろ、手代も有ろ、又た船頭水夫も有ろ。其の役々と受持に因て皆給分が違うて居らう。其の差別は武士とて町人とて、公儀とて大名とて、皆同然じや。」

「勿論でさす。」　と利兵衛は拳固で膝頭を摩つて、

「被仰るのは其うや見世店が繁昌の時。繁昌の日にや人間の材能と役前の閊と煩しいで給

分も差ひます。だが今は沒落の日だ。見世を閉つて店を明けて俺共なら借金方へ身代限を引渡す日だ。其日には五一三六、番頭も丁稚も有りや爲ません。一列だ。――況て其店を預かる番頭なぞは幾分か罪科がある。當家で云へば御前樣が御家老で、御子息が御金奉行さ。其の御金奉行の軍右衛樣は六千兩とかの。大金を握つて逐電なさる。御自分は御自分で其の以前方から那方を引攪亂して、濱方を苛め立てゝ、山運上や鹽運上で鹵い目を御領民に見せ附ける。そりや今回の一件にや關繫は無えと被仰るだらうが、運るは天の御祟禍で、東御門の蜂合戰も、豆腐井戸へ豆腐の浮いたも皆是百姓の怨恨の精魂が、蜂に變つたり、豆腐にも化けたり爲て此の騒動の前表を示せたのでござえすせ。だから見なせえ、濱方抔ぢや、御家の騒動を冷ら笑つて。御領主が換はる、此からは鹽濱も樂に爲らうと結句は悅喜むで、餅を搗いたり强飯を炊したりして祝賀て居りやすわ！誰だ其樣に百姓に愛想を盡かさせたは？俺に言はせると皆お前樣方の一類だ？可哀や殿樣は一人で其の禍袋を背負て、腹切らしやれたのだ！卽ち御身樣等が殿樣を撲殺したのだ。――殿樣仇敵たら御前樣抔が其の巨魁だ!!

人間の心情があつて、此の御家中の諸人難渋を些少でも氣毒との意があつたら此の御分配

金など、一文でも取うとは云へねえ義理だのに、未だ我慾の張つて輕輩い衆中を酷薄め附け爲しやる。眞に呆れて物も言へねえ！

其りよを內藏樣は內藏樣で。御家中で荷物の多い、御家內の多勢のは大野が家じや。利兵衛好う始末して進げい。手船に乘せて大阪迄も引取らせろ。老人の嘸ぞ迷惑して居られうと。其れは〳〵の心切で、俺を故々伴さしやれて見えました。然して御家中總體の、責ては難義の薄らぐ樣にと、御自分よりは他人の身上をと肝煎らしやれるのに、甚麼じや御身樣は！有り餘る盜竊錢持たしやれながら！」

と、彼は手を戟どころで無い、彼の交張の太煙管を右手に掴むで、素破とも云はゞ其の大禿の腦袋をと云ふ、俠奴の擬勢を見てあれば、六尺に近い巨漢子、靑髭に胸毛、所謂る鬼鹿毛に跨つた童駄天の皮羽織と云ふので、威風堂々！其に壓されて縮み上つた九郎兵衛は、肝玉も息根も嗚！

聽きねる內藏助は此時「えへん」と咳拂ひ、

「利兵衛、何じや。無禮千萬！然樣の失禮致させうとて伴れては來ぬに餘計な差出口。もう去ね〳〵！

いや九郎右、御意には懸けられなよ。彼は船頭の暴氣での。はゝはゝ恁樣の事も拙者へも折々は云ひます困つた奴じや。然し惡氣は無い者じやで。――こりや利兵衛、謝罪申さぬか。痴呆た奴じや！」

叱斥られて利兵衛は喞々、頭を下げたかと見る中に弗と出て行つた。

旋て門外で唾吐く音、「喝！ぷゥ！」

（三十六）

大石は其の翌日も一人乘籠めて、後來の處置に就いて其の思を凝らして居た。今日は奥野も來ず、進藤も來ず、昨日叱責た利兵衛も來ず、主税さへ何處へ出掛けたか宅に在らぬので。其日の午前を心靜に勘考に過ごして、午後も八つ半時。兎に角再同大野が方へ出向はうと、衣服を着換へ。孫左衛門を供に、玄關に立ち出る時。

「父上！」　と息急き走せ戻つて來た主税は大汗を拭き〳〵、

「港口へ御越でもでざりまする歟。」

と、何事かの事變でも起つたか、彼は太だ平ならぬ容體！

「甚麼じや、港口とは？」

「知らしやりませぬか、大野氏が喃……。」

「九郎衛が何と、如何致した。」

「いや唯今大變のでざります。御庫の金子を盜み出いて、此の午前、港口から出船と出掛られたを壯者の人々が見附けまいてな、船は抑へる、荷物は切解く、九郎衛は幾と撲殺されさうにもでざりまいたを艱う遁れて、今彼の山上の鎭守の社務所へ逃げまいた。」

「や、其は珍事。目下の際棄置かれぬ事。――兎に角馬を引け！」

內藏助は其の以來、三頭飼へる乘馬へは交る〳〵に鞍を置かせて、いざとの急變に備へて居る。然れば此時も、馬丁の牽立てゝ來るのへ飜然と、鞭鐙を合すが否な、中村川の堤を北へ、坂越を指して騎り附けた。

一方には、主税の注進に差はずして大野九郎兵衛、此の坂越の鎭守といふ大避の明神が社務所の奥の間に逃込むで、命辛らく戰慄て居る。其の周圍には、奥野進藤原等の老人さへ打交つて、早水藤左衛門、萱野三平、貝賀彌左衛門、就中札座奉行の岡島八十右衛門は襷鉢卷、所好る大刀の鞘に反を打たして、

「出召され九郎衛、那の二千兩の封金は御身がの貯蓄か、御庫の金か、出て言ひ解きやれ

！」

社務所の縁側に片足蹈み掛けて鳴り喚く。其の後に跟く十四五人の若侍も、「出ろ〳〵！出ねば屋搜するぞ！」と威赫して居る。

抑もの起因を聞くと、此の夜明方である。昨日からの風評の模樣で萬一と用心の眼を看張つて居た岡島八十右衛門は、本丸の奥なる金庫の見廻りにと出向て見ると、果せる哉天主下の石垣の陰を沿つて、狐鼠々々と逃ぐるが樣に行く三人の人影がある。素破と窃に其迹を跟くれば、彼等は其の北手なる犬走から塀を乘り越え、壕を涉つて、卽て入つたは二の丸の侍小路の大野が屋敷内。や、扨こそと玄關から踏込むと、個は什麼、家内は空虛で、繩綁げの荷物は居間から座敷に算を亂して、一間からは今年三才なる孫娘の此の物音に目を醒して泣出す聲。其樣な兒には頓着なしに八十右衛門は今の三人をと其邊を搜すと、彼等は臺所の隅に其の盜した金らしきを叺に入れて、今か背負ひ出す際。卽ぐ引捕へて見れば其者は大野が若黨仲間。汝等が主人はと問へば、昨夜の中に屋敷を出さしやれて港口へと云ふ。其の叺の中は何物と又た鞠せば。彼等は、御免されましてと逃げに蒐るを、踏仆して。さ、白狀さぬか！。あゝ、てれ骨が、骨が挫折ぐる、言ひます〳〵。然らば、と引起

して。さ、白狀せ！

是からが其の居圍りなる家中擧つての大騷動！九郎兵衛奴は昨日内藏殿と「高割」「平等割」の分配金の爭論をして、用達の利兵衛に散々呶鳴られて、其が可怖しさ、金が欲しさに、金庫の鍵の我が手許に有るを幸ひ、竊に攫むで逃亡せたのだ。其の金高は千五百兩！殘る五百兩を家來三人に言ひ含めて、後から金藏より持ち出させる、其の途中を岡島に取て占められた。然も其の逐電の場所は坂越の港。追蒐けよ！それ！と云ふので各々取る物も取り敢ずに駈け着くる。面白し、彼の老奴め、と其跡からも追ひ續く。奥野も原も此れに誘れて、寧ろ進むで船場を指して馳せ附けて見ると、今や出船の際！

恁くとも知らぬ大野九郎兵衛は、餘りに狼狽て、最愛といふ孫娘をさへ家に殘したが、今は其を伴れに歸るべき勇氣も無い。唯だ家來三人に云ひ附けた五百兩の金は如何か？其れさへ來れば直ぐ出帆。と待つ其の金も人も來ずに思ひも寄らぬ追手。阿呀と吃驚く時、叢〳〵と來た彼等は突如に船に乘り移つて、胴の間に積み重ねた梱荷を切り解く、明荷を撲ち搖ける。此れは狼藉、と支へる船子を蹴退け突斥けて、

「有たか。有たか？」

「見えた〳〵。ソレ此箱じや。」

甚麽さま千兩箱を一個と、五百兩包を一つ。登りの可怖しさに舳の方へ屈んで居た九郎兵衛も、今は堪らず、

「こりや其金持行かれては！」

と駈け出るのを見て。

「やア居た〳〵。老奴め在た！」

獲たりと拘出して滅茶々々毆打に撲り据て、海中へ抛下せよと犇めくのを。艇頭も見ても居られぬから必死と抑止る。此れに僅少の憂隙を得た九郎兵衛、陸地へ駈け上つて逃げ込むだのが彼の大避の明神の社務所。

名こそ大避ではあるが、恁う取り圍まれては助かる途もなく、地獄落しに遇つた黠鼠か、松葉燻しに爲れる老狸、命の瀬戸際、今やと云ふ時、間好くも駒り附て來て呉れたのが大石内藏助！

「聊爾召さるな。爲ては成らんぞ。皆御退きやれ〳〵。我等に委任した！」

（三十七）

明神の石壇に馬乘り棄てゝ、「委任しやれ〳〵。」と馳せ着けた内藏助は、

「こりや手强の沙汰など無用じやぞ。當今の場合。此程の江戸表よりの御書通でも見やれたらう、謹慎が專一じや。不都合あらば拙者が捌く。貴公等ゐ控やれ。」

此言を聞くなり岡島は吼つた、縁側に踏掛けた軀を大石が方へ捻向けて、

「内藏殿か。御身樣でもこりや協らん。勘定方にて札座奉行たる八十右衛門が初終を捌きます！」

「そりや又た何故じや？」　と大石は氣色を變へた。

「何故も彼故も無い、御身樣がは依怙をさツしやる。現に九郎衛が悴の軍右衛門、彼奴が三千兩の御金を盜むで逐電したを此れなる早水と萱野の兩人が申し出まいたも取上させらしぬ。結句は親の九郎衛めを其儘措しやれて御庫の鍵まで預け置れたから又た今日の騒動も起きる。此處にて又た御身に此の裁判任いたならば折角の老狸が繩を解いて、山の古巣へ追ひ逃すか、御金さへも滅茶々々で有ろ。然れば此處では委任しは叶らぬ。御家老じやとて！」

「ふン。では、も、家老の拙者が捌きも御聽きやらぬ——自儘と仰しやるで喃？」

「自儘とはおざらぬも、盜人奴を裁斷する……。」

「其の盜人を裁斷の役は誰から領けられた？」

「えい、其は殿樣から！我等は右の勘定方——札座でござる！」

と彼は拳で丁々と刀を拍つた。內藏助は急に氣色を和げて、

「微妙くも言はれた。然では故殿を未だ御存生中の樣に存じて、其の御生前の仰せ付られを御死後迄もと守らしやるじやな。感心じや。——其の感心につけて我等家老職は、原來誰樣から申し附られた？それ存知か唷。」

「えい！」　と彼は目を睜つた儘。

「それ、我等が役目も、其の御分が大事に掛らるゝ殿からじや。殿樣仰せを重く思はゞ決して自他の差別とて無い理由じや。——卽ち我等は家中の締括り。裁斷の役。——其の當役に事を委任して、自己は自己が役前太切に勤むるが臣たるの道、君の命を謹み守る御分等が本分とは有るまい歟。——什麼じや其れでも猶ほ自儘に、札座奉行が盜人の成敗を爲らるゝか唷。」

內心は如何か知らぬが表面には楯突くべき樣も無い此の理窟に出遇うて、八十右衞門も口

を噤めた。殊に其の言者は大石である。辯舌は爽快。昨日は庫金の平等割に自己等が行立を謀つて呉れたと云ふ其の當人。中には銘々が血判も預つて居て與れる其の內幕も薄々は知つて在る。其れや是れやの旁々で、此處は兎に角此の御家老樣たる分別者に一任せるが可いとの衆評一致で、銘々は手を退いた。

「然らば我等が預かるぞ。異論は無い唷。——就ては奧野、原氏を初め、一同の衆へ內藏助申し達する。明後朝五つ半時、家中殘らず總登城。御庫金の分配を致すと爲る。此義御苦勞じやが各位受持の小路を定めて、總中へ御觸れ下されたい。——又た九郎衞義は、容認し難き御家の罪人とはござれとも、故殿御目懸振の者、又た右家中謹愼の此の最中に於いて成敗と申すも安當で無い。仍て唯だ追放。家財總ては其の一人殘つた孫女に取らす。究竟は殿が御喪中の追善。然御心得なされたい。——やあ出い、九郎衞！」

彼は喚れても出て來ぬのに、人を遣はして搜索させると、又た個は什麼で、大石が一同との問答の隙、雪隱の掃除口から身を脫けて、山越に何方へか逃亡せたと云ふ。

「はゝ黨爺、逃げておざるは！」

大石は、唯だ「可し〳〵」とのみで、微笑つてばかり。

「ぢやが、内藏殿。餘りに御處置――寛大に過たとはおざらぬか喃？」　とは不滿を色に見はした奥野が疑問。

「いや其れも亦た可くおざるのじや。」

「軍右が盗罪も御糺問爲され無かつたは？」

「はゝ、其も又た考案の些少か御座ること。委細は後日、自然に御判明になる時節もおざらうて……。」

何を問ても此の「後日」と「可々」の一點張。奥野も原も根負が爲た。

（三十八）

翌日は大石内藏助、家老の役目として金庫に出張する。前の金奉行前原伊介も、此時は病氣稍平癒といふので出役する。勘定方の岡島八十右衛門、大目付の間瀬久太夫、徒目付の茅野和助に神崎與五郎、郡代としては吉田忠左衛門、藏奉行としては貝賀彌左衛門、祐筆として中村勘助、此等各自當役、助役、立會の横目といふので早朝から場所に詰合つて、足輕頭の、原惣右衛門が指圖の下に、彼の金藏から足輕して在金殘らずを大書院の廣間の中央に積上げさせた。其の在金、卽ち軍用の城附金、勝手方預り金、當座奉行の諸拂金、

金給諸役手當金、其外諸向の金銀を合して都合現金三萬八千兩也（此外に札座引換用意金五千兩）。此が赤穗浅野家、五萬石の國許總身代で、總家中、上は家老の大石より下は徒士足輕の輕輩にいたる、二千二百三十二人の頭割となるべき金額のである。

一人前に割當れば、僅に金十七兩何分何朱と錢何百何十文。明治の目今でこそ此が些少の金ではあらうが、當時（元祿十四年）の取前、徒士一人五兩三人扶持、足輕の年給金三兩といふから算出せば、此の十七兩の金と云へるは容易ならぬ額。で此の沙汰を聞いた總家中、就中輕輩は、唯だ大石を神として拜む、命の親として尊とむのである。此の拜む、尊まして今置くと云ふのが内藏助の一つの手段、又た彼等の肚裏を見る肝要の試金石、卽ち交雜物の有るか無きかを此際に試みやうと爲る、頗る苦肉の、實は窮した方便であつた。五百三十餘人の籠城の連判者が、殉死となると其の十分一の五十三人に減る。猶ほ其れが仇討との議に變ずると、拔け〳〵に落つる者が又た二十餘人も出來た。頼み難ない人心と其をば云ふものゝ、是れが則ち人情の常で、悲憤、慷慨、火にも水にもと云ふ其の十人が七八人までの肚底の實際を搜ると、多くは是れ一時の血氣！程が過て、日が經つて、熱した血が冷えて、立てた湯氣が收まつて、磅礴も鬱勃も漸次に其量を減じて來ると、誰も難

義は爲たく無い、父兄弟とは離れとも無い、妻子は可愛い、人間は廢めたく無い、で究竟命は惜いと爲る。其の可惜い命も、人間も、妻子から親兄弟をも棄て迄もと云ふ眞實無二、純粹の忠臣をと云ふが彼れ大石の現在の所望で、又た其等の義士で無うては共に俱に謀るに足らぬ。寧ろ可怖い。卽ち變心の惧がある。無いなら無いで夜路の危險の覺悟も爲やうが、無氣味な路伴の、驅擊でも吃はせられさうな者とは此の山路を一所に瞰えられぬ、といふが又た彼の旨下の用心。では有るが又た其れは一肚皮の表面から見えぬ。誰も盜兒でござると名告て來る奴は無いから、是れ以て難義な注文。唯夫れ是れを眞實に見るのは金！金の魔力では人の心の奥の底まで見え勝の者であるから、因で眞實の此の路伴と爲るか什麼かを、言語で無く、涕淚で無く、神文等では固より無く、唯其の所作で見やうと云ふ方便の一部として、彼は此の平等分配の策を畫て、見た。可憫、可憐、彼が窮苦も此に到つて亦た極矣と謂ふべきので。平氣な顏の莞爾笑の眼の底には、什麼に萬解の涕淚をも流したであらう！と、今更ながら想像られる。

閑話は例の休題くとして、此日は早朝からの金勘定で、大書院の大廣間は金銀の丘、錢財の山。算盤はぱち〳〵、計算はざく〳〵、傍から包む、綿げる、名前を書く。然しもの人々も困惚して、漸やく括上げて、先づ一服といふ頃には夜も闌けて、曉方の一番鷄！此頃には既や追手の橋際に詰掛けてゐる有志もあつた。

（三十九）

當日は朝五つ半時登城との觸であるのに、何方の里でも慾には眠る目も寢られぬが浮世、誰が取り囑らせうとも云はぬのに我勝と先を競うて、夜明前から追手の橋際には黑山の人。其れが六つ時の門明には雲霞と玄關へ押上つて、定刻の五つ半には廣間は既や爪も立たぬ程の群集。何しろ二千人以上の多勢であるから七十疊敷の座敷二間も、御詰め下さいが、果ては押すな〳〵と爲る。足輕の輕輩が如きは、六年分の給分を一度に貰うのであるから、主家の滅亡も何の絲瓜と、結句は富籤にでも當つた氣で喜ぶのもある、呶鳴るのもある。中には殊勝なは泣くのもある。其中に大石が指圖で、彌金配りの一段となる。流石に此時は、一座も水打つたる如くと爲つた。聞えるものは金勘定の外に、稀れに歇欷する鼻を拭ひ音。是れが小半時。

「はや一同へ、御金、行渡りましたか喃。」

と內藏助は金奉行の前原に問うた。

「分配相濟みましてござります。」　と伊分は應へると。

「ふゝ。」　と首頷いて、

「扨て、――御一同！」

内蔵助は襟を欽め、容を正して、聲嚴かに叫むだのである。其れで一同も、

「はッ。」

「些と折入ての相談がある！」

彼等は驚とした。下世話にある、甘い物食うて油斷すな。本膳の跡から和尚扨てと云ひ此の切辛い世の中に、いかに吾が物で無いとは云ふ條十七兩の謂はゞ大金、其れを惜し氣も無く徒與れてはゝあと笑つて居る。内蔵殿が大腹量は豫て聞くところで有るが、什麼な腹量とて然樣は問屋で卸さぬ理由と思つて居たのだが、果然然樣だ。「相談」？何事の相談か。「些と折入つて」抔の枕附は殊更ら無氣味。凡そ金を持たした後の相談に碌な事のあつた例は無いので。既や此方の用事は濟む。長居は恐れ。然らば！と此等は彼の夜明前からの有士連でもあらう、又もや御意の出ぬ中、と隅の方から狐鼠々々々々。夫れに伴られィとや〳〵〳〵。恁くと見るなり原が痞癪は看る〳〵起つた。

「内蔵殿相談と被仰るのに、何故逃ぐる！起たば某、相手じやぞ！」

「いや言れなよ。起つ者は起座すが可い。殘る人は御殘りやれい。到底が面白うも無い談合じや。」

内蔵助は、曩の語を語ひ罷して、悠然と扇ばッちり！

此の悠然に、流石起ちも成り難ねて殘つたか、但しは出後れたかが三分一、惣々は七百人も居た。然し其の多くは心許ない目を互ひに見合せる。急雨に追はれた渡場に、一船乘り後れた乘人の如く。

「ほゝう、其でも多分の御殘りじや。頼もしい。――然らば、申さうが。」　と大石は一つ咳拂ひして、

「申す迄もふざらんが、覽らるゝ通りの退轉じや。――就ては御城は、公儀御使へ差上ぐると爲てからが流石赤穂の舊領主たる淺野家の事、御先祖以來の御墓碑もある。又た故殿御位牌とても彼の御菩提所へ安置ねば相成らぬ。旁々で。右祠堂金、又た御石碑、御位牌の料とも我等惣中より彼の華嶽寺へ寄附したい。――談合とは唯だ右の事。――如何おざらう哺？」

一座は、寝て居るか、起て居るのか。生て居るのか、死で居るのか分らぬまで靜まり返つた。其中に物頭の玉虫、外村、

「其れも然るべき義じや。シテ其額は何程じやな。」

「多々益辨ずるで、多くば多い程好いと云ふもの。先づ我等が考案では、――一人前、十五金か喃？」

「えッ十五金？然らば此金を大抵悉皆？！」

と聞くなり座中は幾と惣立だ！堤防の決する、大河の溢るゝ、譬喩は物かはで、百鬼夜行の朝暾の光に遇へるが如く、命辛らぐ、這う〳〵の爲體と逃失せて、閑寂たる百四十疊の廣間の彼地此地に、涙を飲む士とては、單だ四十八人！

（四　十）

百七十疊の廣座敷に四十八人、物に譬はゞ巨大い口腔に間踈な抜殘りの齒の植られて居る體で。物の哀れとも、氣の毒とも、寧ろ慘しくも見られるのである。

おい〳〵と大聲立てゝ泣出した者がある。

「御頭樣、何たる情け無い次第でござりませう。殿樣は恁う云ふ衆中ぢや有るまいと思し

召て、從前莫大な御高も下されたでおざりませう。又た御家老樣も那麼腐敗れた腸では無いと。――其れで大方御分配金も爲されたで。――十五兩の御金が何物で？私共出來まするなりや二十兩が――三十兩でも……。」

兄弟兩個、交る〴〵に泣き喞いて、足輕頭の吉田忠左衛門が傍へと寄り寄る。其の兄弟と云ふは彼れ吉田が組下の、寺坂吉右衛門に同苗定右衛門。身分は苗字さへ實は名告れぬ彼の年給の三兩といふ足輕である。

「御歴々樣方を差越しましては甚だ恐れ入りまするが、唯今頂戴の御金、兩人とも封の儘差上げまする。何卒右へ御差加へも被下れまして……。」と彼等は涙を拭く。

殘つた一同の奮激の涙は、兄弟が眞心に又た慷慨の種となつて、稍暫時、口を啓く者さへ無かつた。

「あ！」と感歎して、「兄弟の衆、近く御寄りやれ。――いや苦しう無い。ずゝッと近う。――忠左殿、其の金子を……。」

内藏助は扇をさらりと彼の封金の二包を載せて、頭上に高く押戴いたが、眼からは潸然と、

「辱けない。兩人の衆。――唯今此義。故殿尊靈へ御披露の爲まするぞ。」

彼は背後にした床間から身を斜めにして、懐中から取出した品はと見ると、其物は最期の血の痕を白鞘にも染めた彼の九寸五分！置物の唐木の臺の中央へ恭々しく押直して、其の封金を前面に備へて、

「殿！尊靈へ内藏助言上仕つる。――吉田忠左衛門御預り組御足輕寺坂吉右衛門同く定右衛門。御石碑、御位牌調進の料中へ金三十四兩が餘、獻上を願ひ出で、内藏助御口上を承はりて願の趣差許し遣はしまして御座りまする……。」

在すが如き御座敷の爲體、胸に徹ふる大石が言上の態度、況て故殿の御形代なる彼の血染の御短刀！目に視、耳に聽き、心に感ずるは今更らなる其の或る事由の念。一座は平伏した疊の表面を唯だ嗚咽の涙滴に濕らしたが。旋て、奥野、進藤、原、河村等を初めとして此座に在り合ふ四十餘人は、各々席順と年順とをもて、大石が披露に就いて、彼の頂戴金の悉皆を其の御形代の前に獻上げた。

「誠に以て殊勝の段、殿、御滿足に思し召さるゝ旨の御沙汰に御座る。――就ては御悦の御盃、下させらるゝとの御義。各位、近う。」

「それ」と云ふと前以て心得たか、主税は自身に御盃と銚子を持ち出でゝ、靈前に置く、

其を内藏助は一々取つて、進藤小山の面々して何れもが前に引く。主税は其盃へと注いで廻る。世が世ならんには家老の嫡男、士分以下は同席さへも憚かるべき其人が自身の酌、此すらも人々が涙の種である。

「眞に、尊前にての御酒頂戴。今更ら御在世の昨日の樣にも存ずるが。扨て各位は、此の御盃を何樣の御祝義を以て御納めなされうと存ぜらる？」

とは家老次席の奥野將監が思ひ入つての口狀。

と、其を聞くが否な、其義をこそと待構へて居た氣色の早水、萱野、岡島、貝賀等、前後左右より異口同音に、

「別義ござらぬ、唯、御無念を……!!」

「むゝ、御無念を？近頃同意じや、――が、其の御無念を散ずるには種々の手段が要り申さう。――其の手段は喃？」

其時に末座の方から席を進めた者がある。其れは神崎與五郎と見た。

（四十一）

神崎與五郎は進み出た。彼は徒目付の身柄の然のみ重くは無いが、分別者として社者の中

には輕しめられぬ人物である。

「如何にも手段は要りますする喃。但し孫吳の詳細きは熟うも存せぬが、楠公の七擒、道鬼の八策、小幡氏の九求にも、兵は先づ將を立つるを最要の件と致すげで、將無からんか、如何なる妙策も奇謀も行はれませぬ。奥野殿仰せの手段と申すも實は其の大將の方寸からで。手段の一事は右の大將を御立なされた其後の御僉議かとも存じますする。」

「道理、道理。――早く大將を立てられて。」

と一同は且つ贊し、且つ此議の實行を促した。

「與五郎意見は至極でござる。然らば大將を速と申すな？。」

奥野は再び一座を看渡すと。是れは誰も彼も無い。一度に寄する潮の如くに、四十餘人は唯だ、

「大石殿！　内藏殿！　我等一同其の御指揮の下に粉骨の忠を盡しませう！」

「内藏殿。　右じや。」　と、奥野と進藤は手を支へたのである。

此時の大石が肚裏は什麽有つたであらう。又た其の態度は甚麽とあつたか。――抑も此の復讐の議たるや、誰が言ふとも無く、促すとも無く、此の集合へる一座の口頭から自然に

發語されて、主も無く、從も無き、謂はゞ此の四十餘人が悉皆の發起である。卽ち天翁だ。人爲の聲で無い。其の人爲の聲ならぬ天翁の響は、唯だ一片の忠誠、己むと欲して己む能はざるに出でたるもので。又た其の出でた動議と謂ふは甚麽？彼の祠堂金の苦策と云ふからで取りも直さず彼の方便の測らざるに成功を告たのだ。吁嗟、成功！此の不幸なる賀すべき成功に遇つた彼は、誇揚るところか、飽く迄も肅然たる容を收めて、歡然たる息を凝らして、奥野進藤等が更めて恭々しく、此の一旅の帥として我を迎ふるにも首を低れて、遽に返答をすら爲であつた。

「今は御疑念もおじやりますまい。一同の決意。潔よく御返辭下されて。」　とは温厚なる吉田が口狀で、

「此ぞ故殿の思し召でかおざらう喃う。尊靈が我々の口に憑かしやれて、言はしめらるゝのじや。」　と沁々と眦くは、平生寡黙をもて名の聞えたる六十七の老人、間喜兵衛。

「や？尊靈か！」　と大石は猛に彼の床間なる血刀を崇敬ひ視た。

「如何にも……！」　と又た首を垂下て。旋て儼然として坐直つた大石内藏助と云ふものは、從前の大石でも、内藏殿でも無い。一基の大石――千引の巖の屹然として出た氣色

なので、一座は驚愕いて思はず其場に手を突いた。

「御所望、餘義無うも存じ申すぞ。内藏助、然らば采幣の採り申さうぞ。但し、大將は此の御形代、卽ち最期の御短刀！——内藏助は唯だ其の御形代の御指圖の受けて、各位へ傳達を申す義と心得られい。——然れば故殿は故殿にあらで、現在の殿、尊靈は斷えず此の御形代の上にまし〳〵て、我等を初め、各々の行事、晝夜御見戍り遊ばされうぞ。其の通り確と存ぜられい。」

故殿の大將！尊靈！御指圖！と言れた時には一同の頭は小草の如くに地に着いて。況て其の采幣役たる大石が眼光！其の聲音！

「就ては方々の御意得！——此の秘密の大事し申すは、父兄弟、妻子、親類緣者等勿論の事。如何なる知己朋友たりとも餘人とあるへ御漏らしやれなば尊靈の御憤怒とござらうぞ。——又た行事を謹慎み、苟初にも粗暴、手荒の事、酒を嗜み、色を貪る等のこと、別して無用！——近々に御座あるべき御城渡しにも唯だ神妙に喃。晝夜此の一事のみ念頭に懸けられて。——右、確と守らしやらう喃?!」

「はッ！」

「餘事は又た重ねて申し談じます。——然らば改めて右の誓詞血判を。——然れば、御宛名は、殿樣。連名は我等を初め。——勘助、前文の祐筆召され。」

中

（一）

花の名に負ふ京都の地を東南に距ること二里、吳竹の伏見の町をば東北に隔つること一里半、近き日の岡の峠には、知るも知らぬも逢坂の東海道の馬士唄をも寢ながら聞くべく、遠からぬ醍醐の山深草の野には、花紅葉に鶉の床、春秋の眺望に杖を曳くも草臥れず。都にも流れず、鄙にも墮ちず、風雅ゝ洒落の間を行く山科の里、西野の村に近ごろ居を占めたる浪人がある。是れ卽ち赤穗を立ち退きたる後の大石内藏助。家内には母親の貞松院と内儀のお岸、嫡子の主税に其弟の吉千代、大三郎。家來には彼の頑固爺といふ瀨尾孫左衞門に、昔の奏者今の林なる下女までも伴いて、千五百石に冠木門、三頭立の厩もあつた往日の灼奕さは無いが、田もあり、畑もあり、修竹密かに居を繞つて、長松悠けく軒を護る。食ふに事缺かず、衣るに窮らず、榮耀に餅の皮さへ剝がすば一生は先づ上陷の、安樂

と見ゆる家居の爲體。自らは赤穗浪士と稱へてゐるが、土地では內々果報浪人と羨むで居る。

彼が爾後、此地に居を遷すまでの行立には、中々寡少からぬ段取もあつたので。其の概略をこゝに言はゞ、先づ第一に、江戸から出張の目附其他の役人中へ、主家の再興、大學殿謹愼御免の歎願もした。家中惣中の願書も出した。猶其の公儀へ別心なき所謂る恭順の意を表する爲には、藏米四千五百石。城附の武具、甲冑弓砲鎗長柄の類、其れ等悉皆す。城內の掃除萬端、書院向の飾り附まで殘る方なき、今日までも云ふ「見事なるもの、赤穗の渡城し」てふ迄のものにして其の城番たる龍野(脇坂)足守(木下)兩家の人數に引渡した。猶ほ其他の細事としては、札座發行の銀札を引替へた。年貢未進の證文を燒いた。鹽濱役所の建物から其の在鹽を濱方總體に下渡した。公儀御屆漏分の領主林を其の山方の所有に切換へた。猶又た彼は、此間に藝州へも行つた。大阪藏屋敷、京都留守居屋敷の取始末も爲た。恁く八方へ動作く間にも、肝腎なる同志の盟約をば牢固くして、家中一般の取締をば嚴重にして、飽くまで神妙に、言効無しと評はるゝ迄も溫順しく、二千有餘の家中の男女にびしとも言はせず、滿足に、不都合なく、日割通りに此の城地を引拂はせたが。彼は

又た其の立拂の節には、加里屋、上假屋、中村、新濱、坂越の村町の言立てる者、佛寺神社の神主住持等をも寄せ集めて、改めて恁う云つた。

「扨て、今日、我等當地を立拂ふ。——各位にも相別れねば叶らぬがの。然しこりや當分の義じやと存ずるで。——地體、殿樣御義、公儀へ甚麼の御恨も無し、又た大學樣にも知らるゝ通りの御繁昌。家中總體、我等からも右御家再興、大學樣御家督の義を御目附中へも願ひ立て、又た御本家藝州樣よりも其段仰せ上げられに相成る手都合にも成つて居る。で、其の願望相叶へば我々も還住じや。各位へも又た參會も叶る。想ふに其も兩三年以內の事。——其座の、見やれ、あの庭瀨のあの騷動したでずらがな、那の通りの御取立。此方の神妙のに公儀とて御哀憐の目が無うて成らうかい。——されば各位にもの、あの華撤寺の事、折節は御墓の掃除ども賴みますぞや。——何？我等かな。家內一同當り京の山科の知己の方へ引込みます。こゝ一二年。右の御家名再興まで樂隱居じや。あはゝゝゝゝ。本願寺詣などには尋ねてござれや。祇園清水知恩院、金閣寺拜見の案內も爲せ申さうぞ。はゝゝゝゝ。——必らず待ちまする。」

此が彼の立際の挨拶。是れで彼等が、籠城も爲ず、殉死も得爲ず、仇討の事は其後は立消

え。諸事神妙の、寧ろ齒痒い城渡しを爲た其の意義といふも總て分解つた。

（二）

「内藏殿、御在なされるか。」

と慌てた調子で山科の住居を音訪れた一人の若侍。時は水無月も下旬の、籔蚊忙しなき夕暮の門。

「おゝ、三平かな。」

と、深草團扇片手にした大石は奥から出掛けた、

「希らしい。さゝ此方へ。——今京から到來の泡盛で一淩ぎと云ふ處じやよ。——何せい此の暑氣。——御宅の衆も變り無いかな。」

相も變らぬ其人が愛想も三平は目に留らぬ氣色で、其處をきよろ〳〵、奥を見たり、表を見たり、

「申しても御差支でざらぬか喃？」

大石も喫驚いた。勿論此の萱野三平、忠義無二の賴もしい壯者ではあるが、事件に臨むと一途に迫つて俗に謂ふ「狼狽者」の質がある。其の狼狽者が遽爾々々眼と云ふのだから。

此の男、的切り行懸りの喧嘩でも爲て來たものと、

「又た例の短氣かの。毎度申すが御身がの瑕じや。今は彼の何事も辛抱の時節、——大事の際じやと何時もに云ふが……。」

「いや其で是非討果さねば置けぬ奴輩を、蟲の忍耐て今御指圖の仰ぎに出まいたで。——實、過刻、あの御庫金の盜んで逃げまいた九郎衛めが悖、軍右衛門のう。那奴、山崎の宅へ押掛けて來申した……。」

眼を圓睜げる三平。成る程是れは其の吃驚きも道理で。什麼に其家が滅れて今亡いにも爲ろ、半年とも經たぬ此の三月には、主家の用金三千兩を盜み取て逐電！といふ大罪を犯した其の一人では無い歟。其奴が、面を被るどころか、青天白日、巨手を揮つて、舊傍輩の宅へ押し込む！人間としては素より出來ぬ所業であるが、盜兒としても餘り身不知の所作であるから。

然し内藏助の例の面色で、然のみにも異しまぬ、

「來たか。　ふうー　何じやとて來た？」

「一大事露顯の小口とおざります！」

「えッ？嗅ぎ知つたか？」　これには稍眞顏！

「知りまいた！　誰に聞いたか途中の者の假名實名、かゝ〳〵ではござるが聽知つて、我等へ申します。――金を與せ！與さずば訴人する！御身樣を初め、原吉田小野寺、進藤奥野、又た江戸に居る堀部殿父子、奥田、高田、其れ等一々奉行所へ訴人する！其れが否なりや與せ。五十兩！と――恁う言ひよります。

擊ち斬るは固より容易いが右の御身樣の御教訓。殊には餘事とも差違ひまするが、叶らぬ胸を摩つてのう、明日までと待せて置きまいた。が。扨て、此の埒を什麼……？」

內藏助今年四十三、門松の數も潛れば、世の中の奇事異聞と云ふをも多く見聞きした。なれども首の無い盜兒から恁く迄の大金を强求れて、其奴を捕へて繩打ちも能らぬと云ふは奇異中の最も奇異なるもの。身の境遇の墓なきよりも、寧ろ人間の惡智慧の何處迄に發達るもの歟といふに驚くが。――然矣、我も今倒しまに彼が其手を利用して、彼奴、原來什麼なる場所から此の秘密を聽き出したか。――更に進むで、其等の手筋と、江戸表の彼家（吉良？）との關繫が什麼あるのか。と此の二條を窃に突留むる事に爲む。と彼は思案して。

勿論、此の害物利用策は、彼れ大石が初手からの腹案。卽ち軍右衞門等が用金の取り逃げ、九郎兵衞が庫金の着服と云ふを勾窮追せぬ、どころか寧ろ其身を保護して遣つたとあるも其實此の理由。で有るから其の手段の餘り無法なのには些しく驚いたが、彼の腹稿の一部の成功を告げ掛けた、其の、其れには彼は肚裏で手を拍た。徐ろ〳〵魚め、集つて來をッたな。ふゝ面白い！」

惡く言へば、內藏助、盜兒の上錢取！

（三）

五十兩といふ呼價に驚いた萱野三平。此の始末を什麼と萎れ返るのを、大石は飜つて娛樂みさうに、片手には團扇、片手には小盃。

「然て、軍右めは、一人かな。」

「はい。來ましたは奴め一人で……。」

「安井に藤井、灰方輩は在らんじやな。」

「見えませぬ。――で擊ち放さうには手間隙要りませぬ。」

「あゝこれ〳〵滅相なこと。其樣な短氣御出しやるから御身は困るじや。五十兩の金。甚

麼物でござる？」

「はゝあ？」　と三平は魂消たのである。此人の口氣に藉ると、其金を彼奴に與れさうな？與れての後の分別も有るのか知らぬが、兎にも角にも五十といふ大金と、

「與れさしやります？」

「遣るさ。此方にも些と趣向が有るで、――與れいと云ふなりや潔く遣るはさ。――ぢやがの三平。――まゝ一盃お飲みやれ。」

盃を指して、恐縮すると辭ふのを大石は自身に酌をして、

「三平。其金は今御身に預くるが喃。――其際には恁う云やれ。餘人は知らぬが内藏助に限つては仇討なンど氣も無い事。大方他人の邪推であろ。今の身に其樣な評判立てられては苛い迷惑。悴主税が今後の奉公口探さうにも差障へる。但し、話で云ふても聞えまいから自身と山科の住居へ來て確とお見やれ。と恁う云ふたと貴所申しての。其から我等の有福な生計を說いて。現に我等が其事云ふたりや内藏殿は震へ上つて。口留めじやとて此の金子を卽ぐ渡された。那樣に田も有り畑も有り、金銀は固より、山林までも澤山に所有れる人に、命賭の敵討など、御身にしてからが出來うと思うかい。兎にかく内藏殿も云はゝ

ゝから行て御覽じやれ。我等も同道。――又た當人も其の以來は人も訪ぬで、人懷しいものに爲て居らるゝから、參られたりや苛い悅喜。――と恁樣な風に話しての、彼奴、同伴せい。――兎角は其金を渡さば、獵跡をと云ふで、其の調子なりや必然來う、――來れば此方にも、其の趣向がある。で、――脫落ずに……」

彼は說き〳〵、奥の間の手文庫から二十五兩包を兩個、切餅ほどに其處に並べて、

「夜路ぢやあるが貴公が事じや。危險いも有ろまい。――其とも送らせうか喃。」

三平は唯だ呆氣に奪られた。什麼に此人が大腹量のか、智慮が深いのか、其れとも金銀が有り餘つて困るのか。自己は中小姓の十石五人扶持、御家老の千五百石とは取り前が大分差違うが、其にしても一兩の金といふのが然う滅多に懷中に有つた例習が無い。御家老は又た御家老だけに其丈けの勤向にも要費れやうから。什麼に年來の貯蓄といふにも爲ろ、おい、三十兩、五十兩と、畑の芋でも堀る樣に惜氣なく與れられた理由の物では無い。其れを恁う潔く出さるゝとは、吁嗟、是れも偏に亡君の御爲、唯だ彼の一事を！と云ふ御念慮から。想へば勿體ない！

額の汗と諸共に涙を拭いた三平は、手を支へて、

「段々との被仰れましたこと、熟う會得めまいた。如何にも此の金子彼めへ與れて、嬶て同道して參じませう。――夜行は馴れて居ります。結句は一人が勝手。――然あらば御暇を申します。」

彼は懐中を撈ぐつて、縞の財布の襤褸けたのに彼の金を納れて、確と收めて、會釋をする。

「も、言ふ迄もふざらんが、如何なる變事にも刃傷がましい事、無用じやぞ。」

「はい。」

「生命は大事じやぞ。　蚤にも整して叶らぬ軀體じやぞ！」

彼は更に一禮して起つ。内藏助は紙燭して送らうと爲る足元に紅色的。何者かと見ると、血に醉ひて死んだ藪蚊がぽた〳〵と二つ三つ。

（四）

山科の西野山村（西野とも云ふ、但し今は西野山村と西野村と兩村ありて其間二十餘町を相距つ。大石が僑居は此の西野山村の方なり。）から伏見街道へ出るには、山越をすれば僅に十餘町。なれと其の本道とも云ふべき里道を行けば、勸修寺村へ出て、深草に掛つて（現今の東海鐵道、山科停車場より稻荷停車場へ行く線路に略當る）大亀谷から藤杜の社の脇

手へ出る、是れが順路。而して其の路程は山越の幾んど三倍はある。三倍の遠さが有る以上に、本道とは云ふものゝ此路も、猶且田舍の彼の百姓道なるもので、左右は雜木立の丘山に、所々に棚田もあれば瓜畑もある、壹は彌鍬に茶辨當の影も見えるが、夜ともなれば人子一個！地區は猪鹿の占領に歸して、古來名物としては雉子に鶉、扨は狐火。先づは餘りに氣味の好からぬ寂寥しい場所。

三平が山崎への歸途は、實に此の路筋を通るのである。だが彼は、這麽山路、――山路とも云へぬ寧ろ野等路は國許の赤穂では熟れた物とて、城下を距離る東へ二里の鷹取峠、西へ三里の帆坂峠も夜中鼻唄で往來した者。備前境の何とかやら云ふ大峠、山賊の巢窟を爲るといふ間道さへも度々獨行の夜越にしたが、其際とても毛孔一つを悚立せなんだと誇る氣丈者の彼。其の三平も、今夜は甚麽だか背後が顧られる。正直に云ふと不氣味でならぬ。何者か知らぬが簌々との物音でも爲ると、屹乎と佇立つて闇中に透視すといふ怯臆な所爲もする。

其れも餘では爲い、彼の生れて以來持たことと無き五十兩といふ大金を懐裡にして居るからで。誰が吟ンたか物持たぬ袂は輕ろし夕涼！其金さへ無ければ夜闇とも無い此の往來が、

甚麽の物かは、闇黑は結句氣が沈着て好いぐらゐであるのが、其れが、あゝ切て月が有つたらとも呟かれる。這樣事なら提灯を借て來ればとも心に思ふ。二十三歳の血氣の壯者の言分としては相濟ぬが、實は先刻「送り」と內藏殿の云はれた時、此の物騷な野等路が程を、とも言へば宜つたと肚裏では悔む。

「えゝ儘よ！寧そ街道まで駈拔けう！」

空脛の草鞋穿ではある、闇とは云へど方角も大抵知れては居る、懷中の彼の金を更に確乎と腹に當て、双刀を搖込んで、萱野三平、西方を目指して山越す野猪の勢で一散に、蔦地に、稍五六町も駈けたかと思ふ頃、何物にかとーん！反撥を吃つて自身さへ一間ほどだゞ〳〵〳〵！

「あ痛たゝゝゝ！やい、誰奴じやい！」　と、其者は人間である。

「やッ、こりや御無禮。御免され。」

「やい〳〵〳〵〳〵。汝此の闇中を奔つて來をッて、突如に人に當つて、唯だ無禮——免されで事が濟むかい。——土下座で謝罪れ！」

「謝罪ます、謝罪ます。不知心急の事がござつて、不知御粗忽を……。」

三平は土に手を突く。敵手は甚麽か懷中へ手を指入れて、我と我が帶の間を搜ぐる體を爲てゐたが、突然に、

「呀？」　と慌てた樣な聲。之に應じて傍邊から又た一人、

「什麽した？」　と其處に現出れた。

「やァ這奴掏賊じやぞ！俺が今の賴母子の金、掏りよッた！」

「えゝ！」　と云ふ驚聲は三平が口からも、今一人の男が頤からも一所に發た。曩なる奴は愈大聲に、

「掏た〳〵、彌掏兒じや。捕へて呉れ、未だ持とるじや！」

恁くと聞くより、扨は？と心得た三平は、彼の太切の身も時の勢已むことを得ず、

「姦盜ぢや喃。汝等は！」　と身構へた。

「ナニ？」　と彼等は立挾む。

「やァ小細工すな。此の山路と、知つて合點じや。出直しをれ！」

「そりや此方からじや。掏た金出せ！」

懷中へ手を入れ掛けるので、三平も最う此れ迄と刀の柄に手を懸ける。其の小肱を、思ひ

も寄らぬ又た一方から強かに擊たれてあッと云ふ隙を、再回目の奴が又た脇腹へ「鐵砲」といふ不意の的身！無慘や三平此に溜らず其場へ仆るゝを、三人は奇て多集て背とも云はず腰とも云はず滅茶々々毆打に毆り据えて、

「ソレ取り返せ！」

「おゝ。」

彼等は彼の懷中の金——縞の財布を手攫みに攫み出して、押戴いた儘、闇は黑白なし、行方を知らず。

（五）

萱野三平が生家と云ふのは山崎の村に聞えた代々の鄕士、既往は輕光朝臣が末葉とか稱へて、大江山の童子ほどな威勢を近鄕に振つたものさうなが、有爲の轉變は巨椋の沼の鯉餌の棲處にも人家が建つて、淀河の淵も瀨と年々變換る。然しもに榮えし一門一家も世を經る隨に、衰耗へる、疎遠くなる、斷絕る、滅亡びると云ふもので、今は家重代の田地山林が一町五反、其外には傾きかけた長屋門と、臺所に煤けた尺五寸角の榉の大黑柱、此れ丈けが此家の陰にも陽にもの支柱で。萱野家無二の重寶として先祖の飾りと父親の七郎兵衛

が大事がる、系圖の一卷と紺絲絨の古腹卷、此等は四條の好事屋に見せてからが小玉銀三個ほどの價値もない疲世帶。然し氏は爭はれぬもの、此の貧乏世帶の塵埃の中にも、垢に汚れず、土に黝まず、眞玉の光りの十五乘は知らぬが、兎に角此の街隈の塵芥を照らして、京の分限か大坂の富裕か、今に瑤の輿の保惠駕の樣なを釣せて迎へに來るであろ。御所車とは行くまいが、那の孃やんに被衣被せて、白襟の厖々眉でも立てさせたら、公家衆方の御上蔦じやとて眞個に負けは爲ぬ、あゝ好え眉目や。と麥搗唄の合間小間に近所の婆噪に噂さるゝは、此の七郎兵衛夫婦が中の愛娘で、三平が妹の輕である。

輕は三平に四才の弱齡で、今年は十九。容貌は今云ふ鴨川で曝らし揚げたる雪の肌にも劣らぬに、氣質も優しく、女子には希見しい程の智慧もある。當にならぬ物、箕面の富閥と三十三間堂の佛體の數、扨は世間の評と云ふも、彼女のみには的になる、眞に個の無垢き玉！

「兄樣は何う爲されたでござんせう。——父樣も未だ御歸りが爲し。——妾は昨夜から氣に懸つて、〳〵。」

と臺所で菜を洗つて居た手を停めて、彼女は土間に粉を挽いてゐる母親に對うと。

「然樣じやよ、私もの、其れのじやで、猶ほ呑戸の六藏どんにの、一遍尋求てと依頼んだが……。」

「一體何方へ去なしやれた喃？」

「山科とかへ……。」

「大石樣かえ。」

「多分、然樣のじやろ。」

「ではあの、昨日來た……。」

言ふ時に門口から、

「三平、如何じやの。」

と入つて來たのは、

「おゝあの、御前樣。」

と母親は慌遽て頭巾を去る。

「息子どの、居召さるかの。軍右が來た。」

揑乎と上框に腰うち掛けるは今の噂に影さした、双刀さへも物其物でない軍右衛門、今日

を目的の所謂る丁半の當飲といふのなるべし、目元もちろ〳〵、膓樽臭い息をふうと吻きながら、お輕をぢろり！

「ほう！お娘か喃。——豪ら艶美しい！——あゝこりや逃るな——逃げては不可ん。——あゝ。不可んと申すのに……」

と彼は後を眤と目送る。お輕は納戸へ、畏怖て逃込むで仕舞たので。

「おゝお生憎樣でやのう。悴めも昨夜出た切り。親父殿も留守。誰も今は居ませぬでの。御用事なりや又た御出で……。」

と、母親は人にも臼にも逆らはず、無禮な口狀に腹は立てども其にも對手に爲らうでは無しに、粉を挽き掛ける。

「あゝこれ〳〵、其樣な悠長な穿議かい。此方のは此の、今日の午時迄との約束じや。——待ち申さう！」

居られては困る客、殊には不氣味な人體ではある、

「待たしやるならじやが、私所も婦女ばかりで男片たら一人も居ませぬで。——何卒又た、出直さしやれてな……。」

言うのも無理もない。酒には酔つてゐる。眼縁こそ紅色が其面は蒼白かゝつた殺り削いだ様な可厭な頬、頭は五分月代、瞎焉とした鋭い眼。身には黒羽二重の引解の單衣を尻塞げにして、足は素跣。此體では什麼な田舍婆の鑑定にも、主無し狗の乞食浪人。其上に深くは知らぬが、昨日も金の無心にでも來た様な？此の貧中に無心を爲れたとて出す抔の金も無いのであるが、其でも成るべく三平の歸宅るまで、寧ろ再度來ぬやうに爲たいのである、と母親は思つた。

（六）

「出直せ？居て迷惑なら出直しもせうが、内金を貸せ。——昨日の約束は五十兩。其の半金だけ出せ。」

「え？五十兩？　誰が其様な大金此方に貸さうと云ひました！」

と、母親は最う挽粉どころの騒ぎで無い。

「はゝ、誰でも無え、此方が息子よ。——三平じや。——三平が約束したじや。」

「え、三平？——三平が又た甚麼じやとて其様な約束を？——シテ此方は誰じや？」

と、ひよろ〳〵と云ふ様に出て來たが、

「否や誰人でも好え。其様な約束は此母が謝絶ります。——母が謝絶る！去なしやれ〳〵！」　と強い婆様。麺棒を片手に立ち掛る。

「あッはゝゝゝ、や苛い——てりや力身じやの。——措け〳〵、措きくされ。其棒が、てりや、赤穂の家老大野九郎兵衛、其の九郎兵衛が若旦那の此の軍右衛門が此の片足の小指の尖にでも當つて見い。三平は勿論、汝が良人の七郎兵衛が汝もお娘も、一家包めて代官所の臭飯じや。——いや其れ處で無え、山科の大石初め、連判の奴等殘らず。首にも爲らう、胴にも爲らう。京は四條の寢の河原、大阪は千日寺の刑場の土、烏と犬の餌にも爲るぞよ！——さア什麼な？毆つか、撲るか、麺棒の始末を何様爲るぞい！」

「はゝア馬鹿面！發狂婆の古猫婆の紙袋かい。——減多に下るなよ。其處へ出ろ！汝等知んかな、内藏助は吉良上野殿の御首を狙う謂はゞ謀叛の張本で、三平藏は其の部下に屬く、木片素片の小盜兒だわ！其の内幕を緊と握つて此の懐裏へ入れて置くのは、な、

此の鼻樣の軍右衛門。――那樣な物じやい！些とは魂消の、腹の蟲の居處も變へたか喃。は、馬鹿な奴！

で、今云ふ其の五十兩は口留金の、其の內濟じやぞよ。――多寡が五十兩の端金で、內藏を初めの五十餘人が命を續ぐ。――こりや一人の素首が小判一枚にも當らぬわ。は、廉い物！其の廉いのも、鼻樣、當面の御宿する者の無いにも困るから。――で當分は其金持て此方の厄介。な、然う思へ。」

と、因理をも聞き、厄介とも聞せられて母親は震へ上つた。這麼犬奴に此家を荒されて、什麼なるであらう。其事もで有るが、其よりも猶其の五十兩の大金、三平が約束したとは甚麼の目的か。大石殿へは其事を依賴に行つたのか。出來れば好いが、出來ぬと大變。此處らで減多な其の盜人呼りを爲れた日には其れこそ其の代官所！と彼婆はもう戰々し始めた。

と看て取つた軍右衛門は急にほく〳〵、猫撫聲といふのになつて、

「は、母親どの、其樣に恐怖んでも濟む事のじやよ。今の樣に云ふたのは喃うあり、や眞の行掛りで、軍右も武士じや。武士に對うて手强すれば、こりや、此方も其の自然語調をも暴う

爲にも成らぬ。然し甚麼あらう三平とは傍輩じや。昔しこそ家老と中小姓の上下はあつたが、目下は五一の浪人じや。で、實、今も云ふ我等も一寸と其の居所起所にも窮るでの。此處が相談、――甚麼と我等を此方の婿殿にして下さらぬかい。――あの今見た、あのお娘の其婿にのじや。――持參とて別には無いが、今に三平が歸宅て來やれば其の俺が手に入る其の五十兩、右が婿金。――喃う、大枚の五十兩！

其れに恁うは見えとるけど、俺は大の親切での、嬶も可愛がる、舅姑にも善くします。其上に持參が五十兩！――いや未だ〳〵其の以上がある。追つけ淺野家再興ともあれば又た以前の御家老職で、知行が六百石。すれば、お娘は奧樣じや。無躾じやが水呑の娘が、奧方！――什麼じや差向ての五十兩に、追ては六百石。隨分貰ひ德の婿殿じやろ。な。お母親どの。」

愈吃驚かされた母親は、うんとも、すうとも、目ばかりを瀧栗させて後へと下がる、豆鐵砲を吃つた鳩。是れは其の本鐵砲の猪用心を肩に擔げて今方戻つたと見ゆる主人の七郎兵衛、其處へのさ〳〵、

「はあ、こりや押し掛の婿殿かの。」　とぢろりと視る。

（七）

七郎兵衛、年は老つても巖丈質の剛氣の爺。山刀を身近へ引附けて、燻る樹火を搔ぎ立して、
腰提の紙煙草入から手刻みの荒切を脂煙管に盈めて、先づ一服して、
「こりや婆、茶々一つ與れんかい。――むう、三平は未歸じやか喃。」
と其邊ぎよろ〳〵。鼻尖に居る軍右には目も與へぬのである。
此爺の面魂、侮り難しと見た軍右衛門も多時は暫り〳〵と、睨み合の姿といふもので其
の呼吸を計つてゐたが、
「おい、母親。返詞は什麼のじやい。」
老爺は其語を遮止るやうに此方へ捻向いた、
「今の婿入談か喃？」　と突然に單一句。
「然うじや！」　と軍右衛門も極めて簡短。
爾く突然に、簡短のであるが、這裏に無量の意味は含まれて、增組の打衝だか、銃火の交
換だか、兎に角此に其端は啓かれたのである。阿呀と婆樣も固唾を呑めば、娘も堪ぬか、
其の避難所の納戸の口から半分顏を出す。六個の眼は測らずして齊しく合つた。親爺は其

眼を又た弗と翕して、時は六月の朝の四時前、惜し氣もなく射し込む暑影に蠕動くやうな
蠅の團塊の其の一羽が、汗の香を追うてか飛で來る、其を手粗く拂ひながら、
「概略は那處で聞いたが。其談なりや、まあ謝絕る喃。」
「不承知か！」　と彼は喧嘩腰。
「ちやらう喃う。謝絕ると云ふのじやから……。」　と此方は空嘯く。
「コレ確に云へ。身も武士じやぞよ！」
强面に蒐ると、老爺は冷笑ながら吹殼を强く拂いて、
「武士なら進せます。何せ何家へか嫁る女だ。――異議なく進せます。」
「浪人じやからか。」
「盜兒じやからよ！」
とは吃驚り來た。扨は三平、用金着服の始末を早く這爺に告たのか喃。其ともにも他一個
の或る事か喃。然し餘の一個の件は未だ知りさうにも無げれば、又た知る理由も無い。然
て見れば猶且逐電で、其の逐電の方なら欺騙すにも易しと、軍右衛門、
「ほう。貴老も異な義を？――いや甚麼のかい？故主淺野家の用金をあの安井藤井灰方等

が盗んだ、其の一類じやと、三平、御身にも話したのか喃？いや後で聞くと其義で我等も猜疑れての、今日でも其の迷惑を爲まするじや……。」

「何でも可え。疾々と去にやはれ。此方は三平に用が有るのじや。其の本人が留守な以上は此宅に長居の要は無い。去ッしやれ！」

「ふう！此程に事由云ふても。尙だ疑惑う。——然して盗兒遇ひに爲る。——然樣なると、此方、料見と云ふが有るぞよ。」

「料見も邪見も要ぬわ！其麼でも去ね。脚下の明い中！」

「ヘン去ねとッて、去ぬるかい。——金も取らずに……。」

低聲で獨語たのを、疾くも聽つけた老爺の地獄耳、

「其れじや。其れを俺が言ひますじや。鷹は死しても穗を喰ます。俺も鄕士の片塊じやが、凡そ武士たる者が他に對つて金錢を强求る、其樣な法が今日にありますか喃。それ盗兒の爲る所作で。——其上に俺、ちらりと聞けば……。」

片手は膝の上、片手には煙管を斜に構へて、老爺、俄然に居丈高の、此から大いに此の家内を惱ます疫病神の退治といふに取懸らうと爲る端のであつた。今朝母親の依賴だといふ

背戸の六瀛を前肩にして、餘は山手の獵夫が二人、見るも淺猿しき猪襤を打被せた半死の病者を戸板もゝして、宙にして、

「御在らしやるかい。いや大事件じや。山科と云はしやるからのう、大龜谷から深草の山路に尋ねて行たりや、有らう事かい此方の息子どの……。」

と六瀛は先づ太息を吐く。其尾に接いて獵夫の二人もかろ〳〵語る。其の語るのを忙しく聞けば、仔細は知らず、彼等二人が昨夜木幡の山々に狙狩して、今朝日の出づる頃里へと下だる深草の山路で、急病の爲にか苦み呻く一人の武士。吃驚いて立寄り見れば、個は什麼、此家の息子との。此はと慌遽て兎や角と立ち騷ぐ際、恰も好し來合せたのが六瀛で、傍近の百姓家から戸板を運ぶ、襤を借る。三人肩に、物も言はれぬを扶け乘せて、徐行で漸々今昇き戻つたといふが其の順序。

「急病ちやでざらぬ、面から手脚の挫傷を見やしやれや。こりや喧嘩か、姦盗め等にも嚴打れさしやつたじや。」

三人が鑑定は圖星であるが、哀れや三平、彼の半死の重傷と云ふので舌も協はず、身動きも出來ず。執り着いた母親と駈け出したお輕に其の枕頭の前後を擁られて、唯だ泣聲を聞

くばかり。

（八）

妹の輕が「兄様！」と持て來た茶碗の水を三平は漸々に一口呑むで、

「父者。」

と喚び掛けた、其れも幾ど蟲といふ息のである。

「ふう忰。」と云ふ七郎兵衛が眼は無念の涙で、其れを皺びた鐵拳で拂ひ〳〵、「甚麼じゃとて其樣な目？」と、言つた後は又た睨み着ける樣な眼を爲てゐる。母親の方は然樣では無くて、到底も救助ぬと思つた息子が些少でも物の言へるのが、枯木に花の咲いた悅喜、

「三殿や、口が利けるか。眼も見えるか喃。母等の顏が？——てりや死では呉れさしやるなよ。氣を確固にの。——此家は自宅じやよ。」

「誰が手で這樣な擊れたのじや！」　と父は未だ可怖い眼でゐる。

「てりや病人じやでざらんか喃。病人を捉へて其樣い突言に云はしやるものか。其樣な義は後でも宜い。」　と母は恨み聲。

「お主は黙止れ！——三平、誰に毆打たのじや?!」

「父者。面目おざりませぬ。盜、盜兒に……。」

此も遺恨の涙は沸く。其の「盜兒」と聞いた妹は呵呼と驚いて、兄が涙を拭いて居た我手さへ慄え上つて。

「父者。あ、あの方から借りた金。——奪れ——了うて！」

今更ら怨恨に堪え難た彼は身を悶え掛たが、心計りで其を動かす力も無いので、彼の蟲と云ふ聲を揚てわッと泣いた。

「むう！」　と親爺も手を組だ切り。

「やア三平。金を奪れた？——てりや濟ぬぞよ〳〵！那れ丈の約束して置きながら今奪れたでは。——いや然し。奪れたは其方の勝手じや。うむ、此方には關繫は無い。——然うじや。——三平、あの口留の金、受取らう！」

嚮に親爺に痛め附られて、今まで片隅に模樣を覗てゐた如き軍右衛門、氣乘ずべしとや此時猝に伸張り出すのを、

「待ッしやれ。」　と遮切たのは同じく親爺。

「むゝ親爺？では貴樣が其金出すか。」

「金々と言はしやるなよ。今も其事を言ひ掛けた、御身樣も武士……。」
言せも果てず、
「ふゝ、武士じやと云ふな。——乃公は武士かな？」
「武士じやござらぬか喃。自身も今稱はしやれた……？」
「むゝ過分、貴老が身を武士と見立れば軍右過分じや。——然らば貰はう、あのお娘を……。」
「えゝ。」　と親爺は眼を晃らした。
「魂消るない。お主も今甚麼と云ふたか。何せ故家へか嫁る女じや、武士なら進ずる、異議なく與れると那のお娘が事云ふたで喃！——其れが身が武士じや。其方から鑒定て呉れられた立派な武士なのじや。——で、娶ひませう。」
陷られた七郎兵衛はぎちと塞つた。此方は悠々と高胡坐、
「ヘン、お主も最う異議な云へまい喃。——鄕士の端塊——厲は死しても穗を喰ますとやら。大分の難かしい七目題目云ふた口じやで喃。はア可傷坊や、氣の毒でも、こりや武士に二言無し。爲事が無いと、——潔く與れ！」

呆氣に奪れた母親よりも、犧牲に目指された輕は、逃げも得やらず泣伏した。事の意外に猶其の驚愕を重ねた三平は、苦痛も忘れて徒爾に眼をのみ瞬張る。
母子が歎き、病人の驚き、此口一つを滑らしたからと思へば、其の過失の根源なる此舌を
咬み斷りてもと念ふ七郎兵衛、看る〳〵頭上からは湯氣、額からは膏汗して、
「うゝ、那言は……。」
「那言が什麼した？」　と乘し掛る。
七郎兵衛も最う絶體絶命。
「言ひくさるない！　姦盜め！」
「又た姦盜か？——はゝ、姦盜なら姦盜で可え。なりや早變り。——金を與せ。——口留の金！」
手を出されて又たぎくり！肝先に突附られた白刃程にも彼は覺えた。
「寄越さぬか。えッ老奴！他を武士じやは、姦盜じやは！散々に嘲弄かいて、金も寄越さず、娘も與れず、石地藏じやとて腹の立つわい。——可い。其なりや最う代官所じや。敵討の訴人して、汝等一類皆な引括らせる。——覺悟しろ！」

彼は唖いて出やうと爲る。最う此迄と親爺は山刀に手を懸ける。

「あれ待て！」と執り縋るのは娘と母親で、「短慮じや。內藏殿が！」と、覺えず跟々と起たは病人の息子。

此に氣を挫折れた七郎兵衛は再び此場に堂と座るのを。

「おや？切るか？切るか？面白い、切て見ろ。さア切て見ろ！——切ずは汝、此方で恁う爲るわ！」

彼は立蹴に磴地と蹴仆す。其脚に又た武者振り附うとする老爺を三平は倒れ掛りながらに抱留る。其の病人ぐるみ蹂躙らうと、再び猛る軍右衛門を輕は慌起て押止めて、

「短氣じや、申し、お金も妾も御前御所望なりや何うにでも爲る。今其樣な手强爲なされて。」

「え？」と眼を圓睜げた軍右衛門は、忽地ぐたくと、「え、其方が、金も軀體も何うにも爲る？——眞實なか！」

お輕は唾を飲むで、

「あい。屹度。味好う爲ますでの。——今程はのう——何卒、免して……。」

（九）

お輕の仲裁で軍右衛門も漸々歸去つた。勿論其れは尋常では無い、金の事も堵の事も明日の夜の五時を限り、親父なり兄なりから然るべき返辭を爲せると云ふ堅い〳〵約束で。

彼が去つた後の三平が家內は、大風の跡に降り注ぐ茅屋が軒の村時雨。母親を初端にお輕も泣けば、親爺も眼を摩する。三平は再も倒れたなり、苦痛と當惑とに哀れな呻唸を漏してある。

彼等が泣く涙は一つであるが、其の心に思ふ處と悲む所とは自から別々で。父は彼の主人の金を盜したと云ふ人非人の惡黨に說破られた、足蹴に爲れたと云ふ無念が一杯と、我と我が口を風と滑らした粗忽、娘にも女房にも言譯の無いと云ふ遺恨の涙。母親は又た母親で、此末何う爲らうかの心配と、今一つは、初回て聞いた三平が敵討の連判、其れを彼者めに訴人さるれば一家殘らず縲附の咎人といふ其の恐怖の嗚咽。三平は盜賊に遇つた、汚目々々と金を奪れた殘念といふ口惜涙も無論有らうが、其よりも大石へ對せる面皮が無い、猶其れよりも、彼が口から此の一大事露顯に及ばゞ、我のみかは同盟一同、折角の苦心と云ふのも水泡との當惑の歎息で。可哀やお輕のは、明日の夜が、手籠に遇うべき其の淺猿

しき運命を悲痛む餘りの感歎。萬一も然うならば、妾は活ては居ぬと云ふ覺悟の涙も交つて居る。

「父様、到底もあの御金は――外に出來ぬでござんせうねえ。」　と輕は涙の中から恁う云つた。

「出來ぬ。――又た出來んでも可え。」

膠もなく頭を掉られて、娘は驚愕いた、

「ぢや妾を那の人に？」

「いや嫁らぬ。ナニ遣るもんで！――案ずるな。」

ふ輕は呆れた、案ずるなとは何う案ずるなで。其を案じずに濟む事なら頂で這麼に泣きはせぬ。と、

「では如何爲しやんす。明日の晩？」

「乃爺に委せろ。主等心配せるには及ばんで……。」

七郎兵衞は笑つたが、此が苦笑と謂ふのでもあらう、皺びた頬から搾り出す樣な其の笑容

恁う云はれる丈け此方の心配は彌增すのである。慈悲と云ひ情けと云ふをも咀嚼ても呉れる對手なら、其は或は此の談判も屆くかも知れぬが、狂犬の樣な那の奴、金も與れず人も遣らずに徒追拂うとは、恰ど素手で、握飯が持たずに其の剝出して出る牙に咬れに行く樣なものである。什麼な頑丈とて御年の上の父樣、敵手は血氣の、泥坊でも爲樣と爲る程な命不知。責て兄樣でも健康な軀體で居て下されば、其が這樣だもの！と今更ら兄の負傷を恨むで、父が決心の臍といふのを危殆むで、彼女は悄と兄を見遣ると。

三平は見るにも堪ぬ煩悶の眉、

「那奴めに手指など爲て下さるなよ。內藏殿の御申し附もでざります。今、那奴は味方に取て大事の奴。で何うか、諸事は唯だ穩便に喃う……。」

原來の秘事ではあるが、小陰へ招ぶといふ軀も利ねば、事情も急なので、彼は是非なく緒口を話すと。一番に目の覺いたは摩つて居てくれた母親。次には妹。父親は什麼にも不審の思入で、爾う云ふ息子が面を睨と視た。

餘りに視られて彼も注意たか、其の後句を言ぬを父は追窮て、

「內藏殿が那奴を大事に爲る？甚麼たる義じや。乃爺、解せぬが喃。」

「御解りならんでも、――唯だ私、此處穩便に爲とでざるで喃う。五十兩の金、――御工夫の出來ますまいか。」

と、彼は臥た形、父の容子を瞻視ると、三平の眼を忽地五角に、

「出來ん！那樣な奴に。金たら、這、這の刀刃な吃はする奴ぢや。――乃爺、吃れう、吃れうと思ふたにお主等抑止るで得吃せなンじやが。――今度來て見い。眞二つじやッ！」

拔齒の齦肉を咬切た上に、憤淚さへ拭く。――取ても着けぬ。

（十）

三平が遭難事件は忽地村中の評判となつて、其に就ては伏見街道と山崎街道、路程とても僅少ばかりよりは距離らぬ、然る惡徒が此の居廻りを徘徊せぬとも限らぬから當所でも今夜からの夜番を、といふ庄屋の注意ぜ。其には先づ其の本人の三平――と云ふた處が足腰も起たぬ負傷であるから、「親父どの、御苦勞でも今寄合の席へ出向うて下されや。庄屋殿が其の模樣萬端を自身に聞きたいと云はしやれる。手間隙も入るまいが、一寸と。」といふ村の走使が迎へである。

「ぢや行んで來る。好う留守を爲い。病人に氣を附けよ。」

「あい、案じさしやんすな。早う歸宅て。」

未だ不機嫌の父親を輕は送つて、其の後影が門の樫の木の横手を曲ると、急に彼女は引返して來て、

「これ、兄樣。」　と、三平が枕頭に緊手と坐つた。

前回にも云ふてある、彼女は肉親思ひの親切娘で、氣立も優しいが、又た怜悧の質で、勿論目端も利く。其からして場合に因ては處女に似氣なき大膽めいた擧動も爲る。野等遊の若い衆に戯談口など言ひ懸られても、彼女は潮紅い顏もせずに屹破々々と返詞を爲て退ける。闇黑を通つても別に可怖いとの容子を見せぬ。然し其等の大膽は、他に我が求むる處のあるでも無く、無意味の裏に行ひ得た大膽だが。此を今或る一事に利用して、自ら進むで一家の急難を解うとの決心の胸を定めたと云ふに至つては、彼女が境遇も亦た實に憫べき者。想へば淚も零れて來る。

其淚を彼女も押へて、

「妾や胸を据えました。　妾や妾の身を賣ると覺悟しました喃！」

「え、？甚麼！　甚麼じや？」と云ふ驚愕の聲は母と兄との口から發た。

「何せ遁れぬ妾の軀體でござんすもの。妾やあの豺犬の餌食に爲るよりも寧その事……。」　と、可哀の乙女は半分言ひ掛て泣伏した。

「其、其樣な、――其樣な事が。」　と三平は飜つておろ〳〵爲る。此方は涙の背を搖搖りながら、

「でも兄樣。其樣な事とて。――父樣は如被被仰るもの。お前は其通り軀も利かず。明日といふ晩、那奴が來たらば何う爲しやんす氣で。――父樣との喧嘩。――喧嘩で濟めば未だ好いが、萬一や非常な事。――其の揚句に代官所にでも駈込れたりや御前ばかりの身上じや無い、內藏樣や其外の衆。――然したら御前は何と爲さんす。――妾は其れが悲しいで、妾一人、地獄に陷ちて……。」

五十兩の金を調達えて、其れで差迫る難義を切脫けて、四方八方有耶無耶に鎭治めたいと云ふのである。

甚麼と云ふ親切――健氣。――其志の涙の飜れる程辱ないよりも、實際此處で五十兩の金さへあれば、軍右衞門が口留も能る。內藏殿への面皮も立つ。親父樣との喧嘩も無くなれば、又た彼奴を山科へ伴れ行も爲る。實に其の四方八方の好都合！昔から好く云ふ、

大事の前の小事。時の用には鼻を殺ぐ。と云ふのに當るのだが、扨て其れを爾うとも賴めぬのは、什麼兄弟でも、當人から進むで出た事としても、三平、自己も一個の丈夫として其れはおゝそれとも言れ無い。其で徒だ涙を揮うて居る。

「母樣、お前は何う思はしやる。妾が言ふこと聞濟んでかえ？」

言効無かるべき兄をば棄て、輕は意見を母に靭すと、今迄泣てゐた母親は案外にも諦念が好かつた、

「おゝ、母は承知しました。も孝行とも兄思ひとも、其樣な事何程云ふてからじやが喃う、好う決斷て下された。――此處で其方が其金拵えて下さると、兄も母も酷い安堵じや。で父樣も那樣には云はしやるも、可愛い一人の娘じやもの、田地家作を質に入れても一月と立たぬに身受とやら――伴れ戻します。そりや此の母が屹と爲すでの、暫くが程じや、辛抱して喃……。」

母親は什麼思つたのか、涙を拭き〳〵恁う慰藉た。

「ぢや善は急げじやで、お前今夜にでも何處ぞへ喃。」

「さあ、何處じやろの？」

此は心當りが有りさうも無い。無い理由で。何時も賣り馴た畑の豆や芋頭とは違うから。

「兎に角伏見の才兵衛どの頼んで來よ。下見とかが入るかも知れぬで、其方は髪化粧して待て居て下されや。」

我娘ながら今は一家の難義を助くる神樣とか、母は詞さへ改めた着替の衣服、褄端折して、杖をとぼ〳〵と出て行つた。

跡にお輕は納戸へ入つたが。可哀や歔欷の聲ばかり。三平は獨り、面さへ蓬げ得ぬのである。

（十二）

話頭は轉つて、三平を歸した後の内藏助は其夜一夜を勘考に明かして、翌日の早朝主税を招いて密に或る件を吩咐けた。其れは山崎の三平が宅に出向て、今朝軍右衛門の來るか什麼か、又た素奴來らば竊に其の歸途を狙けて、隱窟の何所に在る？其の隱窟には彼奴一個か、他に同類らしき者居るか。居らば其者等は、赤穂の九郎兵衛が一類か、江戸よりの安井藤井灰方等か、吉良よりの間諜らしきか、否やの詳細きをまで成るべき丈け多く探索りて急ぎ歸り來よ。但し什麼ならむ事ありとも手指は爲な。唯だ忍びやかに、人に知れず其

れが樣子を——と云ふのであつた。

恁く命けて後内藏助は、例もの小座敷で小鼓の一調、「雨雲の稲荷の社ふし拜み」とは扨も氣樂な！

ぢり〳〵照の六月の炎熱に、街道の往來さへ一時は途絶えて、蟬の聲すら膏汗の媒妁となる向日町から、一目散に取て返した主税、我家ながら歩を竊むで庭先の縁側に深編笠を脱ぎ棄てた儘、彼の小座敷を、——見ると父は諳本を枕に、他愛も無ささうな午睡の面。

聲を立てるも人の耳・と豫て暗號の鯉口を丁！

「おゝ戻つたか。」

「戻りまいたが、父者……。」

と、彼は目を圓睜くして居る。

「ひゝ、——靜に！」

彼はそろりと。簀戸越に次間を覗くと、居た！然も皿の眼をして物を窺つて。——其は猫である。

「うむ。暑かつたじやらう。——シテ彼奴は？」

「來まいた。――來まいた彼奴よりも驚くべきは三平で。昨夜此方からの戻り掛に……。」

と、彼は竊聞いた彼の始末を物語ると、此には内藏助も、

「ふう！奪れたか、五十兩。」

金は然ばかり惜くも無いが、什麼して此家から其金を持て出たのを知て居たらう？に背後さへ見られて、思はず八の字を眉根に寄する。其面を主税は又た瞻仰げて、

「其の盜兒を何者じやと思し召ます、安井藤井灰方の三人で……。」

「え？あの三人。――ぢや四人、諜合せたじや喃。」

「と、見えまする。其を發見しまいたは三平宅で散々暴れて、明日の夜の五時を約して去にまする軍右衛門。私、見え隱れに狙ると知らで、素奴、棲窟の向日町の裏手の茅屋へと入りまいた。」

と言ふ時にばたゝと響がした。彼の猫が鼠でも捕たらしい。――父は滿面の暗笑で、

「うむ好うしたな。で、其の三人は……？」

「……軍右歸宅るを見て三人打伴れて出まいてな。彼處の樣子は什麼じやとて？」

「むゝ、三平宅の樣子を問う？――で三平が宅では喃？」

主税は無念の呼吸を急に暴くして、汗に粘着く額髮を沒義道に掻上げたが、

「父者！其の宅でござります。――右も申した散々暴れて、三平親を足蹴に爲ます、大聲擧げて彼の大事を叫きます……。」

「むゝ叫く？金與さぬとて？」

「勿論、其故で……。」

「で、其金は夥伴の安井め等、奪たじや喃！」

「えい！我が同類の手にある金を、與さぬとて然樣に暴れまする。思へば可憎い！踏込むで素首並べうかと存じまいたが、父者御申し附けで是非無うも……。」

「いや其樣な――其を申すじや。――扨て其金の三人が手に有ることを、何で知たか。」

「三人は既や酒呑んで居よりまます。醉うた紛れに各々昨夜の手柄を云うて。最初に行當つたが藤井、次に出たのが安井、不意に起つて三平を毆打まいたのが灰方じやと樣にも云ひまいた。――猶彼奴等は、鼻孔には紙栓を、眼髮の上に覆面した氣にも申し居りまする。」

「何樣！――で、江戸からの義は？」

「其件は……。」　と首を傾げると。

「分らぬか？むゝ。」　と、内藏助は初て手を組むだ。

如何にも主税の言ふ如く、彼奴等が所業は全般が酷く、辣く、苦く、澁いのである。自己等が金を奪つて置きながら、強迫る！其を與へぬからとて、暴れる！彼の一大事を威喝に、叫く！前の二事は姑く胸を摩ると爲るも、後の一事は、此は猶豫の叶らぬ話。殊には然程にまで墮落しつゝ者、吉良方より誘致は〻無論。然無くとも此方より其の密事を望むでも賣り離ねまじき奴。兎角は此は活け置いては?!

「主税、太儀じやが喃う。紫野に居る岡島と潮田、村松の三人。一寸と同道申して呉れゝ。」

（十二）

大石が安井等四人の惡徒に對する即今の心事を、醫術に譬へる。什麼な外科醫とて、切斷なる療法を好むで患者に施すといふ那麼無法な先生は有るまい。唯夫れ癒腫肉を腐爛し、刀傷深く骨に徹りて、洗淨も投藥も其効を望むべからず。此に到りて所謂る大の蟲に小の蟲、其の小的患部を解いて、大的生命を保全すると云ふ事の餘義なきに出るのが順序。彼の内藏助とても然樣である。最初は彼等を利用して我が藥籠中の物にもと謀つた。が、餘

りに其者が墮落に過ぎた。其の點詐、姦惡、これを懷裏に收むる時は竟に其爲に身を併せて喪失ふの憂惧がある。蝮蛇の凶性遂に馴致すべからざる歟。其の頭を斷ち腦を碎くの已むを得ざるものなる歟、とまで覺悟の腑は決めては見たものゝ、猶幾許かの未練も殘る。彼等式の小人をも我は遂に度し得ぬかとの無念もある。仍で切斷と定めた腹をも猶は再診と暫し和して、京の紫野大德寺の塔頭、瑞光院から招き寄せた同盟の士、岡島八十右衛門潮田又之丞、村松三大夫に主税を合せて、「都合四人。我が面前に列べて、右の趣意を細々と語つて、兎にも角にも彼等四人を生捕つて伴れ来よ、我等熟と吟味の上で活すも殺すも其は其際の時宜次第、好く其意を得よとの訓令を與へて、彼等を其夜から光明寺詣（粟生）の田舍道者に打扮せて、彼の向日の町へと出向はせた。

恁く一方には手當をして、内藏助は自個も此の間隙にと山科の家を出たのである。其の目指すところは三平が宅。彼は一面には三平が負傷を看、一面には其れに慰藉を與へ、猶今一つは、萬一今宵にも軍右衛門の來ることあらば、我が隱匿の山科に來れとの義を彼して言せんとの心巧で。更に其の金子をさへ用意した。便ち彼の鵜竿を逸れた禽を透さず此巧で取て占んとの結構。

「此で爲損ずりや、はゝ天命じや。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

三平は單獨り、病牀――とは云ふも破蒲團に寢筵を敷いた淺ましの其の床の上に、泣み、悲み、身を悶へて呻唸てゐる。處は醜齷走せ戻つたのは母親、

「三どの、如何じや？」

と、未だ燈火も附け ぬ闇黑を透視して、籔蚊の呻る納戸から行燈を引出して、火を點して、病人の枕元へ漸やく座つて、初めて汗を拭く、

「留守に用事も無つたかの。――父樣は？」

「母者かの。」　と三平は縱に寢反りをして、其の協はぬ手で此は涙を拭く。――道理とは思ひながらも見れば樣子が變なので、

「父樣はの？――未だ戻らしやれぬかの。」

「其の父樣は喃う……。」

「未だ寄合か。」

「いや戻りは戻らしやれたが、此方も輕も見えぬのを那樣したかと、あゝ氣短で訊問しやれて……。」

「おゝ訊問しやれて、――其から何う？」

「俺が何事も言ぬので、悶懊しがッて、背戸の六藏に……。」

「むゝあゝの六に？其で六どのは？」

「甚麼やら身賣の事知られた樣子で、怒り猛つて、今し方出て行かしやれたが……。」

「やア出て行れた？――ちやから其方に、母は男山樣（八幡）へ御參詣に、輕は醫者樣へ藥劑取りにと云ふて置けと那程言うたじやに！」

「ちやが私も……。」　と彼は枕に額を當てる。哀れ正直の三平が心としては、父を欺惘くは大罪（には相違は無いが）、如何な母妹の依囑でも其のみは、と思つたらしい。既に六藏に聞たとあれば最う隱れは無い。何しろ駕は來る、女衒は來る、母子兄妹有る限りの愁歎を盡して出たのであるから、苟くも目有る者、耳有る者は其事と猜して、什麼に物の有るまじき樣に嘲つたか、罵つたか。然らでも那の口の疾い六藏、親父樣に問れたら油紙に火の着く程に饒舌りくさつて、沸る腦袋に薪を添へたに違ひない。はて困却た――とは云ふものゝ、此事が何時まで匿み切れるものでも無し、又た隱し課せる氣も無いの

であるから、先づ其は其れ。殊に行先までは知られぬで有らうから大概今に。然したら事由を。——此方は又た其の歸宅らぬ留守中を倖ひとして、是非に此人に言ねば叶らぬ筋がある。と母親は屹と温茶を一口。やほらと云ふ風に帶の間から取り出したのが金包。其れを三平が眼前にづしりと置て、

「三との、こりや輕の身代金じや。——五十兩ある。」

三平は聞くなり胸に釘！二目とは得う見られぬのである。不覺の涙とでも謂ふのであらうが、胸先から堰上げて、眼睫に溢れて、男泣に歔欷くると。母親は彌身を我が傍へ、表裏にも氣を配つて、

「三との悲いか？——母も悲い。輕も定めて。——ぢやが那女は其方も見たであろ、泣きは泣いたが、否とも云はず、笑顔で行きました。こりや甚麼じや。其方の爲め。——那の豺犬に、其方を敵討の惡事なとする謀叛人じやと罵せたく無い。此から完全うな人間になつて、私共にも苦勞を爲せたう無いといふ、其故の身賣と云ふじやぞよ。」

三平は吃驚いた、頓に返辭もならぬと云ふので徒其の面色をのみ注視ると。母は飲殘しの茶を再た飲むで、

「輕が心に愛じても、其方改心せにや爲らぬのじやが。——什麼？——改心さしやらう喃。」

（十三）

言つても〳〵三平の返答が無いので母親は焦れ出した、

「ぢや此方は、到底も改心お爲らぬ喃？」

改心とは？改心とは！曩刻から改心々々と二度も三度も詰責めらるゝが、御恩の殿の冥執を晴す仇討と云ふのが、其の改心と云はるゝ迄の惡事であるか。什麼に農家に世を過せばとて御身も萱野といふ鄕士の妻、三平といふ武士の子まで持たるゝ身が、餘りと云へば道理に暗い。——と說破るべき理、解喩すべき方は幾許もあるなれと。其義を今爭論うと自然聲言も粗大くなる。他人に聞かれる虞れもある。其れよりも其の行掛りでは、赤穗を退た以來、今日迄の同盟の經緯をも明かさねば叶らぬ場合とも爲る。此れは到底が克らぬ話。と取つ舍つに彼は餘義なく無言て居ると。

「發揮り答つしやい！」

屹と詰寄られる。我母ながら惜け無さの度が最う通り過ぎて、勿體ないが腹も立つので、

「私が軀體は何卒私委せ、——放下しやれて。」

と、聞くが否な母親は顫へ上つた、

「ナニ私委せ？　私委せ！」

臥てゐる我兒の胸逆をも執り難ぬ擬勢であつたが、

「よッ好うまア其樣な言云はれた義理じや唷う。」

と睨着けて。呼吸を凝めて。唾を呑むで。旋て多時して冷焉なること氷にも似たるが語氣で、恁う言ひ出した、

「……あゝも甚麽も言ひませぬ。——成る程其方は獨自で成長う爲らしやれたじやの。母の腹から產るなり飯も喰はしやれたじやの。母が手鹽たら何にも懸けぬ。其れで「私委せ」？好う聞えた！

爲たが三平。其義ならば最う此家に一時も置く事は出來ませぬ。去で下され。——其の吉良殿とやらのお首狙うて、他人に謀叛人じやの、繩附じやのと罵るゝ樣な可怖い人、片刻も此家に置くこと叶りませぬ。——此方は完全うな百姓じや。其樣な惡人の宿は爲ぬでの、——疾々と退去で！」

母は有合ふ煙管を押取つて疊を叩いた。目には見えぬが、塵埃と一所に蚊も起つた。

三平は、此前から協はぬ軀を顫々起して手を衝いて居たのが、此時がくりと倒れるのを、あゝやと扶け起さうと爲た母は、氣强くも又た猝に其手を退いて、

「去ぬか。さア！　ぬ主去ぬなら私が去ぬ樣にして去して遣る。　代官所じや！あの軍右とやら待ずに母から訴人する!!」

とは、驚愕いた三平、

「滅相な母者!!」

「えい母者など！子でも無い其方が甚麽で母者のじや。」

再た睨着けたが、其の冷かであるべき眼からは看る〳〵熱涙がぱら〳〵零る。隨つて其聲音も高くなるので三平は唯顰々と、あゝ最う是非ないと云ふ覺悟の體で、

「謝つた。私惡かつた。改心しまする！」

其れでも母は氣を容さぬこと、泥濘を窺ふ鶯の氣色で、

「彌然樣なら證據の見せなされ！」

「證據じやて？」

「おゝ證據。其方解らぬなら母が云ふ。——今後弗り山科へ足踏せぬ事。何方へなりとも

早ふ主取爲やる事。嫁女を娶ふ事。――當面いては其事。それ――誓文爲やれ。」

「……。」

「出來ぬか喃？」　と又た目は晃乎！

「爲ぬじやござらぬが、父樣とも……。」

「不可ん〳〵。」と首掉を掉つて、

「父樣は大石殿信仰じや。此中も云た事じやが嫁も奉公も叶らんと言はしやれる。地體其方と父樣とは同腹で――其ちやから喃う……。」

と、此から大いに平生の愚痴。――自個を他人遇ひに爲る事から、萬事に隱密立をして見せる氣不味い事から、其では親としても親の詮が無い、一體お前が生實は、と三平が虫持であつた事、柳谷の觀音へ七參詣した事、或る時は三日三夜も不眠不食に看護した事、其者が生來二十三年の來歷を母は片端から詳細に列擧て、母は此程に苦勞もし心配も爲てゐるのに息子の其方は孝行らしい所爲も爲て呉れぬ恨み辛みの散々を演べ立て。一面には人情、一面には代官所といふ法律を杠械に、是非に此の惡事たる復讐の企圖を思ひ止つて貰はねばならぬ次第順序を說き了せ樣とする其の喞言の半分であつた。

門口から提灯炬火、彼の多辯の六藏を先に、庄屋を後に、鄙等男も五六人、

「やアお婆、大事じや〳〵。母子喧嘩どころじや無い、爺樣が那の上鳥羽の塔森でな……。」

母親はあッと其處へ、三平も轉がる樣に出た。

（十四）

「三平、お在やるか。」

と、大石は門口から音訪れた。二度三度案內したが返辭が無いので。扨は寢てか。と奥を覗くと、其處は眞闇！

「はて？」と小首を傾げて、

「三平。――參つたが……。」

內藏助と聞かば蹙者でも飛で出ねば叶ぬ理由の此家が、何うしたのか依然閑寂闇！

什麼に田舍の暢氣とは云へ、もう是れ夜の四時ともあるに、燈火も點さず、雨戶も閉てず、人氣勢とては微塵も無い樣子。盜賊の虞れもあらう。其れが無くても三平は負傷に惱んで居るでは無いか。看護の人さへ無いと云ふは？――いや待て、家が違うたか不知ぬ。と內

藏助は軀を退うと爲る。途端に鼻へ。

「む、異な臭氣！」

異しや此の臭氣は確に血臭！萬一、と彼は手快く用意の燧袋を取り出して、早附木に火を點じて、

看ると、喫驚いた。其邊一面は韓紅の、行燈も打倒れてゐる其傍に、傾向に咽喉を突貫いたは紛れも無き萱野三平！

「呀！」　と大石は一歩を退つたが、直地に其火を忍提灯の蠟燭に移して。呼吸やある、と窺つたが、既う縛切れて脈も無い。

「遺書は？」

其物が大事である。若やと傍邊を看回すと。果せる哉佛壇の上に、認り書せる「大石内藏助殿、萱野三平」

大石は我知らず震へ上つた、

「此體じや！あゝ、三平若氣とは云ひながら！」

急ぎ懷裏へ確かと納める。其歩を再び死骸の枕元へ運ばして、一遍の佛名をといふ其時で

あつた。

「三どの――!!」

と駈込むで來た老婆の聲！其後から、「婆、然う氣逆上しやッては息子も困る。那者病人じや。」と喘ぎ〳〵追うのは庄屋と六藏。此に續くは野等男で、其の肩にせる畚の中には可憫、可哀、七郎兵衛が無慘の死骸！内藏助は甚麼かは無しに突胸を衝いた。あゝ惡い折である、此の場合、我が居ては遁れぬ聯繫。此の聯繫は我が爲に極めて面白からぬ者。寧ろ逃避んか。――と迄に思つたが。逃避て追れもせば其れこそ一大事。是非なし、我が見えたる進退を明々地にして。と覺悟の胸も未だ決るか定らぬに、「三どの――」は來た。什麼に逆上て居ても尙ほ正氣の幾分かは存る母親が、看ると眼前に立派な武士。瀆と吃驚いた其眼を卽て轉ずるかと見るが否な、彼は、

「わゝッ!!」　と駈寄つて、息子の亡屍に靠と縋つて、唯だ身を悶えた。

庄屋と六藏は此の大變。然も親父と息子との重ねぐに顚動して、其邊ら狼狽と。

唯見る中に勃乎と起つたは母親で、

「三どの、返せ！」　と内藏助に武者振り附いた。

喫驚いたらう。内藏助のみならで此は誰とて驚愕く理である。眞白の髪を逆立つまでに振亂して、眼を血逝らして、其形宛然鬼女の如きが、大石が袖を無手と掴むで、

「這なひッ殺人犯！父様ばかりか、三、三どのまで、甚麽じやとて殺しをッたぞい！」

無理も無けれど、母は到頭、其の本心を喪了したのである。處置には窮るも、猶其の心事を不憫やと見る内藏助が面を屹と凝視て、

「汝は何處の何奴じやい！」

「お丶、俺もの、お主等が留守の不慮の場所へ來合せての。――ぢやが三平は他手で無い、自殺なのは那の咽吭の刀で知る丶。お主、熟う視て、熟う心を落着けての。

あ丶其處にござる衆や、俺は山科の西野山に居る赤穗浪人の大石と云ふ者じや。卽ち三平が同家中のもの。――孰れ檢視もでざらうがの、其節は參り合せの證人として何時でも出まするぞ。就ては此の婆殿じや……。」

言ふを聞くなり母は其拔齒を破れよと咬んで、什麽なる雷の鳴るらむにも此放さじと樣に此方の腕へ執着いた、

「お、汝が大石かッ！よッ好うも〳〵、お汝は喃う。此方の三どのに敵討たら勸めて置い

て、輕々で賣らして、五、五十兩の金奪つて、それでも不足いで、こ這樣に慘たらしう殺したな！此な惡人！　畜生！　人非人!!

え丶皆の衆や、此、此奴早う縛つて！爺樣と三が仇敵じや。――え丶〳〵聞えた、三が敵討否じやと云ふで殺したじや喃！――や、然樣じや、確に然樣じや！

這奴は敵討の張本じや、よう！敵討――吉良樣とやらの首狙う敵討の張本じや。――何にも知らぬ三どのをも其夥伴に引込んで。其で母が嫁貰へと云ふても否じやと云はさせた。――此方は。知ぬか。好え嫁女娶うて孫の顏見て、掛り兒の三どのに孝行して貰うを樂みにして居たものを。敵討にして！謀叛人にして！――縄附にして！――庄屋樣や、早う此惡黨縛つて、代官所へ突出して、訴人して下され喃う！」

泣く、問える、小突く！半ばは正氣、半ばは狂亂の、敵討々々と叫き立てる母親の口もであるが。其度に魂消た庄屋のかゝ〳〵視る目と。怪訝む六藏等の彝立つる耳に。然しもの内藏助も、背は汗の一石五斗！

（十五）

老婆の發狂！此には大石も手の着け樣が無いのである。一時放置ば其れ丈けの身の大事を

叫喚かれる、目今の施すべき手段と云つては、彼は同家中の三平が母親、故傍輩たる好誼を以て其の便り無い身を引取つて、看護をして遣る。――先づは其名義で我家に召伴れて、其の以上は又た其の臨機の處置！と恁う疾くも意を決した内藏助は、庄屋にも六藏等にも理由を告げて、一挺の駕を雇はして、地獄踏む狂婆を寄て多集て中へ押込むで、上からは麻繩。夜中を幸ひ直さま山科の隱捿へ伴れ込せたが。其の途中でも現心ない老婆は大聲を擧げて、

「人殺し！盜兒！畜生！吉良樣の御首を狙う敵討人！三平を返せ！爺樣を生して復せ……

……！」

眞實に遣る瀬が無い！蓋し内藏助も此れ程手甲摺た事は無いのであらう。

此さへあるに、猶其の不幸を大石が躬に重累たと云ふのは老爺の七郎兵衛が上鳥羽の塔森で殺された其の一埒。便ち同所の横死といふのは彼れ七郎兵衛一人のみならで、他にも四人の死骸がある。何れも他殺。然も其の四人の中の一人は、今朝三平が宅へ來て暴猛てゐたる軍右衛門とか云ふ赤穗の家來で。猶他の一人は、以前京都の淺野家が留守居屋敷に居た灰方藤兵衛、其者に面體恰好が似てゐるとの看識人も出た。此で檢屍は故無く濟むだが、

跡の穿議は極めて難かしい。何爲よ自殺した三平も赤穗浪人、殺された者共も赤穗浪人、其の三平が母親に罵詈れて餘義なく當人を引取つたと云ふも、同じ赤穗の以前は家老の大石内藏助。殊には彼の場に居合せた庄屋並に六藏初めの口書に據れば、狂女とも云へ、老婆が口頭から、殺人犯、謀叛人、敵討者、吉良殿の御首を狙う！と迄も確かに言つたとある。言ふにも及ばぬ此の三月の殿中の騷動、引續いて赤穗の滅却、一方には吉良の存命、此は自然ら敵討も、首を狙うも、然有りさうな義であつて、――就ては此等の六人の横死と、一人の發狂と、其の大石が身上とには、尋常ならぬ深い關繫が、

「こりや無くては協らぬわへ。」

と、當時の伏見奉行大久保信濃守の手を當てた胸裏に、非と泛むだ。

大體に於ては此の奉行の鑒察は頗ぶる其の正鵠を得たもので。實に彼れ軍右衛門等四個の惡徒は、岡島潮田、四人の壯士が見懲めの爲に僞れたのである。此に其の行立を簡短に說けば。此日、七郎兵衛は村の寄合から歸つて來ると、居る理の女房も娘も、病人一個の三平を轉がして置て影も見せぬ。固で疑惑つた。猜疑つて糺問したが要領を得ぬので六藏に問いた。深くは解らぬが、娘やんは爲で、婆樣は附添うて、女街めいた和船も一所に出て

行だと云ふので。扨は那の金の事。的切り身賣！志は兎も角もあれ、父にも知せず、瓶光朝臣何十代かの連綿たる萱野の家名に汚泥を塗抹る汝やれ曲者。其儘には、と猛身上つて飛び出したが、扨て當處は知れぬ。京に島原、祇園新地、北野に七軒、鍛の下。近い伏見にも墨染、撞木町の數ヶ所がある。雲を掴むか風を捉へるか、流れの身といふ行方も知らぬ捜し物ではあるが、其でもと先づ歩を向けたは、花の都の花所といふ祇園街衢。駕やある、婆や居る、娘や見ゆる、と眼を皿にしたが、爛鍋ほどの手掛りも無いので。此上は足を摺古木にと、北野を廻つて、島原を捜して、其處にも居ぬので、是から伏見をと上鳥羽の暇道を塔森へ掛つた頃は既や夜の五時半。

ふうい〳〵親爺どのと呼ぶ聲がする。何者ぞと見れば其處に族鳥の罟を張て待つ知き姦盜が四人！煙草の料にかちら〳〵と燃やす焚火の影に透して視れば、今呼んだのは、今朝足蹴にされた口惜さの未だ骨身に沁みて忘られも爲ぬ可憎い奴の軍右衛門「やァ汝、夜働まで爲をるのか！」「然う云ふのは親爺じやな。面見られたら百年目じや憑悟しろ！」彈刀と山刀とは切結ばれたが、多勢に無勢、壯手と年老。いかに心は彌猛でも身は毎度い ふ年の上の腰折弓、七郎兵衛は既う受太刀になつてだら〳〵。——恁る處へ來合せた

のが彼の主税を初め四人の士。見ると一群の豪盜が一人の老夫を切り窘むで各々血刀を拭つて居る處。大事の役目を抱へた身でも、然りとては看過し難き此場の爲體。と猶看ると、個は什麼で其奴等は彼の安井藤井灰方と大野の四個である。僥倖の出會と此方は三方から押取り圍む。捕へられては彼等も首の慣れがあるから窮鼠の勢で必死と防禦ぐ。「えゝ面倒い。斬れ！」「おゝ遁しちや成らんぞ！」

看る間に安井等はばた〳〵と、誰が切たか、誰に斬れたか亂戰の對手も判らず、倒れる血煙に焚火も滅えて跡は眞の闇。少時して恐ろしい夢から醒めたが未だ戰慄の止ぬ樣な蛙の聲が、ぐわた〳〵〳〵。かた〳〵〳〵。

嗟、內藏助が折角に衞に衞を盡くした害物利用策も、休矣。こゝに到つて水の泡！其も水漏の消て迹無くなりにけりなら尙可であるが、其の餘害が後に遺存て、慨の杭の拔指もならぬ境遇とも爲らねば宜いが。とは此の始末を聞かされた時の大石の胸中。抑も奇巧を弄ばむと爲る者は奇禍に罹る。其語を憶ふと彼か前途の危難と云ふも、多少は我と自ら求めた氣味も有る。

其は措きて、其の翌々日である。伏見撞木町の揚屋、笹屋が方へ、當地奉行所からの差紙

が附いた。其れは、其方召抱の遊女、輕事、浮橋を召連れ、五人組同進、明日罷り出づべき事。

（十六）

お輕は伏見の奉行所に呼出された。彼女はもう七郎兵衛娘の輕では無い、撞木町の笹屋が抱女の浮橋である。嗟、源氏名の夢の浮橋！彼女は一昨々日、迎への駕に乘せられてからは全然唯だ夢。途中も夢、連込れたも夢、母や兄に訣別れたも夢、今日の召喚も勿論夢のやうな意でゐるが、然もまだ〳〵最と恐ろしい悲しい惡夢が彼女の影身に添うて居る。けれども抱主の清左衛門、其樣も變事を迂濶と奉公人に言うて聞せる、商賣に抜目のある男で無いから、哀れや彼女は親兄の命日も、母の病氣も、實際に夢にも知らぬ。今に田地の質入でもして、金持つて迎へに來て呉れる事と、夢の樣な的事を現に畫いて、其の夢話の正夢になるのを待つのである。

「親方さん、今日の御吟味は何事でござんしよな？」

「さあ、何じや不知んが、汝身に罪は無し、懸念に及ばぬが。唯だ其の御席で何事問しやれても知ぬと云へよ。言うたりや大事じやぞ。度苛い事になる。私も其方も難義しますぞ。」

彼が「御席」といふ其の場所は、當時の「内白洲」と云ふのであつた。内白洲とは云ふも坪の内は白砂を敷き詰て、突棒刺叉袖搦、彼方には番手桶、此方には桿棒捕繩。牢獄を地獄の一丁目と云ふなら、表白洲（罪人糺彈の）は其の棒端で此處は其の間の宿とも云ふべきもの、兎に角鬼と云ふ冷酷の氣は漫ろ人の肌膚に逼つて、寒からざるも猶其骨に砭りする。呼込人一同は戰兢たる呼吸を凝めて控えて居ると。

「山城の國乙訓郡御代官料山崎村、亡七郎兵衛娘輕事。當時伏見撞木町清左衛門抱、浮橋、——其外附添の者一同——！」

此の呼上を聞いて何れもは平伏する。即て「面を揚ろ。揚ろ。」と云ふ突這の役人が指圖に任せて、輕の浮橋は高島田の頭を恐る〳〵擡ぐると、縁の端近く座を占められたのが奉行の大久保信濃守、

「こりや、浮橋とは其方か。」

「はい。」

「其方も定めて存知であらうが、一昨々日の夜、其方が親七郎兵衛事、上鳥羽の曖道塔森に於いて殺害せられた事……。」

「えい？」

「……同夜、山崎の自宅において兄三平の自殺した事……。」

「えッ、兄様も!!」

と、輕は惘然て目を凝視て居たが、

「御、御奉行様！そりや眞實の事？」

「ナニ不知ぬと申す……？」

「えッえゝ眞實の事？」

場所をも忘れて乘し上つた輕、旋てわッとの聲立てゝ直鹿子の帷子の袖を顏に當てたかと思ふと其儘、白洲の砂利にばッたりと！

「や、こゝりや氣絕！介抱せい。」

驚愕いたは奉行の信州ばかりでは無い、役人一同。就中抱主の清左衛門は大金を費けた彼女の事、倘や此儘か、と狼狽て引起て、

「こりや浮橋のう！死では成らんぞ。——死で呉るゝな！」

醫師は駈着ける、手當を爲る。兎に角此處ではと云ふので控溜へ下げさせる。落花狼籍、

珍事重要、わッと云ふ騷動の中から氣も氣であらぬ清左衛門は退り掛けると。全般の情態をぢろ〳〵と睨廻して居られた信州、

「清左衛門、待て。」

「へえ。」

「こりや其方は輕事浮橋に、其の父兄の變事と云ふを知さんじやッた喃。」

「へえ。」　と彼は恐縮る。

「心懸の惡い奴じやな。豫た奉行所からの達を什麼と心得居る。其方等抱へ遊女たる者は皆不幸の女輩じや。好う傷はり取らせ。殊に父兄の手許をば離れ居るもの、其の死亡、病氣、宿元の吉凶萬端、諸事につきて會得させ。又た其の喪中、命日等には佛事供養、墓參等の暇をも取らせと申し達し置たるに。此は一人ならず二人まで。然も其の母親すらも右にて重病じやと申すをも申し聞せず。唯今の吟味に到りて彼義、初めて承知いたしたと見える彼の態じや。——甚麼と心得る？」

「恐れ入りまする。——彼てと召抱へましたるも漸く昨今の義で……。」

「其の申し譯が當所で立つか。——又た伏見切ての那の評判を、其方聞知らぬと申すのか。

――こりや山崎の村役人共からはな、現に其方かたへ通知の使差出したとも申し立て居るじやぞよ！』

「はッ……。」

「追て處分を申し附うが。――先づ下れ！やあ、山科西野山村住居の大石内藏助。――呼出しませい。」

驚いた。大石も今日此の役所に召喚されて來て居るのである。其の彼への訊問は果然甚麼か。

（十七）

下座の呼込について大石は、奉行所の白洲に入つたのである。

以前は赤穗の國老でも、今は一介の浪人者たる内藏助、落縁をも免されず、白砂の敷莚の上に平伏すると。奉行の信州は目を斜にして、先づ彼が容體から鑑定を下さうと爲た。

成る程、聞きしに優る風采。背は抜群と云ふ程には無けれども矮小からず、面の肉着豐かにして、眉は濃く、鬚は厚く、隆準、巨口、長耳、方頤。額上に畫ける一文字の王號さへ自然ら大度量あるべき偉相を表現して。殊には其眼、是れが又た形容にも餘る程なる威嚴

と、智慮と、寛大と、德望とを其の視注の端に暗示して居る。何さま這者、大太なる曲者！傳へ聞く慶安の昔の正雪とは恁る男兒か。此眼に睨まれ、其手に采幣を把られなば當今の天下とても、況て那の上野が首抔と。――と、心太だ平易からざる信州は、當面いたる此の吟味をも、好うせずば？と其の腹案といふのを窃に凝らされた。

「内藏、其方が身上については信濃一々承知して居る。――不慮の義とも、――愁傷は然こそで有らう喃。」

此が吟味の前提である。「一々承知」とは大石が身に取ての可忌な口狀。なれど彼は例の然り氣なく、

「辱けなき御意。――唯々一時は、當惑仕つり居りましてござりまする。」

「然も有らう。――其の當惑の中にも、這回の義に就いては、別して迷惑致したらう喃。」

「迷惑と御沙汰でざりまずるのは、今日御調の、三平切腹の義にでざりまするか。」

「然ればじや。其の切腹の義もで有るがの。猶其れよりは彼が母親の狂病じや。――有らぬ事を口走るので、其方、嘸ぞ迷惑を致したであらうと察するじや。」

信州はぢろりと視た。此方では「はゝあ一」と思つた。

内藏助を孫て此の奉行の大久保をば煙たい者に思つて居た。何しろ德川家輔佐の謀臣大久保相州（忠隣）からは四代の曾孫、其の先祖の智勇の血統は此人にも及むで、今年は六十餘の老功の古剛者、一條索の繫ぐべからざる口强馬とは聞知りもし、看知りもして、此の事件に附いての吟味の席は、要有る物よとは覺悟は爲て居たものゝ、果然爾うである。此人、彌那の事件から其の經路を引いて、予が胸中の秘を探つて、爾後の處置は什麼さるゝかは知らぬが、兎に角手當をする料見とは看て取られる。抑も此の伏見を初めて、京都、大阪、奈良、堺、其からして江戸！此の諸向が一致して我が運動を妨害ぐと爲ると、此は天下を敵手と爲ての事業、非常な難義な件と爲る。其の難義な件に爲るも爲ぬも唯だ此の吟味の應答一つにあるのだが。此は豫想うたより餘程至難しい的になつて來た！

但し、此の奉行の恁く明言からには、老母が那の口走は勿論の事、軍右めが强求も、三平が切腹の事情も、輕女が身賣も、七郎兵衛が横死。——殊に寄りなば安井等四人を討て棄てたる其の下手人の我黨の壯士に出てゐる事をも、或は調査濟に爲つて居るかも知れぬ。然あらば拙劣き匿し立なと、勿論のこと。或る度合までは其人の心裏に鎖入つて、我が言語に信を置かする、其の駈引が肝要であるも知れぬ。と此が大石の咄嗟の分別。

因で、餘義な氣な眉を顰めて、

「御耳に入りましては近頃恐縮にござりまする。——如何にも那の老母、不思議の義をのみ申し觸れまして。——然りながら右は悴の三平とも、寢物語にでも申し聞せましたる赤穗の義を、風と存じ出してかと推察の致し居りまする。」

「ひゝ、然樣の義が、以前有たか喃。」

「然ればで。彼地退去の砌り、家中血氣の者。籠城、殉死、又は怪しからぬ仇討抔と、四五十人は寄り集りましたる樣にも聞及び居りまする。察するに三平も其群の一人。で、物の話の序に右樣の事語り聞けましたるが彼れ老母の端なく耳底に遺存り居りまして……。」

「何さま其でか喃。てりや狂人には有る例じや。が、扨て其の老母を引取りたる其方が料見。——右は如何樣な勘辨じや喃。」

「別義とてござりませぬ。其は當時彼の村役の向にも申し出で置きましたる彼れ三平は同家中の者にござります。又た當地移轉の後も、彼は山崎、私は山科、近間の義にもござりますれば別して親しく出入も致させ置きましたる者。其者があゝ自害。父の七郎兵衛も同夜の最期。一人の娘を手許に居りませず。私にても看護して遣はしませねば、看す〳〵の

看殺しと風と存じ附ましたる唯だ一片の義理。」

「義理？――相解つた。――但し、其際、其方右の引取り方を、殊の外取り急いだけにも聞き及ぶが。――本來ならば翌日をも待ち、娘輕にも一應右の趣を申し通じて、其の納得をも得。扨て後に伴れ參ると云ふが當然の理由とも思ふが喃。――殊に夜道の物騒は、當夜の七郎兵衛も眼前の事。前夜も、甚麽か、三平が、其方宅から戻り掛に不慮の災難にも遇つたと申す。――其邊の心得は什麽とじや喃。」

（十八）

奉行の大久保は何事も探知てござるのだ。然も此問は所謂る眞綿で首といふ皮肉な的。ではあるが大石の胸裏には、寧ろ是れ當然の者であらうと、倒々危惧も遠斥いて來た如くに感せられて、

「恐ながら物騒の夜道と申しますれば、多寡が盗賊。又た娘輕とかも、承はれば出入不如意の身上とかにござります。――勿論、其等の心附は後々の事。唯だ當座分別は、かゝる混雜の中に置きましては本人の治療、其は固よりの事。人々の迷惑、父子が亡屍の葬埋も叶りませぬ始末と勘考いたしましたる故の義で。」

「むゝ、如何にも。」　と、信州は輕く首肯れた後の語調を又た急に變へて、

「然て、三平が切腹は？」

「はッ。」　と云つたが内藏助は、此に就けても好くも〳〵、彼の際に那の遺書といふのを逸早く我手に納めた事、と彼は心で忙しく其胸を撫たのである。那の書物が在られて見るが好い、此の訊問を受けても喝とも云へぬ。卽ち書中には臟臟ながらも身の大望の概略は載せてある。此の奉行の慧眼で其を睨まれたら其限り！但し目下は、不憫ではあるが死人に口無し、甚麽と訊れたとても無證據の言脫次第と、

「一向に、仔細、心得ませぬな。――或は發狂かと？」

「前夜、其方から五十兩の金子を借り受けた、――其の歸宅る路次にて右を彼は盗賊に奪はれた、――と、其の近隣の者は申すじやが。事實然樣か。」

「如何にも、五十兩の金子、貸し與へましてござりまする。」

「其の金の用途は、――聞たであらうな？」

聞かぬとは云へぬから大石も、

「承はりましてござります。」

「何と申した？」

「彼れ三平の申さするに。今朝故傍輩の大野軍右衛門事、不意に押掛けて思ひも寄らぬ難題の義を申し掛けまする。其は前申し上げましたる在赤穂中、籠城、殉死、仇討など申し騒ぎましたる時分の義を執柄に致して、山科の大石を發頭にして唯今でも復讐の企圖をすると聞く、此事代官所へ訴人に及ぶ、若し夫れ其義を難義に思はば五十兩の金子を出せ、然らば内分の、他言すまじいとの趣にござります。此義如何と三平申すに附きまして。其は以ての外な、貴方等こそ然る評議も爲たであらうが我等に於ては毛頭知らぬ事、寝耳に水！俚諺の痛うも然い腹を撈らるゝ、苛う迷惑な！然し然樣な義を世間に觸れられては、――あゝ此も時の災難、彼如き者に構うも無益。と私、餘義なく其の所望の五十兩金、三平に相渡して、後日の一札をとまで申し聞せましたる義にござります。其れが不憫や那の始末、一つは金子故にと存じますれば……。」　と大石は涙を拭く。

「愁傷も道理じやが、何も其方が身を果さしたと申すぞは無し。唯だ彼が不運なから。――其の不運な彼を救うた其方が義心は天晴じやが。――内藏――、其方が資財は餘程の額じやの？」

内藏助はやゝ伏目に、

「餘裕とてもござりませねど……。」

「いや然樣で無い。――其方、赤穂立退の節は、我が取るべき庫金をも悉皆分配して、結句は主家菩提寺へまで祠堂金も附けたと聞及ぶ。――勿論知行は千五百石、豫ての貯蓄と申すも有らうが喃、其にしても風説に聞けば當山科の田地山林、其も大分の義で、猶金子貸附なども致すと申す。――何さま然も無くては喃う、如何に身の迷惑に及べばとて五十兩と申す大金をの、直ぐ右から左りへ、――こりや然樣には叶らぬ義じや。右は手金かの。又た他所からも借受けたのか？」

酷い礼問！此には内藏助も驚とした。

何を隠さう、其金は皆某る所から出て居るのである。抑も此金を調達の爲には彼の苦心は實に言語に斷えたるもので、卽ち開城の始末を附けての後、彼は夜を日に續いで西方へと旅行した。扨て泣着ての艱くに得た其金をば、盗むが如くに利兵衛して其の運送を賄はせて、其内の幾分をば我が手許に、殘餘は猶も大坂の彼が土藏に、其も床下の土中に深く秘めさせて置くので有る。固より大望に使用ふ太切の金、一金たりとも此を出すは血の涙も

出る樣に感ふのであるが、背に腹は換られぬので、出して遣れば此の仕埒！剩さへ其か吟味の種と爲る。流石の大石も此時のみは眞實泣きたい迄に思つたが、

「いや異な御訊問で恥入りまする。浪人の生計無さ、母もござります、妻子もござります、其等に憂目を見せたうもござりませぬ計りの勘考で、不用の槍刀、武具馬具、茶器類など、はゝゝゝゝ賣拂ひましたる其金を資本にな……。」　と、彼は是非無くも笑つて見せた。

「むゝ、茶器類などは然も有らう。槍刀武具までとは聞取れぬぞ。其方、幼少の折でさへもが庭瀬の那の武功。――山鹿の秘藏弟子。――況て唯今の働き盛り！此上深うは申さぬが、予の支配地から天下御法度の徒黨人など出さぬ樣に賴むぞよ。――又た予が當所に居る內は、其方、致したいとて致させぬが喃。」

「は。」

「心得たか！」

內藏助は、此の返答には躊躇した。

（十九）

內藏助も此の返答には躊躇した。「心得たか」と公然に問はれて、「心得た」と明地に應ふれば、其は復讐の心事を自白したる理に爲る。奉行の信州一人であれば、一時の方便、其も亦た可なりであるが、傍邊には與力に同心、突這の者、呼込の者、自己が差添、其他にも何くれ彼くれと大勢の聽人は居る。此の許多の聽人に聞かれた後の結果は扨て什麼あらう歟で。其は言はざるも亦明白なるもの。卽ち、大石は吉良殿の御首を狙う者、徒黨を企圖る者となる。然らでだに用心嚴しき敵の構は彌其の堅固を增して、足踏も協らねば。我身の注目は益繁くて、一寸出も恒はぬ的となる。運動も當分中止！計畫も半ばは畫餅！噫、萬事休矣となる。然して爾う無つた以上の結局は什麼？我等父子は故殿へ分疏の爲の切腹！――嗟、犬死か!!

危惧の一念此に到ると、是れは奉行の不快を估つても、到底も此場は昏眩めて了はねば協らぬ境遇と。覺悟した大石、

「右には些と御請が叶り難ぬまするな。私義、然樣の企圖を計畫み居りまする者なれば格別の事。從前とても氣も無い義。――氣も無い義をば……以後謹慎むとは――御沙汰とは申せ何分にも。」　と手を揉むと。

「申されぬと歟。むゝ。――然し氣も無いとは餘りな申し樣。――主人が切腹をば無念と

も思はぬの歟！」

此の強き壓手の上を、此方は最う一層激甚く出た、

「右は唯だ自業自得果の横難。――政府に對して只管恐れ入り存じ居りまする。」

「では、敵手に怨恨は無い歟！」

「敵手と申しますれば政府御役人。其の方々に御恨みなど――此は到底が成りませぬ義で。其邊の料簡、手前心中、御推察の程を願ひまする。」

餘りに飜弄されたので信州も勃とした、

「むゝ。強て申さば此席に召喚す者がある。其者が口上熟う承はつて、其後に窪と返答いたせ。

やあ、輕事、浮橋を呼出しませい！」

輕？！大石も此には惝乎と來た。彼れ三平が那の遺書から見ると、平生宅にて如何なる秘密を彼等に言聞せて有たかも知れぬ。殊には老父も七郎兵衛でも有ることか、未だ廿才にも不足ぬ心無き女子の彼、奉行の權威で脅し着られて、白狀！と逼られなば一も二も無い。腐蝕むだ栗柿の實の大風に遇うたも同じ事、落るは知れて有る。落られたら事件！べらべら

ら饒舌る。饒舌られては駁擊もならぬ活た證據。あゝ瓢な證據。然も頗ぶる難義な證據。身上の大事とこそは成りにけり、はて？と窘苦むで、然しもの大石も其の處置に突胸を衝く。耳元には早や呼込の聲！地獄の鬼衆が苛責の叫號の身に迫り來る樣にも感えて。瓦落利と拔く戶、轟轟といふ鐵鎖の響、鐵繩もて綁げし淨玻璃の鏡の已に我が面前にも引出されたかと彼は覺えず回顧ると、

其は微妙の、萎れては居るが天人であつた。新梳の鬢の一筋二筋擾れたのを苔白き臉に戰がせて、涙を含める眼、憂を帶びたる口許といふが世にも哀れ氣に慘しくも見ゆるが、又た一方には其が、言ひ知らず艶に、媚かしくも、萬長くも有る。身には西陣紹の白重に、金銀の箔もて摺りし秋草の中模樣。誰が所好のか曩の直鹿子よりは其衣が此の愁容に相應しく、凄惋を助ける樣にも見えてゐる。

「輕、氣分は熟と快いかの。」

「はい。」

「然らば、先刻、訊ね殘した仔細を吟味るがの、秘まず白せよ。――父の七郎兵衛が横死はこりや盜賊の所業とあれば姑づ措くとして。兄の三平が自殺は、事故なくては叶らぬ義

じや。な。——其方、仔細を存じ居らう喃？」

誰が咳嗽いたか、此時一聲の咳拂が、彼女が耳底へ激甚く響いた。風と見ると、我が面前に控へて居るのは四十三四の、立派な武士。其の衣て居る帷子の紋所は、水淺黄を薄い菸に抜いた大形の二つ巴。阿呀!! と思つた。

二つ巴は彼の山科の大石殿の紋！ 扨は、彼の、あの秘話に聞く此人が内藏樣で、此の事件につき、今日此處に召喚されて御座るのだ。では彼の金子の事、軍右が叫つた事。おゝ可怖！此は容易に此所で口外は協ぬてと。と彼女は思はず猶豫うと。

「早く白へ。——有體に申し上げろ。——御吟味だ！」

と下座の突這者が左右から遮二無二迫ると。又同時に、「迂濶とは言ふな。言ふと大事じや。内藏殿初め我黨が身上じやぞ。不知ぬと言へ。言へ！」と誰やらかが激しく耳語く。其は不思議や、父樣兄樣が現在し世の聲音の樣でもある。

「什麼じや、仔細は？存じ居らうな。——其の五十兩の金子は、誰から借りた？」

「私は存じませぬ。」

「否や。其れは通らぬぞ。——其の五十兩は山科の大石方から借受けた、——其れ不知ぬ

とは無い理由じや。——又た其の金子の使用方——卽ち大野軍右衞門が口留に遣る、——其の口留とは、三平が右大石に一味して仇討を爲る。其義を大野に知れたから、露顯の恐れて内濟にする。——右内濟金を奪はれたから、其方が其の爲に身賣を爲た。——こりや、其等委皆當方には、探索が疾うに達いて居るぞ。其を同居の、其方が不知ぬとは有るまい義じや。

但し、其方は孝行女喃！兄が忠義の仇討を助成るとは天晴な心懸。褒め遣はすぞ。——就ては當方より褒美も取らせ、又た抱主へ、其方身爲に相成る樣沙汰も爲たいが、右仇討を助勢いたした其の事實が熟う分らねば其義も相叶らぬ。で、相訊ぬるじや。な。父兄の忠義を現はし、又た其身の孝行を世に見すは、此方政道の利益にもなり、別しては身の面目じや。な、遠慮すな。」

此語を、黙つて傍聽られる内藏助が肚裏、阿呀墜んず薄氷を涉つて、手もて拂へぬ我眉に火の着く思念！

（二十）

流石女子の淺薄で、輕は譽められて嬉しいのか、誑惑れて浮波と乘つたか、其れとも別に

思案でもあるのか、彼女は旋てに膝を進めて、

「御祭祠では御恥かしうございます。然たが兄様も平日から言はしやりました……。」

内藏助は最う絶體絶命、其の面色は什麼あつたか知ぬが、信州は得たりとの微笑で、

「むゝ、何と申した？」

「忠臣になりたい。忠義を爲たいと……。」

「其の忠義とは、仇討か？」

大石は既や呼吸さへ爲ぬ。傍邊の者も此の返答を如何と眼を睜張る。一座は森然とした。

「然樣かも知れませぬ。然し又た、然樣じや無いやら知れませぬ……。」

痴呆にした樣な返答。信州は言ひも果させず、

「發揮と申せ。——此處は白洲じやぞ！然樣かも知れぬとは何事を申すじや？」

「はい。兄樣は、——赤穗で合戰も爲やうと爲た。腹切て死のうとも爲た。其の覺悟が未だ有るから、此の以後も再度の主取は爲ぬと、常々言はしやつて……。」

「再度の主取せぬ。——其で仇討の意が有るかと云ふのじや喃。——むゝ、で、又た仇討の意が無いかとは？」

「軍右とやら云ふ人の見えた時でござんする。兄樣初め敵討の徒黨を組む。其れ代官所へ訴人すると云はしやれた時、兄樣は苛ら難義さしやれて、俺は如何でも好い、訴人されても其樣な意の無い心中の潔白見せうが、何知らぬ大石殿等が定めて迷惑さしやるであろ。廢止にせい。——恁う云ふたが。聞かしやれで。是非訴人する〳〵。——それで其果が五十兩の金子となりました。——はい。其りや私も母樣々傍で聞いてゞ。大概は背戸の六藏との抔も知てゞ有ろとも存じます。御訊問なされたりや……。」

事理は火の如し、此上糺問の爲樣も無いほど明白ではあるのだが、其代り又た肝腎の問題たる仇討事件は、一煙霧の中に包裹まれて了つたので。山鳴が爲た後から蚊が一疋出た！其樣な調子で、傍聽者も惘氣に取られた氣味。況て奉行の信州をやで、失望か、落膽か、感歎か。深く其の太息を漏らして、彼女が面を凝視て居た。

原來、信州の意衷と云ふは、決して此の復讐の企圖を、惡事——どゝろか、主持つたる身の忠義としても、又た武士の意地としても、然有るべき理由、然も無くては叶はぬ義理を、内々は其の同情をすら寄せて居らるゝ。ではあるが、唯だ大石の所作と云ふが、太甚だ其意を得ぬ。卽ち、法に過て居る、と云ふのが其の意見。我が考慮を以てすれば、彼播州を

立退いた後、浮世を隠れて、切て姓名を匿ひでゞも居て呉るればで有るのに、我が支配地の鼻の先なる然も山科に、浪宅とこそ云へ住居を構へて、赤穂浪人の標札こそ打たぬが、立派な冠木門の大石内蔵助！田地を買込むで、金銀を貸附けて、世を世、人を人とも思はぬ大瞻の振舞するが、憎くもあれば、笑止でもある。加之なら ず、紫野の大徳寺中瑞光院には、赤穂い華嶽寺の和尚で居た、此も一味の海首座とか云ふを轉住させて、其處には我黨の、奥野將監、進藤源四郎、小野寺十内、富森助右衛門、大高、岡島、潮田等との、十人に餘る配下を置いて、彼寺にある淺野家の位牌の法要といふに事托せては、密議を談る、大膽も玆に到れば其度を超逸て、不敵である。寧ろ無謀である。此にて仇家たる上野が方へ其の消息を知せまじとは、結句は狂人の沙汰。臭い物に蓋杯とは愚かの譬喩で、我眼から見れば、酒を盗飲で醉を秘すの痴呆の所爲にも等きもの。敢り眼を奉ずして、其歴とかあらう！況んや未だ其の證跡は擧らぬが、彼の塔森の大野灰方等四人の横殺は、或は彼が手からとも思はるゝ。若し夫れ果然其の下手人を彼等が夥伴の者とすれば、盗賊とも云へ人命を私するの曲者。既に辻斬、意趣斬の御法度の大悪をも犯せる奴。我が役義として其儘には棄措けぬ大罪人！――要するに諸般に就きて怨有る所業を專らとするは、其身等が

宿望を達し得ぬ禍媒と爲るのみならで、自ら好むで刑辟に躬を陷いるゝ愚擧。如是ては可哀し。卽ち武士の憐憫として我は笑止に思ふのであるから、或る裏面の意を暗示して。我方には其の探索が、恁く迄に屆き居るぞよ。我が在勤中は其方等が目下の狀態には、羽搏きも爲せぬぞよ。と一面には痛棒を與へて、一面には猶其の工夫を練せんとの、所謂る佛家の善巧方便。其の爲に此の輕まで引出したのであるが。扨て此の輕も、糺訊て見ると、亦た底意の不明ぬ女子よな。――可し〳〵、今些し鍛冶を施けて、此の男女が爲す所を傍から觀む。諸事は又た其の以上と。信州もなか〳〵意地曲惡ろき爺樣である、

「相解つた。彼の金子の事、又た彼が自殺、其方が身賣も好う分解た。可い〳〵。訊問も最う此れ迄じや。

扨て、内藏。三平が妹輕が口狀は右の通りじや。――其女が身賣――想へば不憫なもの。――兄が爲とは申せども、一つは其方等が不慮の難義を救はうと致したからの身賣じやぞ。其方、既に彼女が母親を引取つて世話いたす程の義とあれば、彼女をば別して餘所には看過れまい。仍て屹度なく申し附るが、篤々彼女が許を音訪れて、好う傷はり取らせ。――又た抱主清左衛門こと。其方が召使に對する心掛、甚だ公儀御法の面に相悖り居る。屹度

も申し附くべきなれとも、格別の憐愍を以て這回は先づ差許す。但し右過代として、輕事、浮橋義、此なる大石が外、他の客へは逢すこと相成らぬぞよ。此段嚴重に心得ろ。

一同、退れ！」

下

（一）

爾後の本所の吉良家の模樣は別に變つた事も無い。唯だ變つたのは、人出入の嚴格く爲つた事、何處やらかは知ぬが士の多勢く入込むだ事、急に屋敷の普請を始めた事、其等に過ぬので。外構は依然たる奥高家の吉良が門長屋。但し當主は變つて、今は武鑑に左兵衛殿の名が載せられてゐる。公用人は相變らずの松原佐仲。

佐仲は今隱居の上野殿が前に伺候した。

「唯今京都からの狀着にござります。――大分委細う認めてござります。」

「うむ、然樣か。」

と、上州は眼鏡を把てぽつ〳〵と其の密書を披見に及ばれる。此方の宛名は竹野右市。想

ふに此は松原佐仲が匿名でもあらうが、先方の大森源七とは、ハテ誰で有うか、未だ馴染も無い！

「むゝ大分に詳細いの。――此書で見ると大石奴、其の奉行所の白洲では此方に手指など爲ぬと申し張たと見ゆるじやの。――ぢやが什麼あらう、其の三平とかが切腹。――妹の身賣とやらは捨置いて。其の兄めが切腹はよ?!」

と面を視られる。眼には「懸念」といふ文字が歷々見ゆる。

「さア其義でござります。其の切腹が此書にも御座ります、彼の淺野用金を引攫うて逃失せた大野軍右に急迫れての義じやとか申し、又た其の金子は内藏助手から出たともござります。然すれば、此は何れ甚麼の仔細無うては叶ひませぬ、が、其處迄は彼れ源七も探り得ませぬと……。」

「然樣じやよ、探り得ぬとは齒痒いな。此れ程の顯著れた義を。――既に部下の者共も使役うて居る。大分の金子も月々出て居るに、其の急所までを得う突留ぬとは何事を爲て居るのじやらう？塔森とやらの人殺し、此も甚麼の緣由がありさうじやと計りの事で、其の緣由と云ふは無し。――唯だ此書では、市中街衢の風聞書だけの事じや喃。」

「如何にも然樣。――困りましたな。」　と彼は頭を抓く。

「困つたじや相濟んよ。苟初にも予が首を狙う其の曲者の又た彼等は間諜で無いか。――源七初め其方等も、主人の首じやと安心して居るらしいが、奴等、萬一襲覓けて見い。汝等も一命じやぞ。安閑として唯だ困つたで居る――其樣な場合かい！」

上州の氣が氣で無いも實に道理で、掛替の無い我首を狙うといふ奴が眼前にのそ〳〵して居る。其を探索に遣つた者が、又た思ふ程の動作をして與れぬ。聞き出して來た注進といふも詳細からぬと云ふでは無いが、其は皆表面、彼に巧圖の有りや無しやは都鳥では無いが、から白無地で、其で月々出る金銀の額は大した物！命に換る財寶は無しと念ふからこそ血の出る思も辛抱して居られるものゝ、噫、遣る瀬が無い。と腹の立つのは、强ち例もの我儘のみと言ふべからずだが、原因を糺せば、究竟身から出た錆の自業自得果。此の心配を失なされるのは、棺桶に身を潜めて、地の下へ埋られる、其他には先づ無いのである。

「寧そ羽州へでも參らうか？」

と、這同は愚痴である。

「羽州へ御出になりましたからとて依樣日本の内で御座ります。彼者等が襲らぬとも限り

ませぬのに、其の大石より可怖しい彼の大雪。殊には御路次が……。」

寒氣の難義は固よりであるが、其よりも猶危險いのは道中で。那須野が原か、板屋峠の切所といふので、一發と擊られゝば其迄だ。

「其も然うじやが！」

「石は用心さへ爲ますれば參りませぬ、雪は冬になれば必然來ます……。」

敵をも怖れ、寒をも怕れたら世の中に在る場所が無い。

「然たら、何うする？」

と今度は胄を脱れる。爰で佐仲は得たりと低聲、

「結句は石奴が肚裏を見ますする。な、其の肚裏を見る倔强の者と申すは彼の腹切た三平が妹、輕とか申す、此書にある伏見撓木町の笹屋が抱女の其の浮橋を手に入るゝに限ります。彼めを根引して此方へ伴れ參る。で、御傍へも置れましてな、朝夕に優しい御詞でも下されまする。――什麼た曲者とも申せ其處は女子の淺薄で、終には御意に絆されまして、彼めも眞實を打明けませう。――で、眞實大石め、仇討の處存が無くば重疊の事。倘し其口から、徒黨、との義も漏しましたりや、其りや一大事！公儀御手なり、又た羽州へ御賴囑

に爲りまして、此方より手を廻して、人知れず、喃。後腹の病ぬ樣に爲まする趣向は萬々、佐仲、仰せを承はれば諸事脱漏なく計ひまする。が、此の計略は？」

（二）

年は十九、生れは鴨川酒といふ京の膩膚、笹屋とか云ふ抱主が、昨日まで田に草摘つた日焦の手に、卒如に五十兩の大金を撮ませて吝まぬと云ふのを見れば、其の容貌の尋常ならぬのも知れてある。其女が我が伽、然も敵の機密を探る間諜の用に立つとは、口に苦からぬ良藥の保命丹、極めたる耳寄りの話ではあるが。扨て其の藥劑を手に入れる費用といふのが何程か。と此が臭吝の上州が胸に泛むだ懸念である。

「趣向は至極じやが、其迄の運びを附くる其の兵糧が喃……？」

毎もの出吝みを熟知て居るから、佐仲は内端に、

「三百金は費りませうか喃？」

「え？三百金？」

と呆れられたには佐仲も吃驚いた、

「三百金！――御意に召しませで？」

「三百金とは貴いじや無いか。身代は五十金じやろ。然も未だ一月とも經ぬ今日。其女が食雜用とて多寡の知れたもの。――てりや女子一人の日當は三合扶持じやぞ。――兩に白米は何程致すか。其義から割出して見い。」

味噌摺用人の松原佐仲も、米價からの落着相談とは流石從前耳にも熟れぬので、

「へい。」

「物には大抵相場がある。予が執り扱ふ茶器、書畫、刀劍の類にせい、折紙と云ふ目安が有る。遊女なりとて其の元仕入と雜用とで目安を立てたりや然樣な法外な價は嘘かぬ義理じやが。」

「然し御前にも、時々の御堀出物や、又た御手製の……御品にて格外の御利潤もござりまず。然れば元仕入ばかりとも……。」

「否や、彼は其の、――出格の義じや。標準にはならん！」　と、良心が疚いのか苦笑。

「では其は出格の義と致し置きまして。三百金で其の有用な女子が高價との御意でござりますると、憚りながら御前御身盤が其れ程の價値も無い樣に承はられます。此は勿體至極も無い義で、――不可有ぬ次第と存じまするが……。」

「ひゝ！」　と苦笑が些と赤面の氣味。

「此義に就きましては御入用など、暫く御沙汰をざりませぬのが御宜しいかと私共は存じます。下世話に申す命が物種、萬一の騒動などでざりましては此りや金銀抔の御穿議どころに御座りませぬ。ないやで羽州樣からも莫大の御金を御入も參ります。早く申すと唯今では、御當家と舊赤穗との取遣では無うて、彼方の御本家と羽州樣との御意地競にでざりますす。然すれば當方敗衂を取りますと、御當家のみの御瑕瑾では無く羽州樣の御笑れ草。其等の御意味を以ちまして御前樣にも御隱居との事。――結句は甚麽も其の御金を御手許からとは申しませぬ。羽州へ仰せ進せられで、其の御入用を召させられます。面倒も無い義。――一文吝みの百損！此は目下での大禁物。究竟此の三百金など、御武運長久、怨敵退散の御祈禱料にでざりますす……。」

此で上州も謝然と悟了て。成る程其れも然樣である、我が手許の虎兒を手放すでは無し、羽州の方へ言て遣れば幾許でもと云ふ鏃穴があるのに、其に蓋をして、用心嚴しき獨寢の闇の憂思ひ。想へば〳〵痴呆の骨頂。君を思ふ忠臣の諫を拒むは主の非德。有爲奴々々々と賞られたは猿も木から落る此の爺殿の手淨りで。落葉談に米相場を據ち出す程の上州も

主賄で上方見物をする彼が料見とは憶到れなんだ。

（三）

眞先には西野山村役場の提灯を持つた農男が二人と、後からは役羽織に裁附の袴を穿いた庄屋が一人、中間に介まれた着流し姿の卷羽織、寛濶出立の大盡めきたるは當年積つて四十の坂を三つ程越えたる彼の大石内藏助。彼は洒落でも浮氣でも無く、奉行の大久保が命令に據つて、村役人と同道、伏見の撞木町笹屋が抱女のお輕が浮橋の許へ通うのである。

抑も伏見の撞木町と云へば、遊所。遊所の笹屋と云へば、揚屋。揚屋の抱女と云へば、遊女であつて。其の遊女が許へ通うとなれば、縱令什麽なる辭を以てすとも當時で云ふ浮世狂ひ。其の狂ひ出す放蕩者と云ふのが、誰あらう分別の三十歳を十三年の昔に見た中爺の內藏助。前額の禿光に目眩ゆ氣もなく、鬢の白髮に臆面もなく、大手を振つて、緋繻子の單衣に紫の山形の襟附羽織、細身の双刀、夏足袋とは、原來此が本氣の沙汰か。其容で邊り出す玄關には、女房のお岸と悴の主稅が、御早うお歸宅をと送つて出る。式臺には村役の提灯がずらりと列むで、近ごろ御苦勞でざるとは、神武以來所謂る無い圖！然して其

れが奉行の嚴命と云ふに至つては唯呆れるより外無いのであるが、退いて熟く思へば、其の當時の政府なる者の威權と云ふが、什麼に社會の微細の點にまで干渉つて、民の行爲を支配し得たかと云ふことも想像られる。

年貢を納めて、地子を出して、青天白日、何村の某と名告れる良民ですらが然樣である。況んや「亡八」と云ひ、「惡所」と云ひ、「隱れ商賣」と世間に蔑視られて、商賣往來の品目以外の貨物を扱ふ彼れ揚屋方に於けるをやで、奉行の一嘘一吹は彼等が屋臺を土臺から吹飛ばして、柿色の暖簾を實際中空に吹散らす威力がある。だから彼等は地震雷火事の外に親父なる一種の匿稱を奉行に與へて、「御用」の二字をば天災の怖るべきよりも猶恐る可き的として、彼等は平日悚毛てゐる。

輕の浮橋は、今や其の恐るべき奉行所から預りの「御用遊女」で、內藏明の遊興は同一く「御用」の嫖遊と云ふのである。――御用の嫖遊！什麼に不思議の名稱なるよ。其の不思議の名稱は什麼に恐怖るべき實質を這裏に包含るよ。笹屋の男女は唯是れ其の粗忽あらせじに換言ふれば、其の後難あらせじに、戰兢として、習との風にも恂乎とすれば、簽との音にも動悸とする、主人の淸左は、度苛い女を背負せくさつた、女衒の才兵衛への苦惰すら高

くは言ひ得で、銚子の酒にも氣を配つて、琵籠の盛にも眼を皿にして、床の掛軸、置花瓶、庭は箒の代りに槌で掃き、店は暖簾を外して注繩を張り、「此で門松でも飾りやはッたりや、盆と正月とが一所に來たじや。」と妓夫の久助が陰で嗤ふのを、少婢の里が「でもお盆の棚經僧は來やへんわ。」「言ひ無い、座敷にや亡者が見えとるじや！」什麼にも亡者が此廓にては利潤にならぬ客を捉へて餓鬼亡者と罵ふ。何さま今日は店主が施餓鬼で、內藏助は其の亡者である。

亡者が餓鬼でも內藏助は平氣であらうが、地獄の苛責より苦艱い思は、不憫やな、輕！身分こそ中小性の輕輩ではあるが、兎に角士分の肩書を有つ菅野某が妹の彼女は、今は何者である。君傾城と與賤き者の限りに爲れる笹屋が抱女の其の遊女！然も逢ふ客にも事を缺いて、亡兄が故主の家老であつた大石內藏助！父兄の爲とは云へ、又た他に未だ肌身を容さぬ身の潔白を御存知とは云へ、此の醜態で其人の面前へ出される。

劒の山へ逐上げられるより、針の谷へ投込れるより、斬れるより、裂れるより、彼女は艱く、悲しく、情け無く、究竟は慚愧しく、苦惱しいので座敷には出た、挨拶は爲たが、入口に衝居るのみで。躊躇まる。胸は一杯、他目も無くば泣頽折れたい程の切無い心。

「輕どのか。這回は不思議な縁での。――其れで身も今宵來ました。」

言れても彼女は逡巡。

「今後は又た何かの世話を賴みます。――さ、遠慮も無いで、近う進みやれ。」

「誠に不調法者――御羞恥しう存じます。」

其語も口の内。其の改まつた爲體から甚麽から、何やら祝言の座敷の樣にも見えるので、内藏助は好笑くて、

「はゝ、此は倅の嫁女かの。はゝ先づ酒を持て。親附の盃、盃。はゝゝゝ。」

（四）

輕は飲めぬど、内藏助は何時となく重ぬる盃にほぎ〳〵と酔も廻つた氣色。彼の沈重とした威嚴ある口から、時々興多ひ洒落も出れば、一座の男女を笑はせも爲る。輕も其れに興奮られて什麽やら此頃の憂さも忘られた思ひ、羞恥さも自然と遠斥いて來て、旋ては賴母しき内藏助さま。責ては快よく酒でも進げて、彼の御辛勞を些少でも休めてと云ふので、何呉と眞實々々しく心を注ける。如何にも内藏助の云ふ、慈愛ある舅の傍に孝順しき嫁女の侍坐る容態。

「おゝ腰をと云やるのか。――いや此は何寄りじや。」

「あの、御酒、まだ進りますかいな？」

「いや、最う酔うたで、一服の所望とせう。」

「あい。では千鳥、彼方で風爐の炭を見て。私は主樣の御腰を濟して今程に行く。――あれ、もし御眠るさうながや、かやどの、御枕と小夜着を喃。」

昏々と睡氣の催した内藏助の體を見て、輕は風邪を感させてはとの指圖をして、座敷の男女を逐斥つた後の二人切り、

「もし、御寢なつて？」

顏を覗くと。

「むゝ――いや、輕か？」

「あい。」

「衆は什麽した？」

「下座へ行んで　……。」

「むゝ。」と　内藏助は起き直る。

輕は聽きたいのである。其の聽きたいは山々ながら、他目が有つては儘ならぬ、戀ところでは無い、最と其の非常い大事であるから、帮間に藝子、遣手に禿、悉皆の一座を追離つて、纔に所願の對向とは爲つたるものゝ、扨て甚麽と發語して可いのやらかが急には泛ばぬので、遲疑しながら、

「あの、母樣はへ？」

「ふゝ、母か。追々に快い方での。最早や鎭靜いた。案ずるな。」

「あい。私も、主樣の御手に參つて居やしやんすりや、案じも爲ませぬ。私の手許で看病せうより御手が屆くと、もう御嬉しう存じますが。——あの、泣てゞか？」

「むう。そりや泣く事もある。」

「兄樣の事を云うてゞ喃？」

「兄の事も云ふ、父の事も云ふ、又た其許が身上をも案じての。そりや泣く事もある。然し、身が母親と家内とが好う慰籌すで、近頃は些と諦念も附た樣子じや。」

「で、如何諦念が附かしやんした喃？」

と、其問たるや此方は極めたる熱心のが、先方には什麽響いたのか、

「去る者は……日に疎しじやらうよ。——あアあ！」　と內藏助は大欠伸！

「え？去る者は？」

美しい、滴る樣な輕の眼は此時尋常ならぬ迄に晃曜いた。然して大石が面を凝視た。

「こりや什麽致した。」

「……去る者は疎しと云はしやんすりや、兄樣は犬死した——痴呆じやと云はしやんす喃？」

「ほゝう」　微笑て、引殘した酒盃を彼は手に把つて、

「そりや何じやて、其樣に言ふ……？」

「兄樣は、去る者を忘れずに、毎日苦に病むで居さんした。其處へ軍右が來たものじやで、お前の御宅へも駈着けて。然して、途中で。——其から私も身賣をして。——其中に彼樣な變事にならしやつた。——其は皆其事を忘れずに居やしやんしたで。——御前の樣に云はしやると……。」

「あ、これ〳〵、滅多な事を。——身が、去る者を疎しとは申さんぞ。其は譬喩じや。」

「なや、主樣は？」

精神の限りを集めた輕が眼は、女子としても見られぬ程の物凄さ！大石も驚とした。

「さあ、主樣は？」

「い、も掇ても和御寮は、異な義を問ふ。我等が意衷は先度奉行所の白洲でも云ふた通りじや。何を今更ら……。」

「では眞實に？」

「ふゝさ、冗いは。」

輕は聞くなり崖破と伏した。かと思ふと彼女は二階下へ駈け下りた。

有繋に魂消た大石は、手に爲る酒盃を思はずばたり。

「こりや什麼爲をるのじや。」

（五）

肝腎の輕の浮橋は急の癇といふ。店主の心配、遣手の依賴、其は手に手を盡したものゝ、彼女は閨房にて夜具引被いだまゝ、唯だ泣くのみで返詞さへせぬ。尋常の妓なら趣向も療治もそれは幾許も有らうなれども、彼女は前にも云ふ御用の遊女、客は御用の嫖遊と云ふのであるから、双方共に手の着けられぬので、笹屋が家内は鳴りを鎭めて、唯あぶ〳〵と

手に汗を握つて居る。此事を聞いた内藏助は唯だ微笑て居るばかり。

何しろ月見に月が無うては、花見に花が散たと有つては、無興の至り、長居も無益、然らば又た來うとて大石は門を出る。家内では鹽花だか、神棚へ燈明だか、立てた箒も横に寢かせて、心配の胸も漸々撫でゝ、やれ〳〵といふ後の風評はいづれ碌なものでも有るまいが、

其よりも心痛の種を不慮に播いて、其者の胸裏を熟と搜り知りたく思ふのは内藏助の肚である。什麼爲たので有らう？否や什麼爲樣と云ふので有らう？予が下腹を可厭に擽ぐる。擽ぐるなら尙可いが、眞額梨破り！眞劍の勝負と來られたには此方も些しく喫驚いた。

彼女は怜悧である。然もなか〳〵大膽でもあると云ふのは此程の白洲の應答でも知れては居るが、其れ丈けに又た可怖い、油斷のならぬ所もある。予が此の好い年をして白髮の生へた宿痾神、夜討曾我の大藤内が兄弟といふ痴呆氣た形で出掛て見たのも、一つは其の爲め、彼女が心底を一度は覩て置く必要があると思うたからだが、今夜の那の爲體を見ると、亦是れ一個の厄介物、徒爾に棄て措は叶らぬわえ。と彼は其の兩面の事情からして、危殆みもし、且つ畏怖もした。

其の両面といふ事情の一面は、彼女が奉行の間諜に爲つたのでは有るまい歟？と云ふ臓氣ながらの猜疑である。――卽ち彼日の那の白洲は、疑ひも無く奉行の肚底が殘つて居る、予が吟味でも那の處では未だ如彼は遁されぬ。其の遁されぬ所を遁したのは、那の奉行が腹に後日の一芝居と云ふ狂言の種を蒔て置いたので。其種とは餘でも無い、彼女を囮鳥に、予が肚裏の機密を探索らせる。其義であるから此方には、「時々見舞うて傷り取らせ」！脚色の粗筋は先づ雑と、分曉て居る。

彼女とても初手から其氣でも無つたらうが、其は奉行の沙汰、親方からの依賴、公儀と人情と利害との三つ道具で責附られたら否とも言れまい。因で承諾した？此は此方の邪推ではあるが、其樣な事の無いとも限らぬ。けれども其は可怖しうも無い。内藏助衰耗へたりとも未だ〳〵彼輩が習に懼つて、鵠竿に搏つく程の老耄は爲ぬ。其義であるなら、油斷てそならぬが、些少か怖畏る處は無いが、唯だ最も氣支はしいのは、彼女が其の眞面目の、兄が無念の遺志を繼いで、敵討！其れが可怖い！

怜悧でも大膽でも未だ那の通りの小女郎、殊に人出入は那の如くの場所である。仇家の間諜として入込むであらう、又た此方では入込むと見て掛らねば協らぬが。其の入込むとする

敵の間者が彼女の客となる。固より其程の奴であるから說話は巧い。――俺も赤穗で、三平の故傍輩、御主の御無念を片刻忘れぬ、是非に此の本望――か甚麽を誑れると、浮波と乘る。――又た實に那の調子とすれば乘り難ぬから、其處で亡兄の遺志を語つて、終末は必然予が身上にも及ぶ。山科の内藏殿には、什麽じや其志は有るか、無いか。有るぞへ〳〵、高うは言れぬがと參つた日には、我黨の一大事！其の一大事を怕れるからてそ。那女が母親をも我が手許に引附て置くのであるが、彼女は野放し！と云ふて彼女を今、落籍！我宅にとも爲難ぬるのは、又一方なる奉行との關繫如何が知れぬからで。果然其者が又た間者ともあらば、其はなか〳〵、我家へ呼取るなど、以ての外！鼠の棲所へ猫の御入來、可怖しの事！兎に角彼女が白か斑かの毛色を今少し鑑定めての上ならねば、甚麽の趣向も叶らぬがと云ふので、

「はゝゝゝ、お恥しいが拙者、遊里へは此年して初同じや。御自分等は度々でもあらうが、茶屋酒の味ちふものは、はゝ格別じやな。」

附添の庄屋も此の挨拶には、困つたか、

「いや私等もな、御下で大分給べ酔ひました。」

前なる農男は四人前の殘餘の笹折といふのをぶら〳〵提げて、此は機嫌の鼻唄で行く。處へ飄乎、

「何ぞや旦那樣、叶ひませぬ乞食といふのでございます。御喫餘の御折でも……。」

「えゝ汚い奴。附きくさるない！」

折柄、東福寺の九時の鐘音は鳥羽田に落ちて、眞黑に掩被さつた空からはぽつり〳〵。

（六）

内藏助は歩を停めた。提灯の明りに透視すと、面をば手拭で深く包んで、軀にはお仕着の酒蔦といふのを纏つて居るが、背は五尺七八寸も有らうと云ふ巨漢、竹杖の先に面桶を附けて、身體が病いか跛足を引いて、蹣跚と出て來た處は成る程叶ひませぬ哀れな乞食であるが、其の音調には何處か異樣な――殺氣？を帶びて居る。阿呀と思つた。土地は藤杜の社殿の前、晝間は賑かな伏見街道も此の夜半とて人兒一個ゐぬ　聞えるものは唯だ蛙の聲。

「御旦那樣や、然う被仰らずに何卒遣つて下さいましな。御覽の通りの乞食です。」

其の語音は上方で無い、確に江戸だ。關東上りの乞食！彌不思議である。

「あ、此方は東國じやの？」　と内藏助は突如に問うと、彼は「え？」と驚とした氣色で

有つたが、俄に悄然と、

「はい、關東でございます。關東から遙るゞ此方へ。――江戸兒の面汚しじやございますけれど……。」

「私も江戸には多時く居つた。あの築地にの。おやから江戸と聞くと懐かしい。」

談話ながら内藏助は移歩のである。庄屋も供男も肝を潰した。勿論、此の大石殿は、誰人にでも如在の無い、人懐こい、腰の低い、奥底も無く交際れるのであるが、然ればとて乞食に迄恁麼にとはと、彼等は吃驚いた。

「然て此方は、江戸は何處じやの？」

「上野の山下でございます。」

「山下は好え場所じや。淺草は近し、湯島は近し、吉原は眼の前。花でも酒でも女子でも分段じや。はゝあ甚麼かな、貴公もやはり其物からか喃。」

「いや面目もございませぬ。私も以前は下寺の某る寺の侍分を仕て居りましたが、仰せの吉原で……。」

「あはゝゝ、然樣かい。あの下寺の腥い臭のする御寺に侍衆かの。道理で物腰爪外れ……

……と云ふと何やら女子めくが喃、いや言語も何處やらか人體に不似合じやと存じたよ。——有り樣拙者も喃、貴公とは稍ゝ仲間の浪人じや。はゝ。先度に不慮の災難吃うて、扶持切米に見放された天竺浪人！編笠じや。——然し浪人して見ると苛い氣樂の。頭の支へる主人は無し、肩衣掛くる窮屈な會所も無いで、今夜もの、實、此衆を誘引うて撞木町の揚屋へ行て來たじや。いや面白い……。」

「御全盛でござりまするな。——シテ御浪人と被仰いまするは。何方御國で！。」

「赤穗じやよ。あの鹽の出る——澤庵鹽の鹹い藩じやよ。」

「へゝえ、赤穗の淺野樣御家中で。——ぢや、彼處に大石樣と仰しやる御家老が？」

「其の大石は拙者でえすよ。はゝゝゝ。鼻樣が其の內藏さ。いや其の江戸で云ふ盆藏さ。」

「へゝえ?!」　と彼は呆れた樣な聲をして停止つたが、庄屋も供も、此の問答には興を醒した。

霎時して彼の乞食は呻くが樣に、

「其の內藏樣が御女郎買？」　と太息を吐いて、熟々と面を注視て、

「揚屋抔へ御出に爲つても、——御面白うございますので？」

「何故？」　と內藏助は不審の體。

「いや、も申し上げますまい。——私は又た貴方を忠臣かと……。」

「ナニ忠臣？」

彼は悚々と身悚ひしたが、大きな聲ではゝゝいゝよい！

「あゝこれ到頭先生の談釋聞いたで風邪感いた。兎かく忠臣は症に合ぬか。はゝさア參らう。」

急歩に二三間歩いたかと見ると、

「あゝ庄屋殿や、何卒やじや、此方も叶はぬ、此の双刀持て下され。久し振で指いた所以やら重うて歩けぬで……。」

と云ふなり跟ろ〳〵と又た轉げ掛つて、供男が肩頭に捉まる。

「こりや何に惡戯てや。」

「も、辛度てならん、背負て呉れ。」

「背負てやてい、此の圖無い御形で。」

「大事無いわい。夜道やて誰も見やせん。負へ、負へ。一人は足を持て！」

「ぢや此の饌折はな？」　と恨し氣に彼等は見遣ると、

「先生に遣れ。は、講釋の束脩じや。」

「あ、酒臭！」

熟醉たる人の癖でも有るか、背に負はれるなり内藏助は、夢の樣な檢束も無い形で、他愛も無げの高鼾。

庄屋の提げて行く提灯の影を迫になるまで看送つて居た彼の乞食は、旋て貰つた彼の四つの饌折を遠く田の中へ投遣つて、猶も其の火影を望むで、ふゝひと冷笑た。

其を又た、社頭の珠簾の陰から覗てゐた者がある。其人は彼の父が影身を斷えず離れぬ大石主税！あゝ彼等の苦裏はよ！

（七）

昨夜の小雨は此の曉方からの大降となりて、澁谷越に牛追ふ鞭の聲も爲ねば、清水の三年坂に參詣下向の下駄の齒も絶えて、祇園會過ぎたる京の市街は夏ながら秋の淋しさ。大比叡の紫も、鞍馬の綠も、愛宕の藍も、皆一樣に薄鼠の雲の衣を襲ねて、暑熱に喘いだ河原の涼棚も、今日は千鳥の鳴く音をさへ忍ばるゝ薄ら寒さ。

「此の雨天に山科から、――いや御子息も御同伴で？」

と、玄關に出迎へた小野寺十内、潮田又之丞、貝賀彌左衛門、彼等は手にく〳〵手傳つて、合羽を脱がせる、羽織を取らせる、雨吹を拂ふ、滴露を拭ふといふ奔走の役。

「いや御措き下され。――些と急用が出來ましての。」

内藏助は刀片手に奥へと通る、主税も續く。其の通る座敷といふのは彼の紫野瑞光院の奥書院で、目今で云へば同盟黨壯士の合宿所　亦是れ一座の、怖るべき伏魔殿！

旋ての事に一同の面は列むだ。大石を上座にして、奥野、進藤、河村、小山、其等を初めて十三人。老幼打交りの二十四の眼は、何かは知らぬが「急用」と云ふ内藏助が口許に齊一く注ぐと、其口は世にも恐ろしい次條件を言出した。

「扨て各位。我等豫ても申し置いたる「猿が島」からの隱密の使者と云ふ、喃。彌當地へ見えましたぞ！」

「えい？」　と言つたが、後は互迭に目を看合せた切りで、孰れも口をば啓かなかつた。

「猿が島」とは隱語である。大石が發意で、吉良家に對する重要の語は皆其れの暗號と云ふのが製造てある、卽ち吉良殿の事を「ト一」其の屋敷を「猿が島」又た「吉田の里」。子

息の左兵衛殿を「左文字の刀」の其兄（或は弟とも）喜平次殿が縁家先を「杉野勾當」。此等の類で、彼が云ふ「猿が島の使者」とは「吉良家の探偵」！其者が此の京へ來たとの事。原來が、其者が來たとて然のみ驚愕くには不足ぬ話で。彼等が目指す大石内藏助、既に公然山科に浪宅を構へたと爲れば、其の猿なり犬なり此の土地へ入込むと云ふのは初手から知れた穿議で有る。雖然も其處が人情。正月の元日から三百六十幾日目には鬼といふ大晦日が來る！綴暦一冊見た程の者は豫て覺悟であるべきのだが、扨て然樣は行かぬ。十二月と書て十二月と讀む、依樣世の中の掟には外れぬ十二人の人々であるから、其中の或る者の如きは、其の不意の債取が寢込に押込むだかの樣にも目を圓睜くして、

「御住居へ喃？　什麼なる風體で？　何人ほど？……」

此等の訊問は八方から出る。隨つて座敷も叫喚く。

「ま、ま、御急なさるな。時は昨夜、場所は藤杜、風體は非人、人數は見申した所は唯一人。――其の出會の次第と云ふは……。」

と、此から彼の笹屋の始末、其の歸途、眞闇な往來端から風と出て、上野の寺侍、放蕩の揚句と名告つて、忠臣の講釋、貰つた饌折を田の中へ棄て、闇黑に紛れて無念や其の踪迹

を失つた迄を、父子は見る如くに仔細く語る。

「ふう。彌じやな。然て御自分は、此に就ての處置を什麼爲されるか喃？」

奥野は心許なく氣なる顏を捻つた。

「我等勘辨では、彼等を愚に爲たい……。」

「愚にとは喃。」

「其は臨機じやが。――彼奴等愚に爲やうには自らも愚に爲らねば克らぬ。結句自ら愚に爲つて、彼等を愚に爲る。――あの釣狐の狂言じや。」

「で、御分は其の愚に爲られる。我等も其の御相手にかな？」

此の皮肉な問は進藤源四郎。

「如何にも其で、愚にも爲れば、臆病にも爲る。――我等計畫では、既に彼奴等の恁う入込む以上は故殿御位牌もある當寺の事、其の目星と爲るは知れたること。霎時く彼等が鋭を避けて喃。御一同大儀ながらも今夜にも難波の惣右許へまで越えられて。江戸からの一左右次第。又た我等が見込の時節に船なりと陸なりと彼地へと向はれる。然う有りたいが……。」

看る〳〵此には反對の面色が見えて來た。就中耐らぬ座を進み出でたのが村松で、

「内藏殿、最う愚も飽果てまいた。故郷を出てから早や三月の餘じやに其間に何事を爲たゝぬらりくらりと唯だ小田原評議。其上に又た大阪へ行く。——行くは厭はぬが我等は其の素奴と云ふをなあ！」

同じく拳頭を摩りながら傍から出掛けたのが、潮田と武林、

「然樣じや村松。猿が使が非人なりや、今夜から乞食驅せう！倖ひの此の大雨じや。」

（八）

大石は驚愕いた。其の乞食狩とは什麼爲るのかと問へば、潮田村松武林等は腕の叩いて、

「甚麼がおざらう此から手分して、五條松原の河原に居る奴等。又た街道から伏見へ掛けての乞食と見る程の奴。一頭も殘らず撫斬！然したりや其中にや、猿が使者ちふ奴も居申さう！」

肝が潰れる！其が戯談でなく、眞氣であるのだから、彌呆れる。然も猶ほ驚くのは、肩肱を張る血氣の徒輩ばかりでは無くて、白毛の交つた分別の胸毛を捻くる連中までが其擧を壯として、

「むゝ、血祭の腕試し、好からう ぢ。——又た然も無いと斬たとてろが、可い！何せ世に用無い奴輩じや。」

漫ろに腰押の態度を執るとは、眞實、甚麼たる事であらう？噫、此等の野猪のお饅をする。其の人々を股肱とも耳目とも、一味とも同心とも、手を引合うて與に大事の淵に臨まねば叶らぬ——は尙可いが、或は保に共に溺れて、座頭倒しに底の水屑と！然らば故殿へ甚座と陳疏——噫！

と云ふ中に、彼等は眞に出掛けるのであるか、何やら支度も爲る氣色。

「相成り申さぬ！以ての外な！」

内藏助は眼を瞋らして一喝した。更に一座を屹と看廻した。

「各位が其刀は、辻斬、腕試しの爲に佩さるゝか！」

其の眼光の鋭さと云ふものは、虎狼として睨み挫ぐべき程の威勢。猪も豺も此には慴伏れて、尾を卷いて猝に喝！

「一體各方の心得と云ふが相分らぬ。先度城中で神文の際、不束ではあるが拙者を今後の大將に、出入進退、此義に就いては唯だ内藏助が指揮任せ、存寄り次第と確うも申され

た。其が唯今の口狀――甚麽たる義じや？那の盟約は破られたか。但し、忘却せられたのか！」

愈〳〵出で、愈〳〵激しい。其の痛啞叱咤とも云ふべき擬勢は、從前に竟ぞ見た事もなき父が憤怒、と主稅さへ慄へ上つた。

「いや、內藏助かの、御聲の暴いは何う召されたの？」

と、其座へ徐々出て來られたのは、當院の住職海首座で。

「これは和尙。」　と大石も急に座を改めて會釋をした。此の坊樣には彼もお臍の毛の數まで算れて居る。其で一言も無いのである。

「何事の腹立やら不知ぬがの、堪忍なされい。此座な御人も、皆好う朝夕には故殿の墓掃除もお爲れるじや。如在はござらぬ。神妙なもの……。」

「我等も然樣とは存じまするが……。」

「然し御自分達……。」　と和尙は多勢の方へ其面を向けて、

「墓掃除のみ好うお爲れても其分じや面白ろござらんぞ。掃除や燒香は貧僧が役じや。各〳〵位には未だ〳〵他に、其の太切な、最と豪い職掌がある。其れ結果さらには心得ちふが肝

腎じやの。

早い話が、御身等、大將と云ふを立てたりや何事も其の命はるゝ通りに爲にや叶らぬ。其の大將を折角立てゝも命令に隨はれねば一向甲斐が無い、其隊は野武士じや喃。野武士は合戰に負けまする。――或は其の大將の采幣振に意に充たぬ義もあらうと儘、此に遵奉うが隊士たる者の大事の心得で、然無うては大功は成し難い。

貧僧が身柄でも猥且然樣じやよ。釋迦如來は此方等が大將じや。此の大將の掟てられた經文の趣旨通りに勤行て行かぬと、魔障の敵を退治して、成佛の本望は得られぬじや喃。――

じやが其の命令の經文にも中には困る筋もある。けれども其を困るとて我が勝手に爲れば、外道に墮ちる。便ち佛には成られぬ喃。僧でも俗でも其處らは唯一つ道理で。ちやで貧僧も頭顱を圓めて、興多うも無い抹香捻り爲て居ます。主達も又た恁う窮屈な目を忍むで、內藏助が指揮に附いて勤作くじや。唯だ其の目的はの、誰も彼も彼の大涅槃といふ成佛の、其の曉よ！あはゝゝゝ。」

と一つ笑つて、更に眞顏で、

「虚ろがの、修行には兎角魔障が魅きたがる。御身等も然樣じや。勤もすれば地獄の種子

を自分とお播きやるじや……。」

蚤も耳許へ來る藪蚊の呻吟を拂子で拂つて、又た其の慈眼の眼に微笑して、

「御分等が口からは未だ聽かぬが、此程も、那の上鳥羽で、大分の殺生を御爲れたさうな。善う無い義じや。――現に其義で彼の翌々日、貧僧も伏見の奉行所へ召喚れましたぞ。語ふは初回じやが、奉行の大久保から吟味の受けた。――死人に赤穗の舊家來、其方が住持の寺は淺野家の香華院、何か彼の大野や灰方、其餘の義について聞き込むか、見及むだ筋は無いかな、と、恁う訊問れたじや……。」

初めて聽かされて、彼夜に出向いた四人の士は、且つ怖畏れ、且つ赤面した。

（九）

伏見の奉行所へ此の和尙の召喚れたとは聞くが初回、其の用向が彼の塔森の討果し事件とあつては聽棄てが成らぬ。勿論、其後の今日まで恁う安穩に居るからには、別段難かしい穿議の有つたでも有るまいが、其れでもと、皆固唾を呑むと。和尙は依舊彼の微笑を續けて、

「案せらるゝな。案ずる程なりや貧僧も其際に告ひますがの。何事も無かつた。――無つ

たけれども彼所でも此寺に目の着くる、――卽ち各位の行事に不審の一點を打たと云ふは明白じや。――さあ、不審を打れた、其の各位が今後の動作と云ふは什麼有るの？如法、大事じやな。錯誤うたりや百日の說法、――散々じや。

此邊が「時」じやろ喃う。瑞香蘂雪裏とも、辛抱の爲時とも云ふ其時節であろ。颯々風の寒氣の中には花は咲きませぬ。其が春が來れば自然と咲く。時機は太切なもの。貧僧が祖師の釋迦殿でさへ時をば待たれた。成道後の三七日に、界外別圓の大機に對して大乘の華嚴を說かしやれたが、未だ漬加減が早かつたか、鹽が些と鹹ら過ぎたで聽衆の齒に合はなむだ。因で裏いを辛抱して、今度は小乘の極甘いを前後十二年、十六大國といふへ說て廻られた。な。其時分の釋迦殿が肚を見たなりや、嘸や迂遠い、肝の煎れた、齒痒いでも有たじやらうが、其處をば和尙殿、辛抱ふ爲れたな。こりや甚麼の爲？妙法蓮華の一佛乘を說うが爲で、草木國土悉皆成佛の微妙の法を、三界二十五有の凡夫に敎へて、無餘涅槃の淨城に其等を導く、其の本懷を遂げうとの、大慈大悲の涙から出た辛抱じやな。其間が四十年じやよ。石の上にも三年といふが、最些と氣いな。況て百日や其處らで飽氣が刺して、喞呟くなど云ふ、其等辛抱甲斐の無いのとは些と質が違うな。

ちやが、感心なは内藏殿じや。善く諸般に辛抱される。用意も達く。貧僧が方の「忍」の戒も持たれる。昨日の衣裝など、はゝ妙じやッた。」

阿呀？と思つた。昨日の打裝とは、と内藏助、

「和尙は、御知りやれて？」

「はゝ、いや緋の法衣に紫の袈裟、御光も刺す樣で尊とう拜まれた。」

扨は此の和尙、根抵げ承知のだ！と大石は吃驚いた。

「いや御分が其の老年で彼の身裝。其の身裝で又た揚屋入！嘸や苦羞しい事ちやであらうが、好う辛抱お爲れた喲う。其のみならず輕女との駈引。——見事やさうな。出來された。」

内藏助は呆れに憫れて最う言句も出ぬ。唯だ眼のみが其方の面上を注視ると。

「如何ちや貧僧の天眼通は？善う洞見るじやろ。——其よりも猶貧僧が感心したは、歸途の狂言じや。此方から先へ名を名告る、身分を明す、結果には双刀を脱る、背負れて行ぬ。——妙じやよ。操芝居とて如彼は參らぬ。見物じや有たでの？」

操芝居と和尙は云ふが、此方は竹田機關を見る樣にも感せられて、種子が分らぬ。況て其言が賞揚られるのやら、弄誑れるやら、我が五里霧中を、其では和尙は狙て來たのだ。

「然し、彼れでは御身が狂言の趣向が餘りに見え透くな。彼れ迄に爲むでもじやが。——揚屋歸りの醉うた身と爲れば、彼體でも好えか。——其れに今一つ感心なは、主税、御身じやよ。——御身が其の忠孝じやよ。」

堪え難ねた主税は矢庭に突と下座から進んで、

「和尙樣、御人悶しじや。誰、誰が那の場所に見て居りました？」

「誰じやと思ふ？はゝはゝ。」

「曲者より外、居りませいでが？！」

「其の曲者じや。——乞食じやよ。」

衆皆もあッと魂消て、和尙が神變不思議の力には肝を潰した。

「誰が、猿殿が間諜での、大石、御身へ、忠義の講釋など爲るもので……。」

「いや鈍眼の我等、其れ迄には心の着きませで、粗忽、面目もおざらぬが。——シテ何人で？」

「今會せませう。——長江、長江……。」

（十）

長江と呼ばれて。其の長江であろう。方丈の奥の方からのそり〳〵と出て來た巨漢。人々は目を側めて視ると、何さま背の高さは五尺六七寸、六尺にも稍近いので、此院の京間の鴨居にも背を跼める程。手脚は太く筋骨は荒れて、これを太平記の作者に見せたら、仁王とか四天とか、夥多しとか凄まじとか、豪い形容も附うと云ふ其れは目醒しい形相ではあるが。其よりも驚くべきのは、其の顏面の醜怪で。此は又た言語同斷！

疱瘡であらうか、火傷であらうか、但しは金創か、額から頰、顎へ掛けて、赤く黎く紫に、焼け爛れて。膿み頽れて、眼だか鼻だか？剩けに門齒も二枚ほど虧けて。いや再目とも！其面で彼はにた〳〵微笑つて、

「此は内藏殿。昨晩は……。」

然しもの大石も驚として、此は曲者では無い、化者であると、頓に返辭も――凝視てゐた。

「私は長江長右衛門。――御見忘れで？」

其は、昨夜は、彼と語も交したのである。然し倖ひに頰被の掩護に藉つて、此の怪臉をば見なかつた。見たらば庄屋供男等も目を眩すか、棒で毆るか、孰れ一場の騒動は起つたであろうに、其義の無かつたは助くるかみだか、手拭だか、夜目かの擁護で。其より外には

逢た事も、見た事も、名さへも聞た事は無いのである。

と、和尙は潸然と老の涙といふのを流された、

「内藏殿や。熟く目を留めて視て下されよ。――可哀や此が、堀部安兵衛の忠義に凝つた、寨の容でござるぞよ。」

「呀？！」

此聲は一座十三人の、一樣に口頭から出た叫音であつたが、其でも尙だ、

「貴公が？！」　と大石初め、唯だ其眸子を凝した計り。

抑も堀部安兵衛と云つては、養老の彌兵衛が戀壻だけに、彼の藩中でも好男子の内に算まへられた者。其が、見れば見る程、好くも此れ迄に形相を變へたもの！然も其の變へた形相の委細を聽けば、此の老和尙ならでも誰とても涙が飜れる。彼は故殿が切腹の翌夜に築地の屋敷を出た。其心に誓ふらく、君の讐とは俱に天を戴だく可らず。身に漆して癩と作り、眼に鱗して聾と爲る、忠光、豫讓が苦は目今の我躬に嘗むべき筒である。汝やれ上野、殿が最期に注がれし血を早晩は其の白髮の首に塗らせでは。と彼は卽夜に鐵火を焼きて其面の皮肉を焦爛らせた。恁くて非人に身を寨して、本所の仇が家を狙うこと二箇月の餘。

目指す讐敵には其身の憂りへも近附けぬが、狙け出したるは彼の公用人の松原佐仲が夜に紛れ、屋敷を出でたる旅裝の微行姿。彼は見るなり要有るべしと後から跟くれば、品川を越え、川崎を過ぎて、素奴は東海道を西方へと行く。安兵衛は考慮へた。

仇家の領地は三州の吉良である。這奴め、或は又處へ行くかな。彼の江戸屋敷の模樣を窺ふに、苟初の仲間小者も羽州よりか、若くは其も三州の領地より出でたるならでは門の閾をも踏せぬと云ふ。其の用心の裏を掻くには、我も三河の者となりて、其の出人と爲るに若かず。然らば我も此奴めが後に跟きて其の吉良へ入らむにはと。俄に伊勢の抜參りといふ者に再た容を變て、箱根の關所を越ゆるに苦しむとの口實から、彼が荷持。其からは其日の泊り旅籠を彼に支拂はする約束の無賃の人足。恁くして漸次に彼に取入て其談を聞けば。思ひきや彼は三州ならで。彼の伏見の撞木町へ行くとの事。

伏見の撞木町？何用であらう。但し彼處に近き山科には我が同盟の大將内藏殿が居る。倘や其の身上か。と安兵衛は更に安からぬ心痛に撈針を入れると、個は什麼、其の用向は前回に云ふ、輕の浮橋が落藉であつた。仍でやれ〳〵と胸を撫でたが、

江戸と違つて、彼も此の土地は不知案内の場所。旁々先づ紫野の御菩提所の和尚を訪うて

熟と諸事の樣子を問きて、と此寺に來たのが三日程以前。和尚は其を同盟の士にも秘して什麼思つたか、彼をして内藏助と輕が模樣とを探らせた、其れが昨夜の始末である。

（十一）

和尚が泌々との物語に一座も寂然として、此の安兵衛が悲哀さと健氣さとを見るに附けても故殿が當時の御無念の面影も眼に浮むで、仇家に對する怨恨も倍して、思はず拳も握られて來る。鼻も塞つて來る。庭砌に音する軒の點滴と、迫かの本堂の木魚の響とは、其の悲話の斷目々々を補綴つて、更に衆の愁腸を搔き搖る樣な哀れな音を立てる。

内藏助は眼眶の露を左右に拂つて、

「江戸にお在る御親父からも、御自分が艱難の概略をば仰せ越されたが、事實此程の義とは存せんじやつた。噫、忠臣な！然りながら一騎駈の働きは全體の上に危險いじやから喃、此よりは依樣一味合體で。なあ、赤穗五萬石で先方の十五萬石に當らねば協らぬじやな。又た御身か那體で働かれたりや、當方は千人力。好うも御座られた。」

安兵衛は其脱けた小鬢を抓き〳〵、

「其義は方丈からも昨日も申されて。拙者從前の進退は御下知に背いた、――抜駈との義。

前非後悔にござります。が内藏殿。敵の手段は中々でな、當地手當も十分屆いて居るかとも思はれます。」

「むう、何樣。」　と、一同の膝頭は覺えず集る。

「我等は、無念や、伊勢の拔參りと申したで、龜山から引別れて、加太の間道を夜を日に と參つたが、――途中、斷續聞きますると、餘程の人數も入り込むで居るかの樣子。――其は、京都の逗留が早うても一月費る。知己の朋友も數多いから、――と彼奴、不問語にも言ひました……。」

「むゝ、其で、其の輕の落籍は？」

「さ、其義でなあ。其件が第一我等の懸念にござります。原來何樣の考案で然致しますやら人質――と申した處が異な義。或は呼取つて此方の內幕を探りまする……？」

「其れじや。全く其筋じや。――其が又た此方には窮困るで喃。」　と大石は兩手を組むだ。

「我等も實は、昨日は嫖客で、あの御二階の廊下續に居りましたが。――いや彼女が蓮葉と云ふは……。」

「さあ、其の蓮葉じや。那體で江戸の本所屋敷へ引取られたりや。――注意が無くば漫りに言ふ。然も無くば又た身を結果す。――兎かく言語も舉動も輕率じやで。――「輕」とは好う無い名を附けた物！」

此が酒落でも甚麼でも無く、歎息の其餘りの自然に出たので、一同も笑ひ掛けたが默止て了ふ。安兵衛は其言に最も同感を懷いて、非常な不滿で、

「事實然樣で。未だ御熟識も碌　無い貴所に對つて、彼樣な義を申します。又た其を藉されると、憤つて癪とか云ふ……。」

「ぢやが其も、長江、御身とも似て居るよ。內藏へ向つて突如に忠義の訊問を試みたは、誰じやかな？其上に、折角貰うた笹折をば田の肥料に爲る！貧僧は好個寢酒の饌と待て居たのに。はゝゝゝ。」

此は例の和尙が諧語。安兵衛は不思議な眞顏で、

「那の樣な饌、進りますかな？俗人の我等でさへ精進で。殊には彼の揚屋の料理……。」

「はゝ、淨穢不二じやよ。――況て大檀那の供養の齋食じや。あッはッは。」

「然うじや！」　と內藏助は猝に笑つて手を拍た。

「和尚。其の淨穢不二じやで、此の女人濟度の役を御身樣に願ひたい。彼方へ出張つて。此の說法。御僧に限る！」

成る程此は絕好見立であると、奧野進藤河村小野寺も與に膝頭を叩いた。又た實際が然樣のである。時と場合、其の對手の信念を固めて、敵の虛實を摟らぬ迄も、此方の機密を漏泄させじの臍を決定るが爲には、大望の其の臭氣位ゐは嗅せねば叶るまい歟とも思はれる。雖然も其を嗅せる事は、大石は勿論、自餘の人とて、父母に兄弟妻子迄にも口外せじ！と日本大小の神祇に誓つた其の神文に對しても、其義は恆らぬ。其を又た容認すとなれば血判は滅茶々々、反古と爲る。其處に都合の妙と謂ふのは此の坊樣で、敎化は固より其の法務、濟度は當面の彼が職掌。況んや其の超焉たる道容、靄然たる法顏、鶴の如く雲の如きを望み見ては、什麼なる魔鬼も渴仰の合掌を容み得ぬ底の德品がある。今一つは原と方外の人、少々の事を言つたからとて、先づ差障も無いと云ふので。其で彼が此の說法の役には、誰も皆妙を稱へた。

「よ、彌貧僧じやかな。此は口から高野と爲つたかい。」

（十二）

輕の癪は其の翌日も未だ快愈ずに、翌々日も痙攣通しで、三日目には容體が些と危險いと醫者も云ふので、家內は驚く、禿は泣く。湯水も吃めぬ當人は痩眼さへ眼に立つて來て、哀れや獨自其の部屋に苦痛むで居る。

病の根は言ふ迄も無い彼夜の始末。大石が肚裏に復讐の料見が無い、實際彼は先度も白洲で云つた通りの腰拔武士。あゝ口惜い！と云ふ其からであるが。猶ほ其の苦痛を增長せたは、父兄の橫死、母の病氣、尙だ其餘の何やらや彼やらの全般の事件。

念へば〳〵彼女輕の身に、今は遣る瀨も無き迄に情け無くも感せらるゝのは、其の橫死や病氣である。但し、母樣の病氣は尙治愈るといふ賴憑はある。けれど可傷いは父樣や兄樣の身で、最う甚麼の目的も無い。其の目的の無い、もう逢はれぬと云ふ死も、最初は幾分かの諦念も附いて居た。卽ち兄樣の如彼死られたは忠義の爲である。父樣は兄樣の其の忠義を助成ける爲に御果てなされた。然て見ると此は犬死では無い。天晴れの忠死！昔で云へば御馬前とやらでの討死にも當る。其の御主の爲に戰爭で討死を爲されたを、其女や妹の身として甚麼で歎かう、家名の斷絕たも、田地の喪失つたも其忠からだと念へば悔むに當らぬ。況て妾が身など　苦界の憂き勤杯とは勿體ない。內藏樣や其餘の衆の御苦勞に

比較べては！と。――其が什麼あらう、其の内藏助殿！否や最う殿附どころでは爲い、内藏助！と呼棄に爲て遣る。呼棄でも未だ腹が立つから、内藏助奴！と罵詈て遣る。いや名を喚ぶも汚穢はしいから、腰拔武士！臆病侍！惡魔！外道！――何しろ妾が父樣や兄樣や、家名や田地の仇敵であるから!!

何故、仇敵じや？　仇敵であるまいか！那の内藏助が其の腰拔で有る許りのお蔭で、妾が父樣や兄樣を犬死させた。折角の忠死で有るべきものを、逸まつた、理由も分らぬ、甚麼にも爲らぬ徒死に爲て了ひくさッた！何の仇討も甚麼も爲ぬ程なりや、父樣も兄樣も死ぬには及ばぬ。妾も身賣を爲るには及ばぬ。田地も家名も滅失すに當らぬ。軍右めが來て訴人と云ふなりや、訴人させて、那の内藏助を初め其餘の奴も、代官所へでも奉行所へでも引出させて遣つたもの！

其上にも彼の醜態たりや什麼？妾が家では父樣が嚴落しうて、妾にすら附けさせなんだ赤い衣を婆娑と衣て、甚麼やらかの小唄節！殿樣が切腹しやれてから百箇日も經つか經ぬに酒を飲む、肴を食べる。其で妾が甚麼かと問へば大欠伸！去る者は日に疎しじやと！何たら事じやらう!!腹の立つ！

想へば墓ないは妾が身じや。父樣は沒し、兄樣は亡し。家名は滅なる、田地は失なる。那麼惡魔の看病受けうより、妾が手許にと母樣を思へども、其も儘ならぬ今の身。甚麼の爲に這麼苦界に居ねば叶らぬのやら分解らぬ軀體を、恥晒らし、業晒らし、父兄の面を汚穢すが爲に活て居ませう、倖ひの此の重病。湯水も絶つて、淵死に死う！と、驚く可し、彼女は覺悟を決着たので、藥劑はもとより、粥湯も啜らねば、軀體は日增に羸瘦るばかり。咲かけた花の一枝を、夜半の嵐に我から散らす――其年は幾歲か。單の十九！五日目といふ費過に亭主の清左は遽たゞしく來たのである。彼は何の喜ばしい事があるのか莞爾と、

「浮樣や、病氣とてろじやござらんぞ。さア喜ばしやれ。落籍じやが！」

落籍とは寢耳に水。輕も吃驚いて、

「親方さん。そりや何樣した事？」

と、彼も起復る。

「さ、何爲た事やら俺も知らんが。江戸からじや。――江戸も江戸、高祿の御旗本樣から此方を欲しいとて御使が上京て來たじや。豪い出世な！俺、もう其談を聞くと嬉しうて飛

で來ました。」

飛で來た！其も道理で。現在看え透いて手の貴る厄介妓の浮橋が、思ひきや幾百兩かの大金に換るのであるから、頂と堪らぬ、病氣も絶食も忘却て了つたも其筈である。

（十三）

今日で五日の絶食の輕も、思ひも懸けぬ落籍と云ふので我知らず枕を起した。然して問いたが、亭主は唯だ江戸の旗本衆といふのみで、屋敷の名も知らぬ。輕は考案べた。此廓に身を沈めてから未だ二月とも經ぬので、諸理由萬端皆審れ不知ぬが、凡そ此方達の落籍と云ふは、通うて〳〵通ひ詰て、互迭の氣心も奥底も知れ、起請に誓詞、指切髪切、死ね死うと云ふ情夫に爲るか。然無くば人の戀を懷く情不知の田舍客が、有る金に明して手活の花と見る。先づ此の二者で、其の大盡ですらが繁々と逢うての上の事。妾が樣な名も聞えず、人にも知れず、容と云ふては唯那の内藏めに一度出た切り。恐らく輕の浮橋と云ふが此廓に在ると云ふをば、此の伏見の人樣ずらも御存知無しとあるべきのを、百里も隔てた關東から聞傳へて、落籍に來る！——合點の往かぬ！

腑には落ぬが、然し又た好う思へば倖ひの緣でもある。此の亭主には思こそ有るなれ、恨

みは無し。今妾が此で死ぬれば彼の五十兩の金子は全然の損。其樣な不義理な所爲は爲たうも無し。先方は武士が町人でも鬼でも蛇でも、既に飢死うとまで覺悟した身には甚麽の怖畏い事！人も好し、我も好し、此は此の憂い廓に泣て居るよりは。と、

「妾には否はございませぬ。親方樣さへお宜しくは。然たが先方樣の御苗字だけを。」

と、此は至當な要求である。亭主は又も躍り上らぬ迄も悅喜むだ。

「いや早速の承知、辱けないぞ。其は先方の苗字は勿論、御家柄まで。こりや俺方からも奉行所へ屆けて其の御指圖を待ねばならぬ用がある。何せい御身はあの「御用」じやから喃。」

御用の娼妓も奇らしいが、名丈けの落籍も不思議である。孰方にしても厄介拂の、福德の三年目といふ笹屋清左は、善は急げと慌遽と出て行つたが、其の薄暮になつて、再た息迫と走せ戻つて。ぐッたり處が、鬼の首でも獲た程の威勢で、

「や、知れた〳〵。御屋敷から御苗字まで全然知れた。其の知れた始末は、浮、まあ恁樣じや。」　と、とんと坐つて、

「最初はの、高祿の御旗本じやと計り云うてじやッたが。浮が軀は目下は御奉行所からの

御預り物でござります、仍てに其のお身受先の御苗字、御身柄を承はらねば、私方、御屆方にも困却ります――と恁う云ふたらな。いや其義は？と迷惑がらしやれて。實は旗本と云ふたは嘘、眞は我等羽州の留守居で竹野右市と云ひをるじや、其段で屆けて呉れいと云はしやれる。

其許じやからこそが、落籍に奉行所へ屆くる等の手數も要る。其外ならば町年寄衆へ迄の書附一本でさらりと濟む。又た其の署名も有り樣出放題で。此廓に遊んで何の某――遠く先祖の氏文讀む人も凡そ無いじやで。俺も、可ござります、全體は其向で、と御奉行所へ屆けて見ると。さあ難かしい。御掛りの衆の言はるゝには、浮橋の落籍に附いては此方取調ぶべき筋がある、其の引取の人、同道せい、一應は取糺して。と苛ら御沙汰じや喃！酷う難義がらしやれたが、爲事がない、俺と同伴せられると。いや嚴重しいが、其處で知れたじや。嘘から出た眞に復つて見ると、は、、、、、彼の樣は其の、羽州でも留守居でも無い。頭巾の取られると、こりや！」

滿面に笑を含むだ、搖錢樹を握らされた樣な亭主は、疲目の輕が領元に口おし附て、何やらか莞爾囁語くと。突如だつた！

「えッ！吉良樣？――あの吉良の?!」

看る〳〵其面色を變へた輕、

「口！口惜しい！」　と泣伏した。

慌遽て、錯愕いて、度を失つたは淸左である。仆れたのを扶け起して、

「那樣爲たのや！何たら事ちや！あゝこれもし浮――浮どのや……」

狼狽へたも無理はない。公用人の松原佐仲が、叶といふ程金を積むで、其の御隱居の上野殿が御側に居えるとて買出しに來た。何しろ娼妓が高家の御部屋樣に爲るのであるから、子孫が龍に化る程の出世である。歡むで、拜むで、座敷中を躍つて廻る、所謂る驚喜の、其位ゐな騷動も爲かねぬと內々心構へも爲て來たものが「口惜しい！」とは何事ぞ。泣くとは何した理由。其は此の女子の兄貴とかは、赤穗の淺野に由緣の者さうな。なれど、其人は其人、此女は此女、豈夫に此女が其宿恨を念つて何うの彼うのと、其樣な痴呆た料見も有るまいし。地體此の始末は什麼云ふのか。と亡八の腹には流石に領り離ねて、

「こりや、ま、何爲たと云ふのやい！」

恁る處へ少婦の里が駈て來た、

「旦那様へ、先度から定々見えるあの坊様が、浮様へ逢ひたいとて又た來やはれて……。」
「え、邪魔くさい！此方其れ處でありやへんが。——ぼい返せ！」

（十四）

少嫗は叱斥れて起うとする。
「里、待ちや。」
と泣伏した輕は猝に顏を擧げたので、清左は又た驚異いた。
「何用やて、？」
「妾は其の坊様に逢ひたうございます。此方呼んで……。」
「何用やて、？」
「何用やでも宜い。何ぞ此方呼んで。」
豐肥であつた臉は、彼の稍衰耗へて、愛嬌の滴る計りであつた眼には、驚くべき決心の色が見えて來たので、其の底意を測り難た亭主は、一方ならず震悚へたのである。
「此方、朴道な氣なと出して叶んえ。俺、窮るがや。——身上仕舞さして下さるなよ。」
「可ございます。何でも可ございます。——里、其の坊様早う伴れてや。」

亭主は唯だ危々的でゐる。甚麼かは不知ぬが今は御意任せ。恁う逆上氣も見える際には姑づ其言ふ儘に爲て措くと云ふのが、彼我共に萬全の策。坊主も可からう。眞逆に此の病人を伴れて駈落も爲まいから！但し其の用向をば一遍訊問て。と彼は何やら其場を點綴つて卒忽々々に表間へ去つた。
彼女は再び泣倒れたのである。單だ感情の激する儘に、前後も忘れてよいと哭泣た。
「いや、然う其許は緊急ては不可ぬ。——苦界の中での苦界と云ふ主が軀などは、特別け心を廣濶に持たねば恠らぬ……。」
誰とは知ぬが枕頭に恁う云ふ聞馴れぬ聲がした。顏をば抬げたが、心は顚倒、剩さへ眼は涙に暈つてゐるから、甚麼やら判明ぬ。
「坊様え？然したら妾に引導を！」
「何？引導じや？」
「あい、引導を！あの佛様に授與す引導——爲て下さんせ。後生でございます。」
從前の驚愕いた聲は力の有る聲に復つて、和尙は微笑をさへ帶びたる語調。
「ほゝう、引導。——面白い。授與しておまそ。——先づ眼を開けい！」

「あい」

「予が看ゆるか？」

看ゆるか？と問れて輕は此に初めて熟く視ると。什麼にも尊とい。年齢は五十左右、眉長く、色鮮かに、威有る眼、冐す可らざる唇元、厚き耳、隆き鼻、法衣こそ汚いが、袈裟こそ古いが、何時やらかの彼岸會に東福寺で拜むだ五百羅漢の其の畫像に、精神の入つて脱出て來たかと想ふばかり。餘りの難有さに彼女は思はず掌を合すと。

「予の身は、如來じやぞ！」

成る程虛でも妄でも無く、白毫を刺して、異香も薫じて、御如來樣かと樣にも拜まれる。

「其方の身も、菩薩じやぞ！」

呆れた輕は目を圓睜くして、

「え？妾はあの此家の浮橋……。」

言せも果てず、和尙の口頭から、突如に、

「喝!!!」

破れよと計りの獅子吼を吃つて彼女はあッと慴伏した。其聲の恐しさは、雷とも地震とも！其場に倒れて、頭より背より腋より、冷たき汗熱き汗寒き汗、瀧の如くに湧き流れて、稍一時が間は我さへ覺えず戰慄いたが。不思議やな、其の戰慄が息むで、怖畏が退ると、打て飜つた爽然たる神氣。陰雨の初て霽れたる如く、暴風の遽に歇めるが如く、曉の鷄の一たび叫むで、魑魅魍魎の消失しが如く、心も實し、腸も洗はれて。何さま妾は菩薩であるか？菩薩に作つたら這麼氣も爲るか？這般な氣分の爲るのを、那の菩薩とも謂ふので有るか！と彼女は朧氣ながら胸臆に感じて、夢の如くに、

「ま、妾は何爲たのやらう?!」

「ほう。逆上も些と鎭靜いたか。――人間らしうも爲たかの。」　と和尙は猶泌々と輕の面を注視て居たが、

「什麼じや、引導、――受領たか喃。」

輕は言語も爽快と、

「あい。今ので、甚麼やらな、胸も清涼うと。妾や佛樣の樣な氣に……。」

「はゝ頓悟かい。いや引導も恁う効驗があれば醫者も不用ぬは。はゝはゝゝ。――可いえい。其で其の病氣も治癒つて、過去來の罪障も消滅か。はゝ小てい菩薩の普賢の一體が出

來たのじや。――然たが其方は、既う菩薩じやぞ。菩薩と云へば大慈悲を本願として、衆生を濟度せにや協らんがの、其議は什麼じや。」

輕は怪訝な顏、

「慈悲とは何者いな？」

「や、慈悲を知らぬ菩薩も窮るが。――其も可い。早う言や慈悲とは恁うじや。命を棄て、他の爲に爲る。難義を救うて、身を惜まぬ。と云ふのじやが、――其方、其れ出來るか喃？」

「ふう。――一命なぞは妾や要りませぬ。要ぬから死たいと、引導も受けました。――が、其樣に言はしやる御前はえ？」

屹と瞻上げた新發意の此の菩薩の慧眼は、敏くも這の老和尙を甚麼の黠賊と看破らしい。

（十五）

「御前はえ？」なる此の女子の問訊に對して和尙の笑聲は忽地高まつた、

「あッはゝゝゝ、何者と見ゆる喃？」

坊主は確に坊主だが、其の坊主の爲體が分らぬ。と彼が哄笑ふ程彌其眉を顰めた輕、

「然て、何地から御在んした？」

「さあ、何地からじやか？」

「何用じやてゝ？」

和尙は手を拍て、頭顱を圓めた、

「忘失た！――何用じやらう？――憶起いて呉れ。」

輕は眞實呆れ返つた。我が用事を忘失て了うた。此方に「憶起いて呉れ」！甚麼たる他を痴呆にした言！倘くは狂僧かと想つて見たものゝ、否々此れは然樣では無い、猶且曲者！大抵は那の吉良奴から落籍に就ての間諜者。と氣附いて見れば甚麼の阿房くさい、些と此方からも揶揄て遣れと、

「あゝ憶起しました。此方の用事は、妾をあゝ狼の餌食に爲る。――然樣でござんしよ？」

些とは恂乎とも爲るかと見れば、憎い程平氣で、

「あゝ然樣じやッたか。あゝ御身は好う物を記臆て居る。何樣落籍じや、然たが落籍は――お主、本望じやろ。――其の餌食に成る……。」

「あい。本望で。――兄樣も嘸ぞ喜ばしやらう。――妾の兄樣はな、赤穗の御家來で、此

中腹切て死なしやれた！」

「おゝ然樣かの？――其兄は又た何故じやて死んだ喃？」

「殿樣へ忠義の爲たいとて！――妾は其の妹でござんす！」

「忠義の爲うとて徒腹切つて死ぬ。――犬死じやな。――犬死の妹が老狼の餌食に爲る。至極妙じやの。」

「妙じや」とは甚麼たる挨拶！輕は餘りの腹立しさに泣出した。

「はゝ泣菩薩？苟にも菩薩衆の泣くちふが有るものか。菩薩の行は今も云ふ身を捨つる。な、大慈悲じや。其が爲には鬼に咬れたも、飢の虎の腹を肥されたも何程もある。況て老狼の餌食なと、甚麼でも無い。

で、餌に爲る喃。然もあれば死にやれた亡兄も忠義が立てば、殺された亡父も佛果を得る。喃。――唯だ其もその其許が心一つじやよ。」

阿呀、此の坊樣、奇異な言？と輕の耳は聳立られた。和尚は急に端然と、

「其方は什麼にも不幸な身じや。――然しこりや凡夫の眼から見た不幸の身で、其爲に菩薩衆の列に入られたは、俺方から云ふと幸福の軀じや。一人出家すれば九族天に昇ると云

ふが、其方が眞正の菩薩に作つて、了悟を開いて、身を捨て、難行と云ふのを厭はで、飢た那の老狼の餌食と爲れば、九族かや、其の一家中の多勢の士が、成佛の方便といふを得るのじやが……。」

「え？其樣な人？」

有らうとは思はぬが、萬一有つたら、と急に其涙を拂うと。

「ハレ其方の怜悧にも似ぬ。つゝ其邊にじや。」

「其りや貴僧、眞の事……。」

言ふ時廊下に跫音が動搖々々々々。

「さア何處じやな〳〵。身が參る〳〵。案内せぬか。こりや疾うせい。」

板張の板を踏破る程な騷動を爲せて、簀戸を瓦落利と、跟々と轉げ込ひだ醉倒漢が三人程。

「やあ御座つた〳〵、此が安阿彌の本尊樣か。成る程〳〵、此は非凡いぞ――。」

「いや貴公等は退け。――や、もし浮殿か。御聞も及ばれたか存せぬが、拙者、今回、其許が御名を聞き傳へてな、遙々關東から罷り上つた竹野右市じや。――仔細あつて主人名前は申されぬが、結局は恁うじや。其許を側妾――部屋にして見たいと仰せらるゝ。――

右の趣き、其の、亭主を以て申し入れたが、今以て御返詞下さらぬ。仍て件の如くの推參じや。喃、惡しからず。」　と頭を下げて、

「で、御挨拶は如何でざるかな？」

少婢が運ぶ燈燭で見ると、一人は布袋の土佛。跡の二人は眼の眸乎とした可厭な奴！

（十六）

臙氣ではある。所謂る雲居の餘所なる初時鳥の音をちらと漏したに過ぬのでは有るが、俄に幽しく、賴憑しくも爲つて來た此の坊樣の口振では、其の「其邊」にと云ふ其邊の人とは猶且山科の大石殿で有るらしい。然て見ると、此の坊樣は、兄樣の折節行かしやれた那の紫野の其の和尙樣かな？道理こそ父樣の變事も知て居やしやる。其の何も彼も御存知の方丈樣が、二度三度と御足を運ばれて、妾に、老狼の餌食と爲れ。身を捨て菩薩とかに作れ。難行苦行しろ。然すれば九族は愚か、一家中の多勢が成佛の方便と爲る。――其の成佛の方便と云ふのは甚麼じやゝら分曉ぬが、大概は那の計畫で有ろ。然らば妾に嫁妾になつて、其の一味の衆の誘引を爲ろ。本望の成佛を遂げさせろ？！はゝあ解めました。其で兄樣も忠義が立つ。父樣も無念が晴れる。犬死が討死に爲ると言はしやるのじや。可い〳〵。又た

此の輕が彼方へ行んだりや、誘引は勿論、屋敷の人數、備立、何から何まで透見いて遣る。父樣兄樣妾までの三人前の働きを爲て見せる。成る程妾は幸福者じや。三人の忠義を一人で爲る！もう〳〵〳〵斷食などは七里見敗！飯も食て、酒も飲んで、天晴れ御役に立て見せます。兄樣も父樣も冥途で見て居てやゝ！

涙も拂つて、疲勞も忘れて、莞爾との笑顏。

「如何でざるな、其許が御返詞は？」

松原佐仲の右市は恐る〳〵促すと。

「あい。御話は聞きました。行きやんせう。妾なて宜いならば……。」

「此は〳〵早速の御承知か。辱けない。――就ては善は急げでざるで、今晩にも。」

「待たしやんせ。妾は遊女じや。遊女といふは義理固いもの。落籍には落籍の儀式もあり、又た馴染んだ人樣への盃もある。見事にして行にませう。」

「へゝえ？」　と佐仲は先づ度膽を抜れた。成る程這奴、其の三平の妹とある丈け、言ふ語に骨が有るわえ。言ふ語の骨は尙可いが、其の馴染の客といふ、此は何處の馬骨であるのか、一應訊究さねばと、

「何さま儀式、承知致した。但し、馴染とは？」

「ほゝ此方樣は、狎客と云ふてと知りやしやらんかえ。——狎客とはな、情夫の事……。」

「えゝ情夫が？！」

「あい。でざんすえ、情夫は苦勤の何たらいとは昔から言ひますこと。——妾じやていゝ遊女でござんす。」

天狗礫と云ふものゝ如くに來る彼女が氣焰は當るべからず。其でもと漸く一つの小楯を見附けて、

「然し御身は未だ、其勤といふを爲されぬと……。」

「おゝ不粋！」

鐵槌一擊！粉盤附けられて佐仲等は頭を抱へた。輕は透さず、

「勤せぬていゝ情夫持ぬといふ法は有りや爲まいがな？——喃、貴僧。」

和尙は問れて、唯だ微笑てゐる。佐仲も餘義なく苦笑。

「いや、挨拶じや。が、其の情夫とお言やるのは。」

「聞て、什麼のや？」

「我等主人は洒落た御人　彌其許が其の情夫と云ふなら、其人に御見繼も爲されやう、又た是非配たいとお言やるなら、世間で云ふ侍冥理、三日なり手許へ置かれて、扨て其方へ緣附の叶るかも知れぬ。其は又た右市、所望に依ては好樣に計らうで。先づ名苗字を仰せられい。」

「おゝ嬉し。——ぢやが妾は其人に配偶たうもでざんせぬ。年齡も差う家內樣もある。立派な息子衆。行でからが突這の石、居物じや無うて邪魔物じや。で、妾はさら〳〵其樣な氣は無いが、唯近來の浪人衆でな、勝手不如意じや。其の今言はしやれた一生の御見繼。——然無ければ何處ぞの好口へ扶持方の御肝煎。——何方やら御前御主人は妾は不知ぬが好い御身柄じやと云はしやるで、其が倘し然樣ともならば妾も安堵、——何寄りも嬉しう思ひます。其れ受合うて下されば、名前じや無い、當人を此家へ呼んでな、妾も其の別盃して、主樣へも御面識に爲せますがな？」

「容易い義じや。然らば早速……。」

「ぢや、今程迎人をな。——其の名前だけ一寸と今言うて置きませう。あの山科に居やしやれる大石內藏助。——赤穗の御浪人！」

「呀 大、大石ど、の?!」

（十七）

現在の仇家の片塊、吉良上野の公用人たる松原佐仲が面前に大石を喚ぶ。其の口實は什麼あらうとも、其の所作に於ては極めて突飛である。痴呆た所爲である。女子の淺薄とも、向不見とも、所謂る輕率な輕の擧動と之を批難ねば叶らぬのである。餘りと云へば馬鹿々々しい！

雖然も彼女が肚に爲つたら、又た此の向不見の擧動を敢て爲て、大石が眞正の心底と云ふのを確と鑒定ねばならぬ必要も有るのであらう。此は今の場遇として、亦た彼女が爲に恕目に見て遣らねばならぬ事情がある。——事情とは甚麼？

彼女は今、行方も知らぬ御僧の爲に種々と說かれて、竟に身を捨て、仇家の屋敷の間諜に——と迄心を決した。決心は爲たが、其は世に云ふ片想である。此方一人で然樣決めて居ても、先方も果して其通りに思つて居て呉れるのか、什麼か、是れ太だ覺束ない疑問であつて。萬一夫れ此が然も無からんか、自分一個が好個痴呆を見る。兄樣や父樣の忠死も義死も有つた事かは、依然犬死は犬死、徒爲は徒爲に爲つて了ふので、一向詰らぬ。此が下

世話の入佛事！

入佛事は誰も否。徒爲は難有くない。於是此の疑問を晴すのには、方今の場合、唯此の佐仲輩との彼が對面、其を傍から觀る、其の手段ばかりで有る——と彼女は思考つた。尋常ならば、夜半人無く私語の時と云ふのを利して、纏綿なり、綢繆なりの機に托けて、此方の心事も打明かせば、彼方の心底も熟と聽取る、其が當然の順序ともあらうが、目下は然う行かぬ。其の間暇が無い。彼等は決着を今晩にもと云ふのである。其の金を與して證文を主人から受取られゝば其ッ限り、此方の軀は最う彼奴等が所有。然ずれば逢ひたいと云ふても逢はれぬ。況んや對面小向の談判は先度で懲りた。此方は涙の眞身で云ふのに、先方は大欠伸！侮辱られたのである。振附られたのである。其爲に癇も發つた、絕食も爲た。最う彼樣な目に再度遇ひたうも無ければ、遇つたとて益にも立たぬ。其よりも今回は多勢の中の目張競で。と此の咄嗟の思案から、便ち詮義ない此の事情から、或は突飛と氣は附いたかも知れぬが、彼女は大石に此の最終の試驗を施して、次で最後の宣告を下さうと心大いに待構へたのである。

此間に酒は始まつた。輕は素より不喫ぬ口、況てや今夜の大事なる裁判官とて流石に胸も

動悸くから、病氣と云ふので一滴も飲ぬ。唯だ薄粥の僅少を口にして、枕を力に軀を支へて居る。和尙を見れば、寂然不動、壁を斜めに禪定の三昧にも入たかの容。總ての體が「葵の上」を世話で行つて、此に今怨靈の內藏助が、梓の弓ならぬ迎への駕に乘せられて來ると云ふ圖柄！

「內藏樣かえ」

「おゝ浮か、其許はあゝ落結じやとの？」

內藏助は其の座敷に入るが否、輕が傍へべたりと座つて、其顏を見て、其手を把つた。

大石內藏助！名を聞いてさへ身の竦む其の大石が目前に現はれたのであるから、佐仲はあッと、手に持つ盃をあはや落さうとして、艱く取り止て、可恐可驚の眼を晃かして慌たゞしく其方を睨むと、個は什麼、鬼かと猜思た其者は、泣て居る。着てゐる衣服は甚麼か知らぬが、緋盡め！華麗々々しいのと、馬鹿々々しいのとに先づ目を奪はれた。

「內藏樣え、妾は好い方への身が落着了うて、江戸へ行にます。萬望御緣も此れ迄とえ。」

「浮、そりや本氣のか？え？俺が方をば此迄とは？」。　と、大石は頗ぶる勃氣の、聲をさへ震はした。

此位ゐ興多い觀物、實の有る演劇は近頃見た事が無いのである。江戸屋敷への土產には、西陣の織物より、染物より！彼奴抑も此から甚麼事を言出すかと、彼等は目と目で、固唾と酒を一所に嚥む。

と、輕は術無氣ながら、底心には冷笑てでも居るかの容子。

「そりや其の述懷は道理じやがな、妾じやて、何時迄も袖褄取ても居らりやせんでか、——去にます え。」

內藏助の首は見るも哀れ氣に頸垂れた。

「去ぬけどな、そりや又た主樣の爲でござんす。——熟う考へてや。主も以前は歷然とした御侍樣、今も世間で種樣と評れしやんすに、妾見る樣な娼妓の情夫でゞもでざんすまい。況て御家內はある、坊樣はある。眞實いふたりや妾も見居が無いやでなあ……。」

「あゝ、」　と內藏助歎息をした。

「仍てに妾は此樣に依賴んでな……。」

と、言ふ時にのゝ〳〵と佐仲は出掛けた、

「あいや內藏殿、御名字は豫てじやが、御目に掛るは初回の竹野右市、不思議な緣で浮橋

の落籍に立ちました其じや。――御近附の盃一つ……。」

其には目も懸けぬ大石は首掉を掉つて、

「否じや〳〵。彼樣も此樣も無い落籍は內藏助不承知じや。」

佐仲も呆れて手を控えた。初回は有繋に此態が術かなと思つたものゝ、今は其の心から底から、根本からの墮落と見たので、呆れるよりも寧ろ笑止――と云ふ意も泛むで來た。

（十八）

笑止の意味にも二種がある。佛の笑止は衆生の愚惡を慈悲の眼を以て哀憫むのであるが、凡夫の方は、不安で無ければ、輕蔑だ。卽ち大石が此の愚惡の態を見て、不安の念を懷いたのは輕、輕蔑の擧動を初めかけたのは佐仲。輕も其の所作の餘りなのに呆れて、愛想もこそも笑止も失せて、「此は彌其の本心が無いのかな？」の疑惑に墮ち掛けた。

「いや內藏殿。」　と佐仲は俄に揚胡坐の傲然たる頤を撫で〳〵、

「愁傷は察し入る。落籍の不承知も道理じや。然程愁傷なり不承知ならば、此の落籍、貴所が爲されい。狎客の廉で讓りも申さうが……。」

內藏助は差俯向くこと稍小半時。

「あゝ、金が敵じやよ！」

「ほゝう、金が敵と爲つたか。貴公は吉良家を敵と狙はれると――豫て聞いたが哺。」

「金が敵でござるでよ！」　と、其に應ふるでも、應へぬでも無く、慨息交りに彼は呻唸た。

「有り樣はの、こりや大石。――これなる浮橋が依賴での。」　と一方はもう下司扱。

「貴公、浪人の揚句の放蕩で、苛う手許も不如意なさうな。で、有附を搜して呉れい、扶持方を貰う肝煎せいとの御無心じや。――何が容易いこと、世話して進せうとは此方つい受合うたが、其に爲てもが本人たる貴公が料見、其の決着じや。な。――貴公、彌其氣が有るか。」

三人が眼は齊しく注凝だ。輕さへも其面を凝視ると。

「はあ、拙者、有附と？」　と、大石は初て仰向いた。其口は呆閑と開いてゐる。彼等は一度に囃し立てたので。

「はゝはゝゝ、いや御面相！結構な侍々。いや結構過ぎて侍には些と勿體ない。――や、好い役がある。貴公、其役如何じや。」

口々に喚くのを、惡謔すとも心附ぬのか、彼は眞面目に、

「はあ、何役かな？」

「はゝ別でも無い。今度此の浮橋殿、拙者共供して下るに附いては道中も日數が費る。其間無聊じやな。いかう寂しい。其寂しいの伽する爲に、何と貴公、其の幇間なされぬか。——其の痴面で。」

「成る程！」　と巨口開いて、

「あッはッはゝ。こりや出來た。面白い！」

掌を拍て額を叩く、其大石が手に武者振り着たのは輕である、

「こりや此方樣はへ！」　と半分言つたが、彼女はもう其口惜しさが唯の一杯！後句さへも出ぬのか、よゝとの嗚咽。

阿呀と突退けた。大石は實に内心、其面色を變るまでに錯愕いたので思はず取て突斥たが、

「何惡戯をるじや。這の、他人樣の面前！」

其聲は或は顫へたかも知れぬ。兎に角「他人樣の面前」と云ふ語に彼は滿心の力を籠めたが、眞に遣る瀬なき彼が惣身の冷汗は、額から腋から泉と湧いた。

言ふにも及ばぬが餘りに無念な所爲では無いか。此の内藏が此の苦惱い肚裏の駈引を這女は甚麼と思うので有らう。固より木片！恁る齒牙にも値せぬ痴漢輩ではあるものゝ、其痴漢輩が目下は大事の太切な敵！卽ち這奴等が其の注進と云ふので所謂る「用心の門」が、開けられも爲れば、閉られも爲る。其の開閉は我大事の成不成に大關繫で、其を意の隨に爲せうと思へばこそ此の内藏助は、馬とも做る、牛とも呼ばれる。其を此處で利害ぬ愚痴、無益の意地、若くは秘密の片端だも漏泄されもせば其ぞ百日に刈つた萱、從前の苦心も辛勞も手配も、唯だ一朝の灰燼！吁、奈何とせむ。南無故殿尊靈！弓矢八幡！萬望彼女が身に、其心裏にも分入り給ひて此の急場の難を！——と彼は其の暈眩む計りの眼に屹と視れば、

難有や、其の尊靈の冥助か、神明の訶護か、輕が應答は至妙であつた。

「妾が情夫じやに其樣な所爲……！」

彼女は猶執り着いた儘で泣く。

「あはゝゝゝ。」　と猝に笑出した者がある。誰かと見ると、彼の和尙。

「はゝ言うた、言れたは！身が情夫には其樣な所爲させぬ？甚さま近來の淨瑠璃の文句に

あるな、冠は古けれとも沓には穿かぬ、大盡は零落れても太鼓は持たぬと。——其、其の意味じやな。其を女子から言うたじやな。は、内藏大盡とやら、御果報な！

や、方々や。拙僧は浮が俗縁の僧じやがな。當人も御身樣方へ行ぬ事は喜んで居る。で、この果報な大盡やら情夫やらと、此から未練の殘らぬと云ふ別盃を暫時爲せたい。な、武士は相見交ひ、戀も情も辛抱所と云ひますの。さ、其の辛抱、暫時さつしやい。愚僧が眼張で奇麗な會釋爲せますから。さあ、——御開き〳〵。——こりや少婢や、此の三人の衆、其方へ伴れ申せ。」

（十九）

和尙が妙智の方便力に彼の惡魔共は退散させられたので輕が部屋は大風の風いだ跡の樣。唯だ其の名殘と見られるのは、狼籍たる杯盤と散亂せる器具、いや、箸に突暴された若狹の小鯛と、喰掛のまゝ放られて居る輪切の慈姑とは、無殘の亡骸を此土に遺して、恨を呑むより酒を飲された疊は、涙の露に未だ津々と濕つて居る。其等を攫去つて一掃箒いた後の座敷には、繼替へた蠟燭の燭臺が二基、新たに坐つた僧俗男女三個の面を歷乎と照らして、いとゞ羞耻しき輕が顏をば意地惡くも看せ着る如くに耀いてゐる。

眞實を言へば輕は此席には居堪れぬのである。有らう事か無躾にも大石を喚引釣て、形の如くの恥辱を與へて、其の仇敵たる奴輩に無禮不法の有り丈けを働かせた。本來ならば此の陳疏には眼前での自害、血に染みた掌を合せて拜むとあるべきだが。今は其等の劣少な談でない、最と〳〵偉大な動作を我も爲遂げて、其上にて死ぬなり突くなり、十分の謝罪を！と云ふので、彼女は用心の其邊一遍看廻した後、坐容を正して、手を突いた、

「內藏樣、唯今は。——妾、何との申し上げ樣もございませぬ。」

聞えるか聞えぬかの言語ではあるが、其の語調から舉措までが、笹屋の抱妓の浮橋では無くて、再も以前の、赤穗の忠臣萱野三平が妹の輕である。

默然として在た大石は、唯だ首頷くばかり。

「御僧樣にも、父から兄から、妾までもの苛い御苦勞を懸けました。御名前もと思ひますれど、大抵は其寺じやと存じて故と今は伺ひませぬ。唯だ此上は、父兄の供養から、妾への御回向。——只管賴み上げまする。」

と、彼女はほろ〳〵と泣く。

「むゝ、熟う得心じやの？」

「はい。〻、もう妾は貴僧様御弟子。今の内藏助様の御詞の「他人前」こそ遊女の浮とも吉良が妾ともござりませうが、精神は！」

と、彼女は泣く〳〵起立た。何事を爲るかと大石も和尚も看戍ると、輕は傍邊の鏡臺の懸筐の底から手快く取出したのが一梃の剃刀。物が物だけに和尚すら驚いた。

「甚事爲やる！」

と大石も起立うと爲る

「御騷ぎには及びませぬ。唯妾の覺悟と申すのを！」

言ふなり彼女は、自個か滑下した髪の下端、五寸が長をすッぱと斷て、燻き古た伽羅の香をとも〴〵、懷紙にくる〳〵と押包むで和尚が面前へ、

「何卒此髪を……！」

流石に悲傷いのか、双袖を顔に、平伏した儘。

彼女は尼に爲たのである。吁、生れて十九、名こそ憂勤の遊女ではあるが、未だ處女の身の彼れ輕は、戀も情も浮世の娯樂も此の黒髪と與に見事に斷絶て、父兄の一種菩提の爲に不慮の道心！其の心緒を斟酌ては健い大石も、

「むゝ！」　と腕を組むで、眼を瞬いた。

「おゝ出來た〳〵。天晴れ〳〵。如何にも拙僧が弟子に爲ませう。但し御主は既う菩薩であるが、猶佛弟子と爲るからには慈悲が本じやぞよ。一殺多生の本願を果いたなら無上菩提の修行を怠るな。――のう內藏殿や、賞てお遣りやれ。」

大石も此に初めて扇を被いて、

「輕。過分じやぞ！――亡兄が跡。御家來並に爲て取すぞよ！」

傍邊を忍ぶ低聲で告つた、其聲で扇を卽ぐ新作の小唄に換へて、雨垂拍子の胴慶聲、

「野邊の狐火、夜は燃えて……。あ、もう滅入る〳〵。別盃は濟んだし、對手は無し。もう去うぞ〳〵。――然るにてもあゝ浮。其方はのう。――江戸三界へ行んして!!――あゝ大石內藏助、明日は坊主じや！」

（二　十）

大石內藏助、京都の秋も面白けれど、近來酒浸りの氣分勝れず、兎角は物種の軀體と一命の有りてこそ。足腰の未だ自由の利く中に寛々と有馬の湯治、猶出來得べくば嚴島の見物、源平の古戰場、長崎にも航りて咄にのみ聞く唐人の噺語をも親しく耳にして、家土產の一

品に仕入れて來むとの毎もの諧語で、留守宅をば近所に托けて、主税一人を伴ひて、八月の初旬に山科の僑居を飄然と出た。

其の近邊の男女の親しきは、伏見の船場に迄も送つたのである。然らば〳〵。賴み申すぞ。御早うお歸宅や。道中を御無事で。の聲を交して彼は夜船に乘込むだが、果然彼父子は其樣暢氣な、長崎から鬼の迎者でも受けたのか、焉んぞ然らむ、其の迎をば受けは受けたが、其は長崎では無くて江戸からである。〳〵の捗取らぬながらも敵の樣子細々との或る文が來たからである。平たく云へば卽ち其は輕が二度目の注進。其の注進の旨趣に據れば、驚く！彼の「下一」といふ上野殿は、本所の「猿が島」の屋敷を發つて、「杉野」と稱ふなる其の縁家の羽州の城地へ遠からぬ中に引移られる。——恁う云ふ胸に鐵釘の報知であつた。

江戸屋敷さへもである、其の場所の前を流るゝ彼の大川は、敵に取ての倔强な要害、此方の進退には非常の不便を感ずるのであるに、其が羽州へ引籠ると云ふ。彌籠城の體とも ならば、甚麽と思ふや什麽手指が成らう？滯つたり油斷大敵！恁くと知りなば疾くにも、と悔むでも既や跡の祭。但し其文に「遠からず」とある、其一句が今は命の綱。此方の一

舉は唯だ其れ以前に、と中々唐人の囈語どころでは無い、乘合の齒軋を父子は眠られぬ耳に聞きながら、秋の長夜をやう〳〵と明近くなる頃に着いたのは大阪の三軒屋。其から卽〻に歩を向けたは豫て案内を通じて置いた天野屋が家！

其の奥座敷には、當地は固より、京堺奈良尼が崎よりも、此日を期して會り來れる一味の義士五十幾人。大石を座長に、奥野進藤原河村、小山吉田小野寺を老輩として、壯士の向には堀部潮田岡島間、武林貝賀の如きは最う血眼の、羽あらば宙を飛でもの氣色で居る。

此の意氣旺せる最中に於て其の議事は開かれた。

議事は簡單である。又た簡單ならざるを得ぬのであつた。卽ち時日は迫つて居る。議題は唯だ此の人數の關東へ下るに、陸路より爲ると、海路を取ると、單其れ此の二條。——では は有るが。彼大石の今や肺腑を苦悶めるのは、其の人數配りで、所謂る陣立の前後である。

此の議論が決めて暮しかるべき者、其を壓止るには俯るか反るかの、一大英斷を下さねば、或は協るまい歟、と彼は初手より考慮て居る。

咳一咳、睨一睨、彼は「今に始めたる事でおりやらぬが」との前提で。凡そ軍陣に臨むには法令の嚴肅を要する事、兵の進退は唯だ主將の約束に隨ふべき事、其餘の要領四五箇條

を仔細に言聞せた後。諄々として其の手配、――此の手配に府内、街道の兩樣ある事、卽ち先陣、二の見、三の見、遊軍の四樣に其隊を分くる事等を命令して。更に其の人數組の書附を披露に及むだ。爰處が其の一大危機！

果せる哉、其座は活と紛擾を立つた。「内藏殿！内藏助！」の叫聲は四隅に發つた。中には最う堪らぬからと云ふ體で、詰寄せるも有る、押掛けるも有る、膝頭に其膝を突蒐る迄のも有つた。

「内藏殿。曲もおざらぬわ。我々は那の血判甚麽で爲ました。唯だ彼の首に此の白刃が攫てたい爲！其を何事じや二の見じやとて、宇都宮の鬼怒川の渡場に埋伏じやと云ふ。――先陣の江戸屋敷に對うた衆に其の手柄せられて了ふたりや甚麽と爲ります？餘り無慈悲じや。」

憶へば此の苦情も道理ので、大石が其の隊配に據れば、一味の連中、江戸京大阪奈良堺等を合せて今は總勢九十餘人。此中四十幾人を先陣として、大石自ら大將として彼の屋敷に向ふ。雖然も輕が密告に據るも、又た其餘の注進にて見るも、仇家の用心は極めて嚴重いに、更に他所から來援の惧れもある。恁れば此の先陣にして果して本意が遂げらるべき歟、

優曇華の花見が成るべき歟と云ふが肝要の疑問。其の疑問に對するものは、卽ち二の見、三の見等で。二の見は奥野と河村とを大將にして、先陣が一夜擊の後、吉良殿、倘し羽州へ引籠られなば、其の途中なる彼の鬼怒川の渡頭にて待つ。三の見は小山進藤を頭人にして那須野にて擊つ。遊軍は絶ず此等の後背に引添うて、三隊共に敗れなば、板谷峠の切所に待受けて其の不意を襲うと云ふのであるが。何樣、其の先陣にして功を奏しなば、二の見以下の三隊と云ふものは哀れや椽の下の力持、他人の爲に嫁衣裳を作るの無駄骨折に爲て了ふ。不平を鳴すも道理である。

道理であるからとて、此を容可せば、我が策略が危殆くなる。犬骨折て鷹に奪らるゝと各位は言されども、其犬か有るからこそ鷹も禽を取る。衣裳を襲へて與れる女が有ればこそ嫁入も能る道理、孰も是も其の忠信の眞心は同一。況んや影武者たる御自分等の功勞は、面に立つた先陣の士よりも幾層倍か、故殿尊靈の御滿足も何程で御座らうかと、内藏助、辭を竭して曉諭て見たが。其の不承知は血氣に逸る壯士のみで無い、奥野小山の老輩の中にも倒々ある。

「是非もでざらぬ。拙者の不肖。然迄に異議のみ申さるゝなりや！」

と大石は暫時沈

黙た。

「計議の變替を是非に所望じゃ！」　と一人は又た逼つたのである。

「變替は云ふに及ばぬ。盟約の全部を破却申さう！各位――然らば！」

此れ視よと言ひも果ぬに、彼は再び懷中より彼の神文の連判を撈り出して、傍邊の火鉢の烈火とある中へ投入れた。

阿呀と吃驚いたは奥野と進藤。河村は辛くも其を取り上げて、

「内藏殿、誤つた。我等が不埒。――以後御意任せ……。」

既に灰燼とも爲んとせし連判狀、其を猶睨詰めて居る内藏助が火の如き巨眼。双方の煙に捲れた一同は唯だ悟伏して、

「不處存。　不心得。　誤り入りまいた。　御免されませ。」

賴みある中の酒宴を諷つて、其處へ銚子と盃とを持て出たのが主人の利兵衛。

「も御異存も殘りますまいに、御手筈も殘らぬ。旋ては御本意殘る方ない明日の御鹿島立。――めでたいに一盞盡されませ。」　（大尾）

大石良雄（後篇）終

本書特色

▲白哲珠の如き纖手に絶代の豪傑豐太閤を嬲弄し未だ飽足らずして更に掌を伸べて六十餘州を握らんとしたる女丈夫淀殿が半面や如何に。

▲夜半雨瀟々として蘭燈影淡き下、滂沱として下る數行の紅涙は抑も亦た誰が爲めに灑ぐものぞ。

本書特色

時代に精通し、行文に老練なる者は個中の消息を叙して、最も明細を極むるものあり。

然れども本書を以て單に女丈夫の生涯を描ける單調の物語となすは甚だ愚なり。嫻眼の讀者各位希くは、事實と寓意との鍵を本書に於て探り給はんことを、これや本書の齎すべき興趣たればなり。

塚原澁柿園君著

塚原千種女史畫

淀殿第一編 定價七十五錢 送料金八錢
淀殿第二編 定價七十五錢 送料金八錢
淀殿第三編 定價金一圓 送料金十二錢

讀賣新聞 批評

▽著者獨特の書きかた何人も眞似のしやう無し、美貌花の如き十六歳の乙女茶々の、秀吉に見出されて其の寵を擅にするに至るの發端より淀君の生涯を描し、彼女が負け嫌ひの、一風變りたる女性たる強情の、一風變りたる女性たるを現して趣味更に深し。

東京朝日新聞 批評

▲老練圓熟時代小説を描出して當時殆と匹儔を見ざるは塚原澁柿園の手腕なり、淀殿の一編、內は精悍娼嫉、外は妖艶阿娜たる淀君を描き豐太閤の姦落豪邁、石田治部の機智巧慧、局待從の細心苦哀等皆よく人格現はれ活躍し、作者の才筆縱横に走る。

明治三十九年九月二十七日印刷
明治三十九年十月　三日發行
明治四十一年二月廿五日四版
明治四十一年八月一日五版

大石良雄後編奥付
定價金七拾五錢

著作者　塚原澁柿
發行者　平山勝熊　東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
印刷者　武廣和雄　東京市京橋區宗十郎町十五番地
發兌元　株式會社隆文館　東京市京橋區南鍋町一丁目
賣捌所　全國各地書籍雜誌店

不許

（東京國文社印行）

好評嘖々

小説 筆子

菊池幽芳君著　鏑木清方君畫

筆子は現代文壇の雄鎭、家庭小説作界の明星菊池幽芳君が心血を灑きたる一代の傑作なり、豐富なる構想を配するに靈妙濃艶の筆を以てし彼女が波瀾多き戀愛の徑路、曲折深甚なる人生の慘目愴情を描いて、實に深刻精致を極め、讀者をして恍惚として篇中の人たらしむること斯の如きは、君の前著中にも亦類を見ざるところ、此篇今や美裝を凝して世に出づ、明治文壇の大作と稱せらるゝもの或は皆其光を失はんと請ふ速に一本を購ふて其眞價を知り給はんことを

クロース表紙金銀色活印
口繪精巧木版數十度刷
初枝之卷、筆子之卷
定價各金九拾錢
郵税各金拾錢

小説 賣花娘

幽芳君著　清方君畫

新式洋裝美本
菊判全壹冊
定價五拾錢郵税八錢

賣花娘の一卷其名既に可憐なり、之れを描くに著者獨特の艶麗纖細の筆を以てす。讀み去り讀來れば花顏の娘子楚々として書上に躍るを覺ゆ。花や花召しませ花の糸櫻。都大路の朝風に聲おろ〳〵と呼び行く乙女子の上に一片の同情を寄せ給はゝ、須らく其の花籠の一束を買ひ取り給へ。

東京　隆文館　發兌

好評嘖々

小説 式部小路

泉鏡花君著　鏑木清方君畫　新式洋綴美本

定價金六拾錢
郵税金六錢

鏡花君は我文壇の鬼才也一夜に幾行を草し、其文一々神韻珊々として、玉の如く鳴る而かも此篇は君が多大の苦心慘憺の裡になれるもの、君が在來江湖に問ひたる作物中の隨一也、美人出れば月の芙蓉花の如く鮮に、丈夫現はるれば眼に碧玉を胚んで金城の建てるが如し。寔に是れ一代の傑作也。

小説 麗子夫人

小栗風葉君著　鏑木清方君畫

總クロース表紙　前後二冊
裝釘粹麗　定價各六拾錢
口繪精巧木版　郵税各八錢

「麗子夫人」は小栗風葉氏最近の傑作なり　「麗子夫人」は絢爛にして凄艶なる著者獨特の才筆よりなる　「麗子夫人」は最清新にして最趣味ある家庭小説なり　「麗子夫人」は婦女子諸君の爲めに著者が滿腔の氣を吐けるものなり　「麗子夫人」は放調と慰藉とを世の弱者に與ふるものなり

東京　隆文館　發兌

草村北星君の四大傑作

濱子を磯打つ波も朦ろに霞む、花の梢の春の月となさば、『相思怨』の露子は名をわれからのみ空朗らかに冴え渡りて、見る人の心を千々に碎く、中秋の日の色とやいはまし。澄子は何にかたとへん、水鳥の音も身に泌む池の面に宛から凝る眞冬の月の凄ましきはそれか。いづれは、人目も草も枯れ果てたる冬枯の野邊に一點の火氣、生氣を添へたるは詩人北星の血、熱情、涙、あはれ、とりぐの趣を賞で給へかし……（湘南の友なにがし）

相思怨　定價七拾五錢　送料金八錢

露子夫人　定價七拾五錢　送料金八錢

澄子　定價六拾錢　送料金八錢

百合子　前後編各金七拾五錢　送料金八錢

村上浪六君著　宮川春汀君畫　洋綴最美本

小說　元祿女　前後篇　定價各四拾五錢　郵稅各冊六錢

女は氏なくして玉の輿とやら云ふを、之はまた北國名門の息女と生れて花も實もある妙なる姿を迎へらるゝ、黄金の臺にも乘らず、威武に屈せず榮華に迷はず、時の大老を敵手に取つて、君父の爲に滿腔の氣を吐く事萬丈、遂に玉と碎けし露女が昔語り、浪六子の筆に描き出されて元祿ぶりの振袖姿凛として艶なり

物集梧水君著　鏑木清方君畫　洋布裝釘

小說　罪の命　全一冊最美本　定價金八拾五錢　小包料金八錢

一は花柳の巷に育ちて艶にして俠、一は深窓に育まれて麗にして温、艶と麗と双手に翳せし駒次郎の艶福は羨む可き乎、否乎。生兒夭折して麗人の容顏陰雲漸く滋く、家庭の平和は將に落寞たらんとす。吁、廻る緣の終はありけり、一葉落ちて軒の梢寂しく秋の夜は長し。

發兌元　東京京橋區南鍋町　隆文館

農學士富益良一君　田中萬逸君共著

草花栽培全書

總洋布製美本
口繪石版刷四枚
挿繪數百個挿入
定價金六拾五錢
郵税金六錢

自然を樂しめ

紅白紫黄、種々の彩花競ひ咲きて觀者をして醉はしめんとするもの是れ實に花壇の眺なりとす。暗よ!!紫淡き花菫は若き少女が秘めたる戀を其の色によりてわづかに顯したらんが如からずや紅濃き牡丹の花は希望に充ちて青春の血燃えに燃ゆる若人の面影にも似たらずや。若し夫れ花の殿後たる黄菊白菊に至りては之れ銀髪痩身の老翁の俗界の責務を了へて仙境に隱退し悠々餘生を樂しむの夫れか。花いろ〳〵、さま〳〵、各それ〴〵の特徴を具へて盡きざる思出の種、絶えざる慰藉の泉を人の世に與ふるもの是れこの草花にあらずや。本著は即ち此美しき優しき草花約二百種の栽培法を簡易流達の筆を以て懇切に說きたるもの、敢て江湖園藝家の座右に薦む。

發兌元　東京市南鍋町一ノ二（振替貯金口座八五三三番）　隆文館

遲塚麗水君著
宮川春汀君意匠及畫

小說　舞扇

紫紺に金泥の秋草や描きけん、うつり香なつかしき舞扇にはちく〳〵と置く佳人の紅涙、なに薄命の怨なるらん、まことや舞殿の冷袖雲となり、雨となり、歌臺の暗響、花となり、鳥となるとかや、人轉變極まり無く、情緒纏綿をだすに由なし、物思ふに立ち餘ふ可くもあらぬ身の、袖うち振りし心知りきや、いかに諸君、此心知り給へりや、

菊判約三百頁
總洋布製美本
定價金七拾五錢
小包料金八錢

波邊默禪君著
宮川春汀君意匠畫

小說　玉取姫

身は狹斜の巷に育ちて世の汚濁に馴染むも、心は清き花蓮の香を知れりや、よし醫す秋の絃歌の氣に溺るゝあるも、操は郎のほかに許さじ、傾國の美妓あり、名は小三風にも堪へぬ優さ姿を捧げて、郎が報國のために肺肝を碎く、南國橋畔の假寓風襟を洩れて、うたゝ翌朝の雨を偲ふ時君は今何處にありや、遍歷一聲孤閨寂し。

前後二冊
洋裝最美本
定價各金五拾錢
郵税各冊金六錢

海賊大王

定價六十錢　送料金五錢

庇髪

定價五十錢　送料六錢

稲岡奴之助著君　◎　宮川春汀君著

卷中變身術の一節

疾風電雷の如しとは正にかかる時の事をいふにやあらむ、ソレといふが否や、予等一行六人は素早く旅装を調へ、直ちに此紅青を見捨つべく旅館の馬車を驅つて中央停車場へ駆付けぬ。時に午後六時五十分、發車の時刻までに尚ほ二十分を餘せり。

庇髪の一節

枕橋にてヒラリ馬車より降り、洋杖片手に嫋嬝たる花の下を歩めど彼の心は花を見るにあらず、若しや屐子に出會ふことゝやと唯其ればかりを樂みに、行違ひ擦れ違ふ者の眼をつけて更に油斷なけれど其れかと思ふ人もなし。長命寺の門を入りて彼方に通り抜けんとする時「もし鷹野様……

鳥海嵩香君著
宮川春汀君畫

人の罪

定價金八拾五錢　送料金拾錢

『人の罪』は數百金を懸けて大阪朝日新聞が大作を待ちし選に當りしものなり。『人の罪』は正に嵩香が天下文壇に鑑識を乞ひし大傑作たる小説なり。見よ月明東に在り、其の光や靈に其の影や奇也、照し出しつ萬朶の花。雲は芙蓉の如く、露は寶珠に似たり佳人長へに艶に、才子長へに美なる嵩香氏が傑作は玆に製を凝し江湖の清鑑を待つ。

春帆樓主人著
鏑木清方君畫

白梅紅梅

定價金四拾五錢　送料金六錢

作中最後の一節

「浮世のことは、全然捨てましたけれど、お嬢様の事ばかりは忘れられませんで……」と例の調子で云ひ足した、丸兒はいつまでも丸兒でなかつた。

月は清く照り、花香しく、夜は更け渡つた。

＊　＊　＊　＊

白薔薇は美はしく咲て、竹村家はいよ〳〵幸福に……尼寺が天王寺の東に……。

好評嘖々

柳川春葉君著　鰭崎英朋君畫　菊版最美本前後二冊

小説

浮沈

総クロース裝釘粹麗
定價前編卒錢後編十錢
郵税各冊金八錢

風一陣林頭の梢を吹けば、千頼忽ちに起つて、天、月に暗く、水は呼ぶが如く囂囂たり。暫變定めなき世のはかなさを、一蓋正に浮きつ沈みつ、何地に行かむとはする。兄は血ある青年也妹は涙ある少女也。著者そが兄妹の爲めに滿腔の熱血を注げて同情の章を導ふ。是大希くは兄妹の爲めに其行衛の暗潮を照らせ

徳田秋聲　宮川春汀君畫　口絵精巧本版數十度刷

小説

病戀愛

表裝　斬新
定價　金六拾錢
郵税　金六錢

題して病戀愛といふものは蓋し戀愛の苦痛と憂愁とがはるかにその愉快と幸福とより、大にして、やゝもすれば此の人生の光明を蝕し、戀せる男女を驅つて絶望の淵に赴かしむること多きを暗示せんがためならざるなからんや。さあれ苦痛の裡、憂愁の裡なほ且ついふにいはれぬ喜悦存して、此寂寞なる人生を彩どるもの、是れ戀愛の眞味に非ずや

東京　隆文館　發兌

田口掬汀君著　鏑木清方君畫　總クロース裝釘優美

小説

情の人

口繪精巧木版艶麗
全一冊定價金六拾五錢
郵税金八錢

沈痛凄麗なる文字を以て、清醇にして純潔なる著想を彩るものは掬汀氏なり、穩健にして優艶眼を明治の新思想に着けて、具さに其の矛盾、衝突、融和の深致を描き、悲痛、幽婉、人をして泣かしめ、人をして怡ま しむるは掬汀氏獨特の手腕ならずや。本書は子が苦心の傑作にして、昆山の片玉相集りて燦爛たる光を發するが如く、玲瓏として明月の露に映ずるの感あり。

東京　隆文館　發兌

好評嘖々

小説

うき寐

小栗風葉君著　宮川春汀君畫　口繪精巧木版數十度刷

表裝　嵯新美本
定價　一冊金五拾錢
郵税　一冊金六錢

花柳界裡の女性を寫して之を良く詩化するは著者獨特の擅場なり。『うき寐』の一篇、材を狹斜の地に搆へて一點卑猥の境に涉らず。而もよく其眞相を描いて、憐む可き美人の風容目前に見るが如く、艶樣痴體盡く拉し來つて其詩趣に資す。虚と實と裏表、落す涙の眞僞は、一に讀者の推考に委かせん。

橋本埋木庵君著　鏑木清方君畫　口繪濃艶（前後二編）

小説

歌吉心中

定價各四拾五錢
洋裝頗美本
郵税各六錢

身はうき川の浮き沈み、流れのまゝに糸竹の、節しげき世を今更に弱き運命を趁ふとても、染まぬ蓮の露の珠、清き心もぬば玉の、浮世の闇にかき消されて、あはれ、戀の意氣地に倒れし、俠と情とに殉せし江戸兒藝者の面目を偲び給ふ諸賢は宜敷本書を繙き給へと云爾。

好評嘖々

小説

松嵐

（前後二編）
定價各金五拾錢
郵税各冊金六錢

大和心を人問はゞ櫻と匂ふ武夫の御國の爲に獻げし生命と西に東にさすらひて肺肝を碎く花も實もある長物語り、美人と俠客と薄命の勇婦と其間を點綴して、千紫萬紅、炮烙の委曲を極む。是正に幕末に於ける一篇の勤王史と云ふ可く、其實歴よりすれば、背て滿都の劇場に上演せられて百千萬の子女をして同情の涙に咽はしめし『玉取姫』の前編と見るも可なり。敢へて諸兄姉の一瞥を待つ。

東京　隆文館　發兌

江見水蔭君著
宮川春汀君　鏑木清方君畫

小說　海賊の子

前後貳冊　畫美本
口絵精巧木版數十度刷
定價各冊金七拾五錢
郵稅各冊金八錢

意氣沖天の勢は之を破天荒の老將軍に見るべく、剛强壯快の鋭は之を獰猛なる快水夫に見るべし、もし夫れ勁艇たる麗姫、淘命の俠美人を並せ來つて巧みに落葩流水の艶を添ふるに至つては或は壯に或は優に奔放は天馬の空を驅るが如く纏綿たるは芙蓉の雨に惱むが如く宛然之れ拔山飜海の風浪を前にして彩華艷麗の花圖を見るが如し

小栗風葉君著　松岡輝夫君畫　グローバ裝釘畫美本　口絵精巧木版刷

小說　美丈夫

菊版前後貳冊
定價各冊金六拾錢
郵稅各冊金六錢

俠人の俠麗人の麗は風葉氏一流の才筆によりて具さに其極致を盡さる。日東帝國快男子あり、鬚髯黑ふして面は白く。其活躍する處意氣天を衝て鬼神を哭せしめ、其笑ふの時優容娘子をして慕はしむ。今日世を擧げて纖緻細巧の文學に醉ふの時這箇好丈夫出でゝ初めて人意を强ふするに足る。敢えて世の諸兄姉に告ぐ新理想の日本男子にあこがれ給はゞ宜敷本書を繙かる可し。

發兌元　東京橋　隆文館

26
3157

終